

「丈人力」のススメ

〜「人生九〇年」時代を前にして

堀内正範 著 元『知恵蔵』編集長

目次

その一 はじめに あなたは「現役長生」？「引退余生」？

一 シニア期マラソン人生の金と銅 3

二 「丈人力」という潜在力を活かす 8

三 長寿を愛しむ三つの秘策 15

その二 シニアライフは国産・地産品で

一 「MADE IN JAPAN」の時代 24

二 途上国産の百均商品に囲まれて 35

三 やや高安心の国産・地産品が再登場 40

四 「新・日本型マネジメント」に活路 46

その三 高齢期二五年の居場所づくり

- 一 「エイジング・イン・プレイス」で地域創生 5 1
- 二 「三世代ふれあい館」なんていいね 6 7
- 三 生活支援コーディネーターを支援 7 4
- 四 人づくり、仲間づくり、まちづくり 8 1

その四 人生の「達人」としての八面玲瓏

- 一 まあ、いいか、でいいか 8 8
- 二 住民・市民・国民として 1 0 0
- 三 そして国際人として 1 2 5

付 三世代年表 生年別の人口(男・女)、流行語、流行歌 1 4 6

その一 あなたは「現役長生」？「引退余生」？

一 シニア期マラソン人生の金と銅

「人生六五年」時代から「人生九〇年」時代へ

*内閣府が新たな指摘と要請

六五十二五〇九〇。

「人生六五年」時代から「人生九〇年」時代へ。

つい最近までは六〇歳（定年延長して六五歳）まで働いて、あとは年金暮らしで自適の「引退余生」を送る。そういう暮らしがふつうだったのに、「人生九〇年」へと一気に二五年も延伸して、「現役長生」の暮らしが要請されている。

平和な日本で、みんな等で等しく務めてきて、その成果として得た長寿の期間。

六五歳からの二五年を、みなさんはできればそのまま現役としてすごして、国力の萎縮（デフレーション）を起こさないでください、ということか。

こんな重量級の課題を指摘し要請を出したのは、他でもない内閣府なのである。

誇るべきこの新たな課題に、国民一人ひとりがみすから回答を出さなければならぬ。

といったところで、九〇歳なんて遠い先のこと。

六〇歳の還暦より前の人なら率直な実感として、

「まあ、いいか」となる。

還暦の六〇歳の人にとっては、「人生九〇年」は三度目の三〇年。二度あることは三度ある。六〇年まではさして長くはなかった。三度目の三〇年もおよそ長さの見当がつく。ただし、今回は途中下車があるところが違う。

今年中にみんなが六五歳以上の高齢者になる「団塊の世代」（一九四七〜一九四九年生まれ）の約七〇〇万人の人たちは、年金生活にはいったばかり。ほどほどの貯蓄もあるし。こちらは、「まだ、いいか」となる。

国がその対策の指針とする「高齢社会対策大綱」の見直しは、つい先ごろあったばかり。ところが、こんな自分の人生にかかわる大事な決定を、高齢者のみなさんは知らない。

二〇一一年一〇月に、民主党政権の蓮舫高齢社会対策担当大臣（蓮舫議員が兼任の「高齢社会対策担当大臣」だったことを、どれほどの人が知っていただろうか）のもとで、学識経験者による検討会を立ち上げて報告書を作成、その後、内閣官僚の検討を経て、二〇一二年九月七日（このときは中川正春担当大臣のもと）に閣議決定した。内閣はもちろん民主党の野田（佳彦）内閣である。小泉（純一郎）内閣以来、一年ぶりの「大綱」見直しであった。

その間、衆参両院議員が何をしてきたかはご記憶にあるはず。

まことに熱心に、日々、「団塊の世代」の年金分も含む「社会保障」費の財源となる「消費税増税」というおカネのほうの議論をしており、肝心の高齢社会のありようについては、まったくくないといっているほど関心が薄かったのである。

だからマスコミ報道も閣議決定のその日かぎり、内容については多くの国民の知るところとならなかった。無理もないことだが、若い厚労省クラブの現役記者も、高齢社会対策については「認知症」ほどには肝心な問題として認知していないからだ。

「まあ、いいか」といって放っておくこともできるが、知って準備しておくに越したことはない。どこからでも遅くはないのだが、高齢期への助走期間である五五〜六四歳から見定めに入っても早くはない。「引退余生」期に到達して一度トップからミドルやロウにギアを下げってしまった「団塊の世代」の人より、そのまま突っ走ればいい五五歳あたりの人のほうが一気に駆けそうだ。とすれば、すでに「現役長生」をめざしている先輩シニア・ランナーのみなさんの後ろ姿を追いながら、習得せねばならないことを習得することになる。

「老人」って呼ばれたくないね

*一〇年余つづく「高齢社会対策」の延滞

みずからを高齢者と認めている人でも、いま通用している意味合いで「老人」と呼ばれると、

「違和感がある」

「呼ばれるにはまだ間がある」

と感じる人は少なくないだろう。

だれもがよく使う「老人」ということばに対して、ひとりの人の感覚の違和であるとともに、多くの人にも同様の違和感が起きているのは、社会のしくみの方に原因があるからだ。急速にすすんだ「高齢化」に対する国の対策が遅延しているからである。本来なら「老人」と呼ばれると、敬意が感じられるような滋味のある日用語なのであるが。

国の対策が遅延している？

そんなことはない。

社会保障も、「消費税増税」による財源の確保も、国は他をさしおいても「高齢化対策」をやっているのではないか、という厚労省官僚からの善意の反論が聞こえる。

その通りです。

しかし、ここでいう国の「高齢化対策」というのは、医療・介護・福祉・年金といった個人に対する「高齢者対策」のことではなく、高齢者意識の醸成や、高齢期の暮らしに便利で使い勝手のいいモノの製造やサービスや、安心して過ごせる居場所や、世代交流のしくみづくりといった「高齢社会対策」のことである。

一一年ぶりに見直された「新大綱」には、高齢者のだれもが知らねばならない重要な指摘と

要請がなされている。冒頭の「目的及び基本的な考え方」を読めば一目瞭然である。

わが国は「人生六五年時代」からすでに「人生九〇年時代」になっていると指摘し、高齢者意識を改めて、みんなが社会参加することによって社会構造の変革を起こしてほしいという要請がなされているのである。

実はこの「人生六五年」から「人生九〇年」へという一足飛び二五年の延伸のなかにこそ、一〇年余の「高齢化対策」の延滞（強くいえば不在）を見ないわけにはいかない。

本来なら「人生七〇年時代」、「人生八〇年時代」といった途中の段階での「高齢社会対策」の検討と呼びかけがありえたわけで、まことに残念なことだが、ここに学者と内閣官僚にはわかっていながら、歴代内閣のリーダーには認知がなかったことの明確な証をみる。

新世紀この一〇年余の経緯を見つづけてきた一ジャーナリストの立場からではないが、政治の側に「高齢者（高齢政治家）」「高齢社会」に対する軽視（強くいえば黙止）があったことは、はじめに強く指摘しておきたい。

単調でありながら長く尾を引いた政界の「世代交代」の大合唱。無理解と遅延はなおも継続しており、そのしわよせを受けているのは、ほかならぬ高齢者のみなさんなのである。

のっけからこの問題にこれ以上に深入りするのはやめるが、のちの章（p・219）に引き継いで論じることにした。

二 「丈人力」という潜在力を活かす

「丈人力」とは

*人生の「自己目標」を実現する力

はじめにここで、長い人生への励ましとなることばを提供しておこう。
思い起こしていただきたい。

あの「三・一一東日本大震災」の被災地で、とっさの励ましのことばとして飛び交っていたのは「頑張ろう！」だった。

「頑張ろう」はその後、「復興へ頑張ろうみやぎ」（宮城県）や「がんばろう東北」（東北楽天ゴールデンイーグルス。星野（仙一）監督や田中（将大）投手らと優勝までの頑張りを共有）、「がんばっぺ福島」や「がんばろう俺！」まで、復興活動のキャッチフレーズになっている。

それにもうひとつ、被災地の現場では「大丈夫？」「大丈夫！」もまた、お互いの心を支えあつて飛び交ったのだった。

「大丈夫」のなかには、被災地での美智子妃の「よく生きてくださいましたね」とともに「大丈夫！」という励ましのことばも記録されている。大きい声が必要としないでも、静かに心の深みに伝わる励ましのことばとして。

この「大丈夫」の「大」を横に置いて、男性をいう「丈夫」のうちの「夫」から二をはずしてみる。芯にあるのは「丈人」である。「大丈夫！」といったときに、心の内に包みもつ気概が「丈人」のもの。「頑張ろう！」が外向きなものに対して、「大丈夫！」はどちらかといえ、内にある力を呼びさまし励ましてくれることばといえよう。

いまや街に出れば、若者に混じって元気に活動する高齢者の姿を数多く見かける。この元気な高齢者については、いろいろな立場から実にさまざまな表現が用いられている。

「シニア」「アクティブ・シニア」「現役シニア」「スマート・シニア」「アクティブ・アダルト」「支える側の高齢者」「健丈な高齢者」「スーパージョニア」「新老人」「創業者」「熟年者」・・・など。世代としては「熟年世代」「プラチナ世代」「グラント・ジェネレーションⅡGG」や「アクティブ・エイジング」という捉え方もある。

そのうちのひとつに本稿での「丈人」を加えたい。「丈人」と「老人」を、漢字の古語同士として対比のうえで用いることができるところを特徴として。

高齢期を前にしてなお活力のあるシニアなら、「人生九〇年」にむかって青少年期・中期の長い期間をかけて培ってきた専門知識や高いレベルの技術、ほどほどの額の資産を保持して暮らしている。

この「知識・技術・資産」が高齢者の潜在能力（「三本の矢」。安倍首相の三本目の矢はあやうい）といえるだろう。フレイル状態（筋肉が衰えて活力に自在性が失われる段階）までは間

がある元気な高齢者として、保っている潜在能力を用いて何かをやってみたいと思う。これは自分と家族にばかりでなく、みんなのためにも活かしたいと自然に思う。

もしここに新世紀の初めに、国会が衆議してまとめた「日本高齢社会グランドデザイン」が掲げられていれば、その達成のために率先して参加したし、するだろう。

ことし戦後ツ子の「団塊の世代」、この活力あるニューフェースのみなさんの参加をえて、昭和生まれの高齢者「昭和丈人」層がもつ潜在力を発揮することによって、史上初の「日本高齢社会」が達成にむかう。

「長生してよかった」というシーンが、これから次々に展開することになる。必ず。

みずから決めた人生の目標を、どこまでも発展・熟達・深化させようとして、体内から湧いて出る強い生活力あるいは生命力が本稿のいう「丈人力」である。成し遂げようとする目標が大きければ大きいほど、体内からふつふつと力が湧いて出る。発揮する場がないから日ごろ気づかないだけで、高齢期にいるだれもが保持している潜在力といえよう。

「がんばらない」と「がんばる」と

*交々に用いる「老人力」と「丈人力」

世紀をまたいだせいかずいぶん遠い記憶のように思えるが、働きづめに働いてきて、以後を

どう暮らすかに思い悩んでいた高齢者を慰労してくれたことばがあった。

「老人力」（建築家の藤森照信さんと画家の赤瀬川原平さんによる命名）である。

先の大戦後の復興と成長と繁栄を成し遂げて、

「やれやれ、よくぞここまで」

とためいきまじりに高齢期を迎えようとしていた人びと。

その功労者を、「日本列島総不況」（経企庁長官だった堺屋太一さんの命名）が襲ったのは前世紀末のころだった。

働きづめに働いてきて、人生の晩期を迎えている自分の姿をすなおに見極める。

来し方の人生を納得した上で、がんばりすぎずにクールダウンしてゆくこと。その冷静な自己認識の能力を「老人力」と呼んだ同時代人のことばに納得して、多くの高齢者はみずからの判断で体を休め、疲れを癒した。多くの人が納得することで、「老人力」は流行語になった。

今でも高齢期を前にして、来し方の自分を顧みて、高齢期を「がんばらない」で過ごすことは有効だが、おのずから表出される「頑張り」は人びとを感動させるものである。

昨年五月、八〇歳でエベレスト登頂を果たした三浦雄一郎さんが推奨するように、健康を保ちながら、わくわくするような夢があり、その実現をめざすとなれば、頑張らざるをえない。「丈人力」（シニア期の目標を達成する潜在力）はおのずと湧いて出るものなのである。

といって、これまで広く用いられてきた「老人」ということばの意味を「支えられる高齢者」

に限定する意図も内容も持っていない。

長い経緯をもつ「老人クラブ」や「敬老の日」の積極的な意味合いをこれまでどおりに理解した上で、それに重ねて、広く登場している「支える側の高齢者」の活動を伝える意味合いをもって用いている。この国の「高齢社会対策」が遅延したために、「老人」ということばが本来もっていた「敬老尊賢」とか「老練」「老師」「長老」といった熟成期の社会的な意味合いを失ってきた。それをフォローすることにもなるのである。

歴史をつくる劇的な実感

*「昭和丈人層」が体現する成熟社会

現役のときの楽しかったしごとのひとつに、画家の中川恵司さんをつくった『江戸東京重ね地図』がある。江戸の山手、下町の古層の上に現代の東京が重なって見えるように印刷された地図帳である。その中の何枚かは江戸の海の上に、現代の東京がまるごと浮かんでいる。この部分は近代の人びとが活動して新たに創った都市空間なのである。当たり前といえばそれまでだが、小さな事業活動や暮らしの集積が新しい歴史をつくることの劇的な実感がある。

現代の日本で暮らす約三二〇〇万人の高齢者（六五歳以上）は、これまでの歴史にまるごとなかった存在である。史上に新たな成果として得た「人生九〇年時代」を体現している一人ひ

とりの高齢者が、これまでになかった「モノ・居場所・しくみ」をこしらえながら暮らすことで達成される新しい生活空間である。

一人ひとりの高齢者が、遠くに「人生九〇年」の到達点を想定しながら、目前の日また一日をていねいに迎えて過ごす。この「現役長生」型の高齢者が形成する成熟した社会は、これまでの「人生六五年Ⅱ引退余生」型の高齢者による社会とは異なった姿になるはずだ。

ありようとしては、各地各界の生活圏でのテーマに着実に対処しつつ、小さな水玉模様の重なりのように活動している。だれかに知られることよりも、それぞれの場での根つきと過ごしやすさを優先する。お互いにそれを知って仲間が行き来する。そして遠からず、その総体としての「日本長寿社会」の姿が見えてくる。

わが国はいまや「超高齢社会」にあるといわれる。何事にせよ、チヨーには行きすぎた語感があるから、この呼称は適当でない。できるだけ避けたい。「本格的な高齢社会」というべきところであろう。本稿では、高齢者の活動が存在感を示すとともに、青少年、中年そして高年期のすべての人が等しく意識してかわることによって成立する「三世代現役多重型」といえる社会を、「超高齢社会」ではなく「長寿社会」と呼んでいく。

「長寿社会」までの経緯をここで共有しておきたい。

みなさんご自分の来歴と重ねて理解しておいてほしい。

ご存じのように、「高齢化率」（国際基準で六五歳以上の人口比率）が七%から一四%までを

「高齢化社会」という。高齢者の存在が目立ちはじめたとはいえ、まだちらほらの段階で、余生（平均寿命）も長くはなく、後人は「支えるべき功労者」として敬愛し、介護・医療・福祉・年金などで慰労することができた。わが国では一九七〇年から一九九四年までの二四年がその期間に当たった。ヨーロッパ諸国に比べるとはるかに短かったが、戦後に苦勞された先人は納得して亡くなることができた時期である。

その後の「高齢化率」が一四%から二一%の間を「高齢社会」と呼ぶ。この間は高齢者意識をもつ者同士による高齢期のための「しくみ」や「居場所」や「モノ・サービス」づくりを展開する段階で、後人の手を煩わせないで「高齢社会」の形成をすすめることになる。わが国では一九九四年から二〇〇七年までの一三年がこれに当たった。

この世紀をまたいだ一三年間になされるべきであった「高齢社会」形成にむけた対策、高齢者意識の醸成や社会参加は成果をあげたとはいえず、「高齢社会対策」は一〇年延滞することになっている。そのひずみがさまざまに露呈しはじめているのである。

いまや世界最速で、「高齢化率」二五・九%、三二九六万人（二〇一四年九月一五日、総務省）、四人に一人に達したわが国の高齢者は、みんなが参加して形成する「長寿社会」にむけて、わが国が保有する独自の経済、文化、伝統のもとで、独自のプロセスを案出しながら達成にむかわねばならないのである。

二 長寿を愛しむ三つの秘策

「長寿時代」のライフサイクル

* 「高年前期・後期」のあとに「長命期」

これまで「ライフサイクル」というと、学問的にはともかく、ふつうには「乳幼児期」「少年（学童）期」「青年期」「成年期」「老年期」という五つの階層にわけて説明されてきた。

この発達心理学から生まれた「五つのステージ」は、自分の経験としても、あるいは子ども
の成育の姿や父母の生き方を通じて、だれもが納得できる分け方として認めている。

ところが史上新たな「高齢化」という状況にあつて、「高齢社会」の実情をつぶさに考察しよ
うとすると、上の「五つのステージ」ではうまく把握できない。

なぜか。このE・エリクソン以来の発達心理学による分類は、五つのうち三つまでが二〇歳
代までの「青少年期」に当てられていて、「成長型の社会」を反映している。

そのために「高齢社会」、つまり「成熟型の社会」の把握には、適当ではない。ジェロントロ
ジー（加齢学、訳し方はいろいろ）の観点から高年齢層に配慮した別途の「長寿時代のライフ
サイクル」が要り用なのだ。それが「人生九〇年時代」への意識変革をもたらし、暮らしやす
い新たなステージを創出する契機となる。

本稿がここで提案する新たなライフサイクルは、「青少年期」「中年期」を過ぎしおえて「高年期」にある人びとに手厚く、納得されるものでなければならぬ。

青少年期 ○歳～二四歳 自己形成期

バトンゾーン 二五～二九歳 選択期

中年期 三〇～五四歳 労働参加・社会参加期

パラレルゾーン 五五～五九歳 高年準備期・自立期

高年期 六〇～八四歳 地域参加・自己実現期

高年前期 六〇～七四歳

高年後期 七五～八四歳

長命期 八五歳～ ケア・尊厳期

（自立・参加・ケア・自己実現・尊厳の五つは国連が提唱する「高齢者五原則」）

このあたりが、高齢者が納得できる「長寿時代のライフサイクル」といえるだろう。

ここでは学問的にうんぬんするつもりはなく、みなさんに生活の実感として納得していただければいい。単なる老年期ではなく、高齢期として配慮した位置づけが、実人生を実りあるものにする第一の秘策なのである。

「青少年期」「中年期」「高年期」という三つの二五年期が中心に据えられていることがおわかりいただけるだろう。

「バトンゾーン」(二五〜二九歳)というのは、個人のライフ・スタイルによって生じる幅であり、青少年期にいれるか、モラトリアム期として過ごすかは個人が選択すればいい。

「パラレルゾーン」(五五〜五九歳)というのは、「パラレル・ライフ」(ふたつの人生)期にあるということ、で、「高年準備期」である。窓際族といわれてヒマつぶしている時期ではない。

これから迎える二五年の「高年期」を前にして、自分らしく生きる自己目標の発見のための模索(自立)期であり、けっこう多忙なはずである。定年延長の替わりに給料を減らされ、心躍るしごともなくすぞすだけでは惜しい。「パラレル・ライフ」(ふたつの人生)をすぞししながら、本稿をしつかり読み砕いて、わがシニア人生に悔いなしの準備をして迎えてほしい。

「定年後は余生」などと考える旧時代の「老成」タイプの「支えられる高齢者」意識がわが国の「高齢社会」形成に自然渋滞をもたらしている。「高年期」での地域参加・自己実現の二五年をどう体現して暮らすかの工夫が人生の差をつくることになるからだ。

わが国の実情をよく観察した上で本稿が採用した「長寿時代のライフサイクル」は、成長期のそれとは逆に六〇歳以上の「高年期」を三つの時期にわけている。高年前期(六〇〜七四歳)、高年後期(七五〜八四歳)、そして長命期(八五歳以上)がそれで、みなさんは年齢とは関わりなしにご自分の高齢期人生をおよそ三分して、それぞれを有効に過ごすこと。この表は標準だ

から個人的に自在に案分して、いま自分が人生のどんな時期にあるかに実感が持てればいい。ご自分なりのライフ・サイクルをつくること。それがこの表の意味なのだから。

先ごろ七五歳以上の「後期高齢者」の医療費支払いが話題になった。七五歳で階層を刻むことの意味が問われたが、七五歳で截然と変わるわけではないが、フレイル期（筋肉が衰え活力に自在性が失われる段階）を迎えて、からだの機能のどこかで「有訴」がはじまる時期であることには注意する必要がある。同年の著名人や友人の他界の報に接するものこのころからである。本稿の「長寿時代のライフサイクル」の特徴は、「長命期」（八五歳〜）を設けていることにある。「高年期（前期・後期）」（六〇〜八四歳）の二五年のあとの「長命期」が、八五歳〜という刻みについて、女性の側から異議をとねえる人があるかもしれない。長命期は、「男性長命期」八五歳〜、「女性長命期」九〇歳〜、と分けたほうが現実的かもしれないが、ここでは「平均寿命」（女性）が八六歳であるという現実に留意している。まずはご自分の人生と重ねあわせていただきたい。とくに男性はここを越えれば長命のうちである。

「賀寿期五歳層」のハステージ

* 同年配の仲間と「賀寿期」を過ごす

先人は見定めえない人生の前方に次々に賀寿を設けて、個人的長寿のプロセスを祝福してき

た。いまも「何何先生の喜寿の会」「おばあちやまの米寿の会」としてそれぞれに祝われている。しかし長寿時代になって多くの同年配の仲間とともにお互い励まし合いながら「百寿期」を目ざすのもいいではないか。

ただ漠然として「余生」を過ごすのと、この「賀寿期五歳層」の八ステージを基準にして「長寿時代」を過ごすのでは、人生に雲泥の差が生じるだろう。これが第二の秘策である。

還暦期（六〇歳〜六九歳）	昭和二九年〜昭和二〇年
古希期（七〇歳〜七四歳）	昭和一九年〜昭和一五年
喜寿期（七五歳〜七九歳）	昭和一四年〜昭和一〇年
傘寿期（八〇歳〜八四歳）	昭和九年〜昭和五年
米寿期（八五歳〜八九歳）	昭和四年〜大正一四年
卒寿期（九〇歳〜九四歳）	大正一三年〜大正九年
白寿期（九五歳〜九九歳）	大正八年〜大正四年
百寿期（一〇〇歳以上）	大正三年以前

聖路加病院名誉院長の日野原重明博士が二〇一一年一〇月四日に百寿に達して話題になった。その翌年に現役映画監督の新藤兼人さんが到達した。新藤さんは到達してすぐ亡くなったが、

百歳到達は前向きな人生の目標として実感をもたれるところまできている。

前項の表の六〇（六五）歳から一〇〇歳までの間を「五歳層八段階」に分けて、その年齢層一つひとつを迎えて過ごす。

「還暦期」から「百寿期」まで八層の一つひとつを、お仲間とともに迎えて過ごしてゆくことになる。残念ながらその経緯のなかで、「ちょっと、お先に失礼」といって途中下車する仲間を見送らねばならないが。

何人かにすぎないが、ここにご紹介できるのは楽しい。

「卒寿期」（卒寿は九〇歳）には久米明・陳舜臣・村山富市・京マチ子・鈴木登紀子さんら

「傘寿期」（傘寿は八〇歳）には山崎正和・堀田力・田原総一朗・大内順子・米倉斉加年さんら

「古希期」（古希は七〇歳）には田中真紀子・小椋佳・山本寛斉・高橋英樹・片岡仁左衛門・中

村吉右衛門・久米宏・舟木一夫さんら。

みなさんがそれぞれの「賀寿期」に到達する。

ご覧のように、それぞれのお歳でそれぞれのお立場で「現役長生」の日々をすごしておられる。七〇歳の「古希」になったからといって老成することはない。やっとな「第二賀寿期」に達したところ。まだまだ先がある。

お仲間といっしょに人生の新たな出会いを楽しむ日々が待っているのである。

「体・志・行」の三カテゴリー

* 雑事をいとわなことが長寿のもと

家人がだれもない時にでも、そつと三面鏡を開いて裸形の自分を映してみよう。

まぎれようもない自分の「からだ」が眼の前にある。上半身・下半身とながめて、「まあ、いか」と納得するのが「こころ」の動きである。そして男性なら腹部に、女性なら胸部に手をやるのが自然な「ふるまい」である。

この「からだ」体」と「こころ・こころざし」心・志」と「ふるまい」行」という三つが人間（人生）としての同時存在であり、この三つ以外に存在はないというのが、東洋の哲学が教える人間（人生）観なのである。

やや哲学ふうにいえば「体志行」三元論。西欧の「物心」にわけ、その発展として人間を理解する二元論ではない。ここはその場ではないのでそつと記しておくが、西欧の存在論・認識論による世界観・文明観の将来はあやうい。

三つの存在の意味合いが素直に納得できるのは、やはり半世紀を生きてきて、生体としての「からだ」のどこかに故障・症候（すすむと有訴・疾病へ）を生じたり、物忘れが重なって「こころ」（すすむと認知症へ）に違和感が生じたり、「ふるまい」が不自由（すすむと介護へ）になったり、といった自覚が現れる時期になってからのこと。

どこかに気づいたところから、「体・志・行」の三つに配慮した暮らしを始めても遅くはない。まずは「健康（からだ）」に留意し、「知識や夢（こころ・こころざし）」をたいせつにし、「技能（ふるまい）」はさびつかないようにして暮らすこと。この三つを常にバランスよく働かせることによって、「健康寿命」は延び、高齢期の実人生は先を見通せるものになる。

これが三つ目の秘策である。

「青少年期」「中年期」の六〇年間に積みあげてきた健康や知識や技術や有形・無形の資産には個人に差があり特徴がある。それらをバランスよく活かしながら個性的な「高齢期」を過ごしている人が、ここでの敬愛すべき「丈人」のみなさんである。

スポーツ界で「心・技・体」の順として認識されているのは、スポーツでは心の構えが技・体の差をつくるから。高齢期が「体・志・行」の順なのは、体が志・行を左右するからである。

からだ

体 健康 食べる・休息・健康体操・運動・有訴・・・疾病

こころ（ざし）

心・志 知識 しやべる・考える・情報文化・歴史・・・認知症

ふるまい

行 技術 自分でする・歩く・芸能・芸術・スポーツ・・・介護

日々の暮らしの中でのこの三つのカテゴリーのバランスが「健康寿命」を延ばす秘策になる。

とくに長い間デスクワークに従事してきた知性派の男性は、思いのほか三つの要素のバランスを欠いていることに注意が必要である。思い当たる人は症状が出ないうちから足腰を鍛えること、三つそれぞれに心地良い負荷をかけて、「アンチ・エイジング」若づくり」に努める。雑事はいとわずに、さがしてでも担うのが何より三つの要素のバランスに効果がある。

「アンチ・エイジング」若づくり」には負荷を惜しまないこと。健康と体力の保持、心おどる夢・知識、外出して活動力を鍛えること。家事はもちろん炊事も洗濯もみんなよし、奥さまに任せずに、上手に共有して雑事をこなすこと。現役時代に身につけた役職意識や人づかいは、家でも外でも無用である。できれば「厨在丈人」として旬菜を使った料理（薬膳）を食卓に差し挟むようになれば、男女六歳の「平均寿命」の差はずっと縮まることになる。

その二 シニアライフは国産・地産品で

―「MADE IN JAPAN」の時代

「サンパク以後（三八九一五）」は片下がり

＊経済的デフレと人的パワーの萎縮

晴れやかだった記憶として思い起こせば、東京株式市場の「大納会」で「東証一部の株価」が三万八九一五円というピーク値を記録したのは一九八九年一月二十九日だった。「三八九〇」サンパクⅡ「三白」というのは正月三が日に降る祝いの雪をいうが、一九九〇年正月の東京の空に雪ならぬ株価が舞って、「サンパク以後」（三八九一五）はひたすら右片下がりとなった。

それに先立つ一九八九年一月七日に、一〇〇日を超える闘病をつづけた「昭和天皇」が八七歳の高齢で亡くなったのだった。六月二四日には、「東京キッド」や「私は街の子」以来、戦後の日本を体現していた歌手の美空ひばりさんが、最後に「川の流れるように」を歌って五二歳で亡くなっている。

「やれやれ、これで戦後が終わったのだ」

とつぶやいた人びと。とくに終戦を二〇歳〜三四歳で迎えた大生生まれの人びとは、このと

きは六四歳〜七八歳の高齢期での実感だったにちがいない。「昭和」が終焉し、「平成」とともに始まった日本経済の下降。高齢期の人びとのなかには、みずからの戦後を顧みての終息感と、その後の「経済の萎縮（デフレーション）」とを体感として理解した人が大勢いたのだった。

こころの底には戦乱で亡くなった人びとへの鎮魂の思いは消えずとも、自分の肩にかかる荷だけは静かに降ろし、長かった緊張を解いたのだった。将来の高齢期に新しい目標も構想も見当たらなかったし。

「われにかえった」高齢者の一人ひとりに「内在する萎縮（デフレーション）」は、ゆっくりとした静かな変容であり、外から気づかれることはなかった。

しかし戦争の惨禍を知り、どん底の貧しさを知るといっきびしい経緯をもつ自分たちの後を、戦争も知らず、貧しさも知らない若い連中が一对一で引き継ぐことなどできないだろうという自負と憂慮をない交ぜにした感慨は、大正生まれの仲間同士の会話のうちに繰り返された。

それがすべてではないとは知りながら、企業現場からの自分たちの隠退（労働力・構想力の消滅）が、総体として「日本経済や社会の萎縮」をもたらす要因となるだろうことは予測しえども、まさかこれほど早くに高齢者となった自分たちの医療費の負担増や年金の減額や消費税増税が現実になり、あろうことか、若年層から不公平との反発まで浴びようとは、思いもよらなかったことにちがいない。

「大正生まれ」の歌

*働きづめに働いた人びと

まわりに少なくなったが、大正生まれの先人を大切にしよう。

大正生まれ（明治四五年Ⅱ大正元年Ⅱ一九一二年七月三〇日から大正一五年Ⅱ昭和元年Ⅱ一九二六年一二月二五日）の人びとは、だれもがたいへんだった。男性も女性も。男たちは「富国強兵」の下で育てられて、大陸や太平洋の戦場で戦い、終戦の昭和二〇年Ⅱ一九四五年には二〇〜三四歳。生き残った男たちはこんどは「企業戦士」となって、死んだ者、傷ついた者の分まで働いた。女性たちは「良妻賢母」に育てられて、銃後をまもり、戦後は子どもを育て、身をもって平和を伝えてきた。その女性の中には、かつて大陸で「自ら生きよ」と放り出され、いままた一人暮らしで「自ら生きよ」と二度も放り出された人もいる。

力をつくして高度経済成長を成し遂げた昭和五〇年Ⅱ一九七五年には五〇〜六四歳。このころ次の歌が歌われた。そして今、平成二六年Ⅱ二〇一四年には八九〜一〇三歳である。

「大正生まれ」 小林朗 作詞 大野正雄 作曲

1番

♪大正生まれの俺達は 明治の親父に育てられ

忠君愛国そのままに お国の為に働いて
みんなの為に死んでゆきや 日本男子の本懐と
覚悟は決めていた なおお前

2番

♪大正生まれの青春は すべて戦争（いくさ）のただ中で
戦い毎の尖兵は みな大正の俺達だ
終戦迎えたその時は 西に東に駆けまわり
苦しかったぞ なおお前

3番

♪大正生まれの俺達にや 再建日本の大仕事
政治、経済、教育と ただがむしやりに三十年
泣きも笑いも出つくして やつと振り向きや乱れ足
まだまだやらなきや なおお前

4番

♪大正生まれの俺達は 五十、六十のよい男
子供もいまではパパになり 可愛い孫も育ってる
それでもまだまだ若造だ やらねばならぬことがある

休んじやならぬぞ　なあお前
しつかりやろうぜ　なあお前

作詞者の小林朗（こばやし・あきら）さんは大正一四年の生まれ。二〇〇九年二月二日に死去。「大正生れ」の歌は一九七六年にテイイチクからレコードが出された。

大正人の優れた業績を垣間見るために、少しでも著名人をみてみよう。二ページほど紙幅をいただいて。**赤色**は平成二四・二五年に他界した方、**青色**は現存の方である。

一九一二／元年　一／太田薫　二／双葉山定次、三／都留重人　四／**新藤兼人**　五／林伊佐緒
六／大友柳太朗　八／田島直人、福田恆存　九／成田知巳、松下正治　一二／木下恵介
一九一三／二年　一／荒正人、田中英光　二／中原淳一　三／尾上松緑（二代）、金田一春彦　五
／森繁久弥　六／杉浦民平　九／家永三郎、丹下建三、豊田英二、吉田秀和一〇／織田作之助
一九一四／三年　一／深沢七郎　三／丸山真男　五／前畑秀子　六／呉清源、霧島昇　七／木
下順二、笠置シヅ子、八／後藤田正晴、平岩外四　九／宇野重吉　一一／田村魚菜
一九一五／四年　一・**二むのたけじ**　二／二葉あき子、水の江滝子、野間宏、小島信夫　三／
濱谷浩　四／飛鳥田一雄　六／和歌森太郎　九／高川格　一一／春日野八千代
一九一六／五年　一／福武哲彦、岡晴夫　三／有島一郎、五味川純平、斉藤茂太、岩谷時子　四

/木下忠司 七/坂田道太、鶴岡一人 八/藤村富美男、五島昇 一〇/渡久地政信
 一九一七/六年 一・一一**日高六郎** 一・一二**秋山ちえ子**、中村歌右衛門 二/沢村栄治、山
 田五十鈴、横山泰三 三/柴田鍊三郎 四/島尾敏雄 七/浜口庫之助 一〇/角川源義
 一九一八/七年 一/小暮実千代 二/池部良 三/中村真一郎、福永武彦、升田幸三 五/
 田中角栄、五・二七**中曾根康弘** 七/堀田善衛、近江俊郎 九/高橋圭三 一二/高峰三枝子
 一九一九/八年 一/**田端義夫**、照国万蔵、一・二三**園田天光** 二/**やなせたかし** 三/水
 上勉 六/岩波雄二郎 七/長洲一二 八/大野晋 九/加藤周一、金子兜太 一一/佐治敬三
 一九二〇/九年 一/長谷川町子 二/**山口淑子** 三/**川上哲治** 四/三船敏郎 五/**森光子**
 五/**安岡章太郎** 六/秋山庄太郎、梅棹忠夫 七/竹内均 一二・二四**阿川弘之**
 一九二一/一〇年 一/谷桃子、吉田正、盛田昭夫 二/庄野潤三、大松博文 三/貝谷八百
 子 四/犬養道子 七/藤原弘達 一〇/一〇・一三**塩川正十郎** 一二/山本七平、五味康祐
 一九二二/一一年 一/橋川文三、山田風太郎 二/三根山隆司、安川加寿子 三/山下清、
 和田寿郎 四/岩井章、三浦綾子 五・一五**瀬戸内寂聴** 六・一八**D・キーン**、七/丹波哲郎
 八/石井好子 九/塚本邦雄、九・一二**内海桂子** 一〇/別所毅彦 一二/大下弘
 一九二三/一二年 一/池波正太郎、**三國連太郎** 三/大山康晴、田村隆一、遠藤周作 四/
 四・一九**千宗室** 五/五・二四**鈴木清順** 八/司馬遼太郎 一一/白井義男、一一・五**佐藤愛子**
 一九二四/一三年 一/佐藤亮一 一・一六**京極純一** 二/石本美由紀、岡本喜八 二・一八

陳舜臣、越路吹雪、淡島千景 三／安部公房、三・三村山富市、三・二五京マチ子、高峰秀子、
 高田好胤 四／團伊玖磨、吉行淳之介 六／芦野宏、六・二五丹阿彌谷津子 一〇／石橋政嗣
 一一／山崎豊子、青田昇、一一・一四鈴木登紀子、吉本隆明 一二／鶴田浩二
 一九二五／一四年 一／三島由紀夫 二／栃錦清隆、二・二七豊田章一郎 三・一二江崎玲於
 奈、三・二〇梅原猛 五・一〇橋田寿賀子 六／藤沢秀行、加藤芳郎、六・二八大関早苗 七
 ／芥川也寸志、藤沢嵐子、七・二三色川大吉、八・二一篠原一、丸谷才一 九／杉下茂、辻邦
 生 一〇／中村雄二郎、一〇・二〇野中広務、一一・六桂米朝
 一九二六／一五年（一二月二五日）一／一・八森英恵、いいだもも、一・一二三浦朱門 二
 ／榊莫山、松谷みよ子 三／萩原延寿、犬丸一郎、三・一五辻久子、三・二〇安野光雅、加古
 里子 四／宮尾登美子 七／奥野健男 八／古田武彦 九・一／石井ふく子、星新一、今村昌
 平、九・一九小柴昌俊 一一／根本陸夫、一一・三〇中根千枝

「九割中流社会」はどこへいった？

＊「社会主義的平等主義的自由経済の国」

「もはや戦後ではない」といわれたのが一九五六年。それ以後に生まれた人たちにはそれがふ
 つうだったから実感がないのかもしれないが、一億人を超える国の国民の九割までが「中流と

感じる社会」を実現して、しかも長期に継続（一九七〇年〜八九年）したことは世界にも例がないのである。

八〇年代に、「日本は社会主義的・平等主義的・自由経済の国だ」と外国人に向かって紹介したのは、「大正人」のひとり、盛田昭夫さん（当時はソニー会長、経団連副会長）だった。

盛田さんは、外国人に日本の「国のかたち」を問われると、自信をもってそう説明していたという。国際的基準の中で、世界の開発途上国から目標とされるアジア地域の先進国として立ち現れたのである。高齢者のだれもがその経緯をリアルタイムで体感してきた。個人の体験してきたその歴史的成果は、仔細に思い返して実感してほしい。

一九七〇年には「進歩と調和」を掲げた「日本万国博」があり、八〇年には絶頂期の「山口百恵」が引退し、そして八九年には昭和天皇が八九歳で亡くなり、美空ひばりが五二歳で世を去った。その間に、ゴミ戦争、列島改造、べるばら、カラオケ、インベーダー、そしてフルムーン、おしん、くれない族、新人類、トラバーク、外にはペレストロイカ、ベルリンの壁・・・。「九割中流社会」というのは、三千年にわたって中国歴代の為政者が目標として成しえない「大同社会」（いまの中国は「小康社会」をめざす）にほど近い社会であり、したがって歴史的にも貴重な体験なのである。通過している時には、そうとも思えなかったが。

「大同社会」とはどういう社会か。

わかりやすくいうと、『礼記「礼運」』では「外に戸を閉ざさず、これを大同という」といい、

『水滸伝「第一回」』でも「路に遺ちたるを拾わず、戸夜に閉ざさず」という太平の世を夢見ている。「夜に戸を閉ざさず」に暮らせる社会のこと。たしかにそういう時期があった。「セキユリテイって何？」という社会である。

また「路に遺ちたるを拾わず」は、拾わないのではなく、落とした人のところへ戻ってくること。そういう時期がこの国の一九八〇年ころまでは確かにあった。拾ったものは必ず交番に届けたし、なくしたものや忘れたものは必ず戻ってきた。つい三〇年ほど前のこと。みんなどこかで、歴史的なこの貴重な時代体験をしてきているのである。

そして、もはやありえない。世界が狭くなり、どこからでも侵入者や破壊者がやってくる時代。大戦後の東アジアの局地的な小世界「日本」だったから可能だったのだろう。ボートピープルがめざしたあのころのあこがれの国「日本」のことである。

いまも「シニア海外ボランティア」の高齢者や日本企業の現地駐在の高齢社員が、開発途上の現地の人びとから心からの信頼を勝ち得ているのは、生産者としてユーザーが満足する品質（モノ）にこだわるとともに、背後に息づく品格（ヒト）がおのずから伝わるからだ。

「みんなが中流」という当たり前だった平等意識に亀裂をもたらすことになる日本経済の「萎縮」（デフレーション）がはじめたのは九〇年代初めのころである。

「日本経済や社会の萎縮が平成時代とともににはじまった」ということになれば、平成の年数の期間、すでに四半世紀のあいだ、片下がりがつづいてきたことになる。「団塊の世代」より以降

の人たちは、四〇歳代、五〇歳代を、時代の先に目標の見定めづらい時期を過ごしてきたわけだから、内向きに自己保身に向かわざるをえない。

「MADE IN JAPAN」の時代

* 丈夫で長持ちする中級品が国外での評価

日本経済の頂上期に、盛田さんが書いた『MADE IN JAPAN』（一九八七年、朝日新聞社）は、そのあたりのことをこう記している。

「国内のマーケット・シェアをかけた激しい競争を通し、海外での競争力を養うのだ。エレクトロニクス、自動車、カメラ、家庭用電気製品、半導体、精密機械などが、その代表的なものである」

日本製品の多くは高級品ではなかった。「良質な中級品」、つまり一般の人びとがもつとも必要とする良質なものを作ることに活路を見い出してきたのだった。良質というのは、「使いやすく、丈夫で、長持ちする」という意味でいわれた。高級品ではない。

物質的にはしやにむに近代化（といっても多くは戦勝国アメリカ化）をすすめた日本は、外国から素材を買い、丈夫で長持ちする良質な製品を作って売る「加工貿易立国」として第二の開国を行い、国土の再建をめざした。鉄のカーテン（ソビエト）や竹のカーテン（革命中国）

のむこう側の「社会主義」の動向にも関心を払いながら。

前記の商品は国内でよく売れば、それは外国とくにアメリカで評判がよく、「MADE IN JAPAN」のトランジスタラジオ、カメラ、テレビ、小型車など良質な中級品は、実用品として認められてきたのである。それがまた日本人みずからの生活を平均的に充足し、中産化することで、「みんなが中流」の実感が生まれた。

優れた技術者が「良質な中級品」をつくり提供することが、わが国の立国の基盤であることは、骨に刻み心に銘じておかなければならないことである。けっして高級品ではない。

だからわが国では、どこの家でも、日用品はどれもが丈夫で長持ちする国産品があたりまえだった。舶来ものといえば、化粧品とか時計といった欧米からのブランド品が主だった。そこへ「途上国産品」が混じり出し、目立つようになり、はては逆に国産品はどれというようになるまでに、せいぜい一〇年余といったところだったろうか。

前述したが、流行語にもなった「日本列島総不況」と堺屋太一さん（経企庁長官だった）が日本経済を評したのが一九九八年のこと。当時すでにアメリカ一極体制の下で、途上国主導の経済活動が本格化していたということになる。日本の進出を求めるアジア諸国への対応は一步も二歩も遅れることになった。それまで途上国からの輸入品といえは「山海珍味」のパイナツプルやマンゴーなどで、東京では明治屋や紀ノ国屋の店頭をにぎわせていた程度だった。あとは韓国製の「衣料品」が目立つくらい。日用品は輸入せずともこと足りていたからである。

二 途上国産の百貨商品に囲まれて

家庭内に「途上国産日用品」が居座る

*「アジアの共生（豊かさの共有）」を実感

「衣料品」からはじまった「家庭用品の途上国産化」。ほかの製品への広がりには、その後、日新月异の勢いでどんどんと進んでいった。暮らしの中で「MADE IN KOREA」から「MADE IN CHINA」や「MADE IN THAILAND」・・・といったアジアの国々からの日用品が次々に国産品に入れ替わる度に実感されてきた。

「えッ、これもか」

と驚くほど早く「モノの途上国産化」は進んで、ついには精密機器にも及んでいった。

「日本列島総不況」の下で収入が減ったわが国の消費者は、国産品や製作技術の将来を危惧しながらも、やや粗悪だが「安価」な途上国製品を購入することになった。

丈夫で長持ちする純国産の優良品に囲まれて暮らしていた一九八〇年ころと比較すればよくわかる。一九八二年が小売店のピークだったという。そのころは全国に商店が一七二万店、商店街は一万四〇〇〇カ所もあったという。数もそうだが商店街には人をひきつける活気があつ

た。馴染みの店に寄るのが楽しかった。商品知識ばかりか人生の先達があちこちにいて、元気がもらえたのである。

商店街は「モノと暮らしの情報源」でもあった。歳末の商店街の活気はどこもなつかしい記憶になったが、そのころ購入した優良品のあれこれはまだ暮らしの中で生きている。

日本企業の海外進出は、生き残りをかけてといわれるほどに業績悪化の果てであったが、アジア市場ではヨーロッパ系企業や韓国企業にあきらかに時期遅れではじまったものの、現地での歓迎と期待は大きいものがあつた。あこがれの日本から、有名企業がやってきたのである。

「日本の製品を使って日本人のような暮らしをしたい」

というアジア途上各国の人びとの願望が叶いつつあるのである。

決して褒めすぎでも言いすぎでもなく、「アジアの共生（豊かさの共有）」へむかって、わが国の私企業による公益的成果として、日本ブランドは成立している。アジア各地にしっかりと着床しているのである。世紀の視野でみて、日本が誇っている国際貢献である。毎日用いている日本ブランドの生産地を逆にたどれば、アジア諸国の人びとの暮らしに日本企業もたらしている成果が推察される。

観光ツアーではなしに、行く機会をつくって生産の場を実見してきてほしい。いうまでもなく現地を仔細にみれば、先行の欧米企業や韓国企業、最近是中国企業の進出もあり、日本企業は生き残りを懸けて事業を展開しているのに変わりはない。現場での事業活動の成果は、派遣

社員の並みならぬでないな指導とそれを受けて日夜を徹して移入に努めている現地従業員の熱意の結果でもあるのである。

海外の現場ではそれぞれ事業ごとの戦略が必要であろうが、大衆性に配慮して海外進出した「ユニクロ・UNIQLO」や「大創（ダイソー・DAISO）」の動向をみれば、「アジアの共生（豊かさの共有）」が時流としてアジアの奔流となっていて、それが理解される。

前世紀には戦場となった地域でも、「平和裏」に展開される「モノとヒト」の交渉や交流を通じて、途上各国の民衆は、わが国が平和国家であり、民主主義によって「しくみ」をつくり、ユーザーが納得する優れた「モノ」づくりをし、従業員に差別なく接していることを理解しているにちがいない。豊かさの共有をめざしてきた「日本型マネジメント」を現地で活かしている日本企業とその社員は、言い過ぎでなく、わが国を代表する平和の遣使なのである。

途上国包囲網による「日本途上国化」

*家庭用品と企業の非正規社員化にみる

中国へ進出した日本企業は、上海だけでも三〇〇〇社を超えらるという。それぞれ社名の漢字表記に工夫しているのはご存じのとおり。いくつか例をあげてみよう。

たとえば「優衣庫」（ユニクロ）、「三德利」（サントリー）、「索尼」（ソニー）、「施楽」（ゼロ

ックス)、「佳能」(キャノン)、「楽天」(ロッテ、まぎらわしいが音ではルオ・テイエン)、「華歌爾」(ワコール)、「百樂」(パイロット)、「養樂多」(ヤクルト)、「日波」(サンウエーブ)、「可果美」(カゴメ)など、「資生堂」「富士通」「麒麟」「味之素」「朝日新聞」などはそのまま。

しごとの現場では、技能も人格も優れた多くの派遣社員がことばや生活習慣の違い、国民感情に配慮しながら製品化に当たっている。前項でもみたように途上国主導の「グローバル化」の対応に、日本企業は遅れに遅れて生き残りをかけて選択した荒療法が、生産拠点の途上国シフトと社内リストラだった。両方ができる企業はそれを急いだ。

わが国は前世紀にアジア地域でただひとつ、「欧米追随型の先進国化」をなしとげていたが、同じアジア諸国の人びとの近代化への熱い思いを理解していたとはいえない。

そのためになすべき役割を果たせなかった。アメリカ市場での途上国主導の「グローバル化」にうながされて、日本企業は「サバイバル(生き残り)」を懸けた進出となり、資金、人材、ノウハウを移出して、途上国の需要に見合う日本ブランド品の生産をめざすこととなった。早くから進出していた企業は、比較にならないほど良い人脈と企業体制を現地で保持している。テーマの「高齢化」と離れてやや理屈っぽく日本企業の海外進出をいうのは、その結果として国内での対応が混乱し、これまでの「終身雇用」型の正社員では経営がもたなくなり、アルバイトや派遣社員で支える「日本の途上国化」対応が急速に進んだことをいうためである。したがって正社員化は「途上国の日本化」とともにゆっくり回復せざるをえない。政冷経熱の結

果の混乱であり、わが国の企業に現れて当然のグローバル化症候群であった。

ひととき電球や電池は安くなったがすぐ切れる粗悪品になった。メーカーを見ると日本を代表する企業である。広州では、

「日本の優良企業の索尼（SONY）がこんな製品をつくるのか」

という風評が立たざるをえなくなる。これもアジア共生のための「日本の途上国化」の実態であり、「余儀なく受けざるをえない悪評」である。

いまや家庭内の電球は、「ライト・イノベーション」（ベンチャー企業名になっている）によって、やや高だが便利で安心して使える日用品の成功例になりつつある。こうして途上国製品で満たされている家庭内日用品は、ひとつずつ国産・地産品に戻ることになる。高齢者なら体験としてわかることだが、かつて日本が成長の途次にたどったX地点まで戻って待ちながらおこなうアジア共生のための「共同歩調」であり、日本のなすべき責務なのである。現地で尽力する日本人社員が現地社員に「ありがとう」と率直な謝意を受けることはしあわせなことだ。その謝意の半ばは戦後に会社をつくった先輩に捧げるべきものだろう。

踊り場で「足踏み」して待っていた日本の熟練技術者は、「家庭用品の途上国化」のための日用品の劣化を、時流の理解者として眺めてきた。それゆえの「足踏み」であったから、時をまわって再開する優れた製品、やや高安心製品の国産・地産化のための技術や意欲まで失うことはなかったのである。

三 やや高安心の国産・地産品が再登場

やや高安心の国産・地産品が再登場

* 足踏みして待った熟練技術者

この一〇年余り、多くの日本企業が海外進出したからといって、国内の熟練技術者の技術を越えた製品ができて、生活感性の高いわが国の高齢者の暮らしが快適になったわけではなかった。この間、日本の熟練社員は、自分たちがかつてたどった同じ道をたどって、アジア途上諸国の人びとが豊かになることを願って、「足踏み」をして見守ってきたのである。

「足踏み」というのは、技術力を保持しながら、機会を待っていたということである。アジア途上国産の製品が「粗悪品から中級品」に達したのを見定めて、国内産の「やや高」だけでも「品質が安定」しており、「安心して買う」ことができる優良日用品（高級品ではない）の企画・製造・販売に取りかかることになる。

その好例として今治のタオル（IMABARI）がよく引かれる。吸水性のいい「使って気持ちが良いタオル」とどこんまで追求してえた技術結集の成果であり、「やや高だが安心して使える優良地産品」のモデルになっている。

途上国商品の多い日用品の中に「MADE IN JAPAN」を見つけると、国民は技術の保持にほっとするし、滞らせていた生活感性がもどってくる実感も生まれる。グンゼの下着の肌に触れる心地良さはうれしい。男性なら途上国製の電動髭剃りをやめて、チタンコートの手動髭剃りを使ってみるとよい。剃り味抜群であればの心地よさなのである。デフレ（萎縮）からの脱却はこういう生活感性の小さな回復・再生から本格化するのちがいない。

優れた生活感性をもつわが国の高齢者にとって、使って心地の良いものとなる「国産・地産優良品」が、とくに「団塊の世代」など若手シニア・ユーズーからの要請によって動きだすだろう。大手家電はシニアが家電に抱いている不満を聞いて開発した新製品を売り出した。「雨過天青」といった明快さで技術レベルの高い国産・地産の新製品が現われて、高齢者の暮らしを豊かにするだろう。

さすがに都内のデパートは、変わり身がはやい。

顧客ターゲットを若者・女性層から高齢者層に替えての改装をおこなったところもある。「モノ」の生産現場より顧客に近い流通現場のほうから反応がはじまる。イオンの「GG（グランド・ジェネレーション）」戦略などがそれだが、人生を楽しむ「グラジェネ世代」の要請にこたえる新製品が間に合わない段階であり、烽火にはなるが収益にはまだ結びつかないだろう。

サービス部門では、セブンイレブン、イトーヨーカドー、生協、JP（日本郵便）が先行して動いている。

しかし注意すべきは、デパートの若手担当者が「高齢者の富裕層を対象にして」と口をすべらせたように、格差の存在を認めていることにある。求められているのは、選ばれた人が用いる高級品ではない。途上国製品との「較差」であって「格差」ではない。わが国の熟練生産者は、途上国産品を見たうえでその上をゆく優良品、みんなが心地よく使える優れた国産・地産品を提供しようとしているのである。流通部門がそこを間違えると企業回復を阻害する。

この一〇年余り、だれもが体験してきたことは、「家庭用品の途上国産化」だった。国も企業も国民もその時流を時代の要請として受け入れてきたといつてよい。とくに工業技術製品の対価としての海外産食品は「飽食の時代」といわれるまでにこの国の食卓を豊かにした。

その中であって、日本各地の食材もまた市場で苦戦を強いられてきたが、山梨のモモも、青森・長野のリンゴも、山形のサクランボも、産地の努力がうかがえるほどに質の差が歴然とし、価格がほどほどに収まっていれば、「やや高だけれど優良な国産・地産食品」として、受け入れられている。それはわが国のユーザーにモニターされた「優良な輸出品」候補なのである。

一次産品でそうなのだから、他の技術系の商品ではなおさらである。

生活感性の高い日本の高齢者は、「モノの途上国産化」による「生活水準の途上国化」にがまんしながら、「やや高安心の国産・地産優良品」の登場を待っていたのである。

みんな豊かになるといふ基本理念は生きている。何度でも繰り返すが、わが国が追求するものは決して高級品ではない。

「高齢化経済活動」が財政難を克服

*「成長＋成熟」社会を創出する

財政難を「高齢化経済」が克服する。

おそらく本稿の記述のなかで、現在の課題に忙殺されている現役リーダー層にはもともと理解しづらい課題であることは承知している。経済力を維持するには成長力が必要であり、それは若者と女性の潜在力だと思いきこんでいるからだ。高齢化先行国である日本が、「成長＋成熟」社会を達成することによって、世界の多くの高齢化途上国がその成功例を追随することになる重要な課題であることに思いおよばない。日本の高齢者の人生が、多数の他の国の高齢者の人生の指標になる。誇らしい光景ではないか。

といって日本の高齢者が特別な活動をするわけではない。生活感性の高い日本シニアが、自分の暮らしを快適にするようなモノやサービスを要請することでいい。技術や知識や経験のある人たちが、それに応えてモノやサービスを作り出せばいい。それはありようとしては中小規模のもので、水玉模様のように重なりながらこの国の大地を覆っていくことになる。

マイホームに自分が要望した「MY・・」がひとつずつ増えていき、肌で感じられるほどに「優良国産・地産品」が身のまわりに安定した存在感を示すとき、「日本高齢社会」を下支えす

る「エイジノミクス（高齢化経済活動）」の安定した姿が見えてくる。内需による持続可能な経済活動の展開となる。それでいい。

もう一度確認しておくが、優れた生活感性を持つ五〇歳以上の日本シニア層が、このまま途上国製品に埋もれてしまうなどということは決してあってはいけないことである。

アジアの民衆との共生（豊かさの共有）はそれとして進めながら、たいせつなのは高齢者の生活を充足させる良質なモノの創り出しにある。とくに還暦前後の高齢準備期、団塊世代をはじめとする若手の「現役長生」型シニアは、遠慮することなく優れた製品を要請し、成果を享受する需要者となること。だれもが「高齢化優良品」の供給者となり成熟した暮らしを楽しむ需要者となること。生活感性の高い完成度の高い製品を求めつづけること。

そうしてはじめて各地各界の中小企業の熟練技術者が動き出し、自社製品の新開発に挑む体勢をととのえることになる。引退した社友も参画して、みんなが愛着をもって自社ブランド製品を送りだす。

高齢化製品・商品・用品ルネサンスである。

「いい時代に生まれちゃったじゃないか」

高齢期にそう言いあえる社会でないと「高齢社会」にむかっているとはいえない。その成果を集めて幕張メッセを賑わすような「国際高齢化製品展示会（IEE）」が催されて、外国人バイヤーが集まることになるだろう。これは広州でも上海でも不可能な、日本が独走する国際イ

ベントとなる。

一つひとつは小規模でいい。着実に優良製品化に成功した企業が増えることで、現有のグローバル経済圏にさらに「高齢化製品経済圏」を着実に上乘せする「子ガメの上に親ガメ」といった趣きの経済活動「エイジノミクス（高齢化経済活動）」が展開されることになる。

企業内高齢者の努力で「高齢化国産品」の開発に成功した業種が増え、地域では「高齢化地産品」が増えることで、地域生活圏をますます豊かに、流通機能を再生する。B1グランプリ（ご当地グルメでまちおこしの祭典！）のような形の「高齢化地産品」グランプリもいい。増えつづける「現役長生」型の高齢者の要請によって、持続的な内需を拡大し安定させる。かつて全国的地産品を生みだしたように、地域特性を活かした製品化を大いに競って。

いずれ海外の高齢者が求めるような良質の日本製「国際高齢化地産品」の数々は、「加工貿易立国」としての輸出品となる。今がその歴史的に優位な時期なのだ。

日本シニアの持つこういう優れた「世紀の役割」を感知できず、能力を發揮する環境を整えることなく、一〇年余りを延滞させてしまったのは、だれか。このまま推移しては、政治リーダーはわが国の「新世紀の役割」を感知できなかつた責任を歴史的に負わなければならなくなる。増え続ける高齢者の「成熟社会」創生という活動が成長力であることを認めて、君子豹変して高齢化商品による経済活動「エイジノミクス（高齢化経済）」を活発化してもらいたい。

四 「新・日本型マネジメント」に活路

「新・終身雇用」と「新・年功序列」の展開

*アメリカ型「成果主義」の成果は限定的

「終身雇用制と呼ばれてきましたが、実際には六〇歳定年制が一般的だったですよ」といわれれば、その通りである。

たしかに「終身雇用」といっても終身ではなかったものの長期（無期）であり、先輩から後輩へとわが社流儀を伝えながら生涯支えあう信頼と平等の絆の表現として「終身雇用」は引き継がれてきた。六〇歳定年後も、終身のつきあいを建て前とする「愛社意識」として保たれてきた「和の絆」の伝統なのである。先輩を敬愛する「年功序列」の骨組みも変わらない。旧友会・社友会も健在である。伝統のある「百年企業」にはそのまま今も根づいており、息づいている。

いま日本型企業の基本とされる「終身雇用」を論ずる本稿の立場は明快である。

入社したての若手社員は企業の発展を願い先輩社員を敬愛し、企業の骨格を支える中堅社員は会社や製品を育ててくれた引退社友を敬愛する。社友は愛社の心を失うことはない。それが率直に表わされることが「終身雇用」の安心感となり、「年功序列」として先輩への敬意となり、「和の絆」の信頼感となり、企業の安定感となり、しごとへのインセンティブとなる。利用者

へ最良の製品を提供する企業の社是の根幹であり、国の骨格と企業の品格を支えている「日本型マネジメント」による生産活動である。

思い起こせば、一九八〇年代には「日本型マネジメントは世界一」（ジャパン・アズ・ナンバーワン）とみていた海外投資家に、二〇年後には日本企業の利益率が低いのは「終身雇用のせい」といわれるようになる。この間に何があり、何がなかったのか。

仔細な議論は学者の方々にまかせるとして、企業現場の実感としては、「終身雇用」制のせいではなく、二〇年の間に企業内の人的パワーが弱体化したせいなのだ。いまでも七〇%以上のわが国の労働者は「終身雇用」制を支持しているのだが、個人にはわからないものの、社員を持つ想像力、気力、愛社の心が右片下がり落ちていく。創成期と違って、有名企業になり業績も安定した企業に入社した社員の守成期への対応がもたらしているものだ。

社員同士が信頼しあい生産技術を共有し、将来にわたって安心して働ける場をしようとす。「終身雇用」や「年功序列」といった日本企業の基本樹形をつくっている「日本型マネジメント」のどこがいけないというのか。業績がいいトヨタやキャノンだから支えられたのではなく、いずれの企業も根・幹として守ることができずは慣行なのである。

いまある企業は、いまの社員のためではあっても、いまある社員のものではない。

先人が敗戦の焼け野原の下に温存されていた根っこから、「生き残る」ために敗戦後の状況に適応させ、試行錯誤を繰り返しながら樹形を整え、枝葉を茂らせてきたものである。苦難の中

で模索し、選択してきたのが「終身雇用」であり「年功序列」と呼ばれる企業慣行であった。それも経緯が穏やかであったわけではない。胸の奥から歌声が聞こえてくる。

大地ばかりか、企業の存続をゆるがすような社内争議を、「♪起て飢えたる者よ・・・」で始まる「インタナショナル」や「♪暴虐の雲光を覆い・・・」で始まる「ワルシャワ労働歌」を歌って社屋を包囲する労働者側と、受けて立つ経営者側との間で何度も繰り返したすえに形成されてきたものである。だからやわな企業樹形ではない。先人が戦禍の跡から苦闘のすえに育てあげてきた基本樹形である「日本型マネジメント」を、まるごと伐採してしまうような軽率な改革は避けなければならない。といって頑なに固定的に捉えることではないだろう。

時流である「経済のグローバル化・途上国化」には、製品も含めて若年層を当てて対応してきたのは選択として正しい。問題はいま潮流として迎えている「高齢化」に、企業がどう対処するかにある。当然のこと、「現役長生」型の高齢社員と「社友」が協力して対応するよりほかにない。高齢社会が必要とし、高齢期のみんなが必要とする自社製品を提供する。それを成功させることが、新たな時代に「日本型マネジメント」を活かし作り直すプロセスではないか。アメリカはなお若年・中年が中心の社会であるが、日本社会は「経済のグローバル化」とともに「経済の高齢化」を合わせ迎えている。その変容にどう企業システムを対応させていくかに苦慮している時に、「日本型企業」の全否定にむかう意見が先行するのは困ったことだ。

伝家の宝刀は高齢社員・社友の「和の絆」

*「日本型マネジメント」の新しい企業樹形

「新商品開発の遅さ、人事異動の不活性、非採算性など、みな日本企業のもつ特殊性です」

と云つてのけ、個人の能力にインセンティブを期待する「個人主義」や、社内競争による「成果主義」といった手法を導入する。したがって給与も能力優先の「職務給」にシフトして、終身・年功型給与の基本である「年齢給」や「勤続給」を縮小あるいは廃止する。日立は世界企業にむけて「ポスト型賃金」を導入した。それでも重要なのは企業のポストではなく、社員の質である。本稿の立場からすれば、温存すべき「日本型マネジメント」の幹に傷をつけるような変革にも着手してしまう。わが国の企業風土では、成果を個人に還元する「アメリカ型の成果主義」はインセンティブとして効果を生まない、というか長くは生みつづけないだろう。

「和の絆」を国家の、企業の、地域の、家庭の根幹に据えている日本を支えているのは働く人びとの信頼と協働である。企業の活動を弱らせ、企業風土を歪ませ、製品の輝きを失わせてしまふであろう改革に、まず「百年企業」が異議をとなえる時期にある。

導入してみてもアメリカ型マネジメントのもつ脆弱性に気づけば、日本企業の「終身雇用」と「年功序列」がいかに有効な「日本型マネジメント」の骨格であるかに思い及ぶはずである。いま加速する「社会の高齢化」を支える良質な「高齢化製品」の開発のために、高齢熟練技術

者を活用する。その際に年齢差別のない「終身雇用」をわが国に固有の企業インセンティブとして捉え直すこと。そうして初めて企業の「成長+成熟」への対応の道が見えてくる。

日本企業は外国からうらやましがられていいほどに好都合な「終身雇用」と「年功序列」という在来のしくみがあり、世界レベルの経験も知識も技術も気力もある良質な高齢社員・社友をかかえているという歴史的優越性に気づくことである。

繰り返すが、「日本社会」を礎のところを支えているのは「日本的企業風土」に根ざした「日本型企业」であり、時流に対応する「中堅社員」であり、潮流に対応する「熟練高齢社員」である。いま輝いているグローバル化企業というのは、時流による外圧に対応する緊急処置としての業態であり、やがては「日本型企业の基本樹形」に回帰する「宿り木業態」なのである。

日本企業の苦境脱出のために、グローバル化（途上国化）に対応するために若手・女性・中年者の優遇によってなされた「第一次リストラ」を成功させたあと、今度は世紀の潮流である「高齢化」に対応するわが社の「高齢化優良品」の創出をめざして、「第二次高齢社員・社友優遇の再リストラ」をすすめること。

その過程そのものが「終身雇用」や「年功序列」という伝統の愛社意識の新たな展開であり、「社是」と「日本型マネジメント」の真髓がよみがえる局面である。愛社意識を醸成しながら「再逆転」に立ち向かうには、なによりも「和の絆」によって培われた製品開発でのわが社の来歴を活かすことだ。これこそが日本企業再生の「伝家の宝刀」なのである。

その三 高齢期二五年の居場所づくり

一 「エイジング・イン・プレイス」で地域創生

「ふるさと生活圏」の再興

*若者と高齢者が活動のの両翼に

夜空に舞うホタルの光は、過去に出会って見失ってしまった何かなつかしいものを思い起こさせる力を持っている。外交官（ポルトガル）を辞した後、徳島に住んだモラエスは、闇に弧を画いて飛ぶホタルの光に、先立ってしまったふたりの女性を実感した。

「おヨネだろうか、コハルだろうか」

モラエスはその光跡を追う。

ホタルの飛翔は姿は見えなくとも終わることのない何かへのリード・ライトなのだろう。

「水は清きふるさと」のシンボルとして、「ふるさと」を蘇らせるものは何かを探っていた人たちによって、ホタルは全国各地で蘇った。「ほたるサミット」も開かれている。

春になると、きまって蠢動（字づらも音もい）していた小さな生きものたち。そのうちの何か姿を見せなくなる。目の前で次々に失せていくのだが、季節に鈍感になった人間は、そ

んな小さな「自然環境」の変化に気づかない。自分の生とかかわりが無いと思っている。

おおいにかかわりがあるとするとする人びとが抛るデータが「環境省レッドリスト」である。

その平成二五年版によれば、日本で絶滅の恐れのあるものは一〇分類群三五七種。そのなかに、なんとニホンウナギまで含まれた。

ウナギが絶滅？ かば焼きと肝吸いがなくなる？

ここまできてやっとドツキリ。朱鷲・トキ *nipponia nippon* の絶滅（二〇〇三年、キンが最後）のときには中国トキによる佐渡での再生があり、物語の世界であったが、ウナギとなるとにわかには実感がわく。なんとかして自然ウナギの回復をしなければと食べながら思う。

ひとくちに「環境の回復」といっても意味がひろい。

ヒト中心の利用が行きすぎて自然の再生力に乱れや崩れを生じさせた反省から「自然環境」の回復がいわれる。もうひとつ、生産を優先して消費現場を壊した反省から「生活環境」の回復がいわれる。循環型社会のための3R（リデュース、リユース、リサイクル）がこれ。

そしてもうひとつの環境である「歴史・伝統環境」の再興がここでの課題である。「ふるさと再生」は新しい課題ではない。前世紀末に近く、「ふるさと創生一億円事業」（竹下登内閣）として、全国の市町村が知恵をしぼって試みた事業があった。いまでも記念モノメントが各地に形見として残っているが、活動として継続している創生事業も少ないけれどもある。

いままた九月に安倍（晋三）内閣は、石破（茂）地方創生相を起用して、「ひと、まち、しご

と創生本部」を発足させた。「人口急減・超高齢化」というわが国が直面する大きな課題に対し、政府一体となって取り組み、地域それぞれの特徴を活かした自律的で持続的な社会を創生しようと呼びかけた。そのため三つの視点は、①若い世代の就労・結婚・子育てでの希望の実現、②「東京一極集中」の歯止め、③地域の特性に即した地域課題の解決だという。

三つの視点のうち①の実行者として若い世代だけを取り上げていることに異議がある。首相にせよ、担当大臣にせよ、決定的な欠落は若い人の支え手となる高齢者の存在と役割を理解していないこと。課題の解決のための「知識・技術・資産の三本の矢」を保持している高齢者が地域にいることに思い至らないことにある。地域特性を知っているのはだれかを知り、高齢者のみなさんに出動を要請するべきときである。

高齢期二五年をそこで過ごす「エイジング・イン・プレイス」での居場所づくりと「ふるさと生活圏」の再興への意欲をもつ高齢者と、それを継承し新たに創生する熱意をもつ若い人びとの両翼の働きがないと「地方創生」に飛び立てないのである。

ふるさとの「原風景」と「現風景」

*Uターン・Jターンの人びとの願い

敗戦による終戦からすでに七〇年。戦後生まれがいまや「七十古希」に。青少年時代に必要

とされて「ふるさと」を離れた人びと。外に夢と人生を求めて都会に出てそのまま職に就いたり、大学で学んでから就職をし、都会暮らしをし、結婚をし、次世代を育ててきた人びと。

その中には定年後もそのまま都市郊外の団地に住んで、子どもを送りだして高齢化する生活圏に居つづけて、最後はひとり住まいになって「都市浮遊型の人生」で終わる人も多い。問題は住宅が二世代用で二世帯住宅でないこと。定年になっても地域に関心を示せない「地閉症」の男性が少なくないこと。もうこの世では十分に働いた、あとは勝手にさせてくれ。そういう「引退余生」を選択した人を、ここでは静かに見守り、後の章にまかせよう。

ここでは「ふるさと」へ回帰して高齢期から終末期までをすごして、「エイジング・イン・プレイス」での実人生の成果が期待される人びとの高齢期を見てみたい。

しごとを終えて、あるいは終える前から、晩年を「ふるさと」にもどって過ごそうと考えている人びとを「Uターン」型、あるいはそういう「ふるさと帰巢」型の人生を思う人びとを「Jターン」型と呼んでいる。U・J型どちらの人にも「ふるさとの原風景」があつて、ときに静かに「ふるさと」（大正三年・一九一四年、ちょうど一〇〇年前に作られた）を歌えば、うさぎやこぶな、なつかしい山や川は変わることなく眼の裏に浮かぶ。

「♪いかにいます父母・・・」となると、父母はすでになく記憶の中の存在になつていいる人も多いだろうが、あるいは大正生まれの母上がひとりご健在でおられるかもしれない。

「ふるさとの現風景」は、とくにこの二〇年ほどのあいだに、地元が求めているものとは違う

姿になっている。

得たものといえば——舗装された真っ直ぐな道路。メカニックな騒音。コンビニ、スーパー、駐車場。ウサギ小屋どころかハチの巣マンション、コンクリート造りの新庁舎。マイカーとプレハブづくりのマイホーム・もちろんまだある。

この間に「ふるさと」が失ってしまったもの多いことにも気づく。

失ったものといえば——安心して歩ける小路。緑ゆたかな雑木の里山や鎮守の森。ヒバリやカエルの声。赤とんぼ。わら屋根の篤農家。商店街の活気。そして野外で遊ぶ子どもたちの歓声や腰の曲がったお年寄りの笑顔・もちろんまだまだある。

ふるさとに「ニシキ」を飾って帰って、しやれた家を建てて暮らす人もいるだろうが、帰るのではなく戻って、地元に残っていた仲間とともに「ふるさとの再生と創生」につながる事業に加わる。そういう気構えを持ってUターンする人の発想に「エイジング・イン・プレイス」の意味を見出す。まだ現役のCさんがそうだ。Cさん夫妻は帰って農業をやる。

「帰りなんいざ、田園まさに起こらんとす」
である。休耕田の時代も終わる。

「T P P」（環太平洋パートナーシップ協定）は、太平洋リングの海洋大国である日本に新たな影響力を求めている。「特性ある地域の発展」にむかって、施策も予算も人も動こうとしている。新しい「地域の時代」が動こうとしている。

このままでは二〇四〇年までに「人口減少」によって八九六自治体がなくなるというショッキングな可能性を指摘して、政治側はみずからの失政の恥をさらした。「日本創成会議」（座長・増田寛也元総務相）の人口推計がそれである。自治体がなくなるといふ地域での人口減少問題（少子化）に関心が集まっているが、本来は「高齢化」問題なのである。同会議が残る側という大都市の高齢者の人生が浮遊して終わるのに対して、全国各地で、泉眼から泉が湧き出るように新たに形成される生活空間は、水玉模様のように重なって広がる「長寿時代の実人生」の舞台なのである。保持してきた知識、技術、資産は生き生きと活かされる。それは国や自治体からの要請で始まるものではない、個々人がみずからの人生のために始めるものである。

「ニシキ族」より地域づくりの仲間がいて

＊子や孫も暮らせる「ふるさと創生住宅」

いま、ふるさとに「ニシキ」を飾って帰って、違和感のある家を建てて、地域と絶縁した暮らし（地閉症）をするような人は期待されていない。「ふるさと生活圏」をともにつくる気構えの人が求められている時節なのだから。

Cさん夫妻は小・中学いっしょの同郷である。ふるさとに終の棲家をつくるなら、高齢者専用ではなく、都会暮らしをしている子や孫が遊びに来てすごせるような、あるいは孫を呼び寄

せて育てられるような二世帯用住宅にする。そして将来は子や孫が、父母が「エイジング・イン・プレイス」とした地に、「父母のふるさと」として戻って暮らせるような。

「地域型高齢者住宅（ふるさと創生住宅）」はできる人から進めてほしい計画である。とくに五〇歳代後半の高齢準備・助走期のみなさんには、Cさん型の人生選択をしてほしい。国土交通省住宅局（安心居住推進課）と厚労省が共管事業として都市内ですすめる「都市型高齢者住宅」への税制上の優遇を、「地域型高齢者住宅（ふるさと創生住宅）」でこそ活かすべきである。

来年から地方自治体と地域高齢者の協働の場がさまざまに作動しようとしている。その実態を当事者である高齢者が理解していない。またとないチャンスを知らないでどうするか。

「地域医療・介護推進法」が二〇一四年六月に成立した。その内容が来年四月から実施に移される。医療・介護のほかに、子育て、認知症対策、障害者、生活保護、ニート対策などの実務が自治体主体に移されることになる。見えている主なものはそれらだが、「まちづくり」が、「国から地方へ」と移譲されるのは、活動の中心が「国ではなく住民と地方自治体にある」として国が認めざるをえない世論の動向があるからだ。

市町村合併のあと、どれほどの地域がどれほど元気であるかを知るためにおこなわれた調査「地域再生に関する特別世論調査」（内閣府・二〇〇五年六月）がある。少し間をおいたデータだが、その後の経緯に変わりはない。

合併協議は、ご記憶のように、「生活圏の広域化」や「少子高齢化」などを課題としたが、ひ

と段落したところで、どれほどの地域がどれほど元気であるかを、内閣府が調べたもの。

自分が住む地域に「元気がない」と感じる人(四四%)が、「元気がある」と感じる人(三八%)を上回っていた。「元気がない」と答えた人は、その理由として「子供や若者の減少」(五九%)、「中心街のにぎわいの薄れ」(五一%)、「地域産業の衰退」(三九%)などをあげている。いまのみなさんの実感とそう遠くない。

そして問題はここにある。活動の中心となるのが国(一八%)ではなく、住民(四八%)と地方自治体(三八%)であることがはっきりした。国の一八%というのは、もはや活動の中心が「国ではなく住民のみなさんと地方自治体です」と国がいわざるをえないほど低率だったのである。これも地域で暮らすみなさんに知ってもらいたいのが、あまり知られていない。

増えつづける「支えられる高齢者」のための「地域包括支援センター」が来年から充実する。といって同時に「支える側の高齢者」がその気で動かないでは充実がおぼつかない。

PPK(ピンピンコロリ)でないかぎり、高齢者はだれでも健常期のあと、介護期、医療期、入院期、終末期のプロセスを踏んで一生を終わる。ところが、これまでのように治療を病院で受け、重篤になったら入院し病院で死ぬという時代でなくなる。施設完結(病院)型から地域(自宅)完結型に替わるからだ。増える認知症の介護も地域にかかわる。「支える側」にいううちに自主的な地域参加が要請される。「ふるさと回帰」をする人にとっては参加しやすい環境が整うことになる。それとともに「子ども・子育て」もまた両親と施設から、地域が助け合っ

次世代を育てようという政策転換を迎える。Ｕターンして「ふるさと」で暮らしながら、可愛い孫を預かっていなかで育てるのもよい。都市に残った若いふたりは、もう一人産むチャンスを得ることになる。

「子供や若者の減少」には「少子化」があり、「中心街のにぎわいの薄れ」には商品流通の変化がある。そして「地域産業の衰退」には大資本による系列化、グローバル化による生産拠点の海外移転といった事情がかかわっている。自治体は特性を活かした地域産業を支援し、「子育て」を施策のNO1にして、みんなで次世代が安心して育つ「しくみ」をこしらえる。子どもたちが集まってくるまち。孫たちを呼びよせるまち。いいね、クリックである。

同じ「ふるさと」の地で高齢者は子どもたちと暮らし、情報源になる街の中心をつくり、地域産業を起こす原動力になればいい。「エイジング・イン・プレイス」として窓口は開かれている。都会から地域へという「ふるさと生活圏」への人の動きが、新たな地域を創生する原動力になる。地域問題は人口減少ではない。人生にかかわる住民の選択の問題なのである。

「均衡ある国土」から「個性ある地域」へ

*均衡を基盤に地域特性を重ねる

新幹線の座席でうとうとした後で、身を起こして、列車の窓から外を見る。

「いま、どこさ走ってるん？」

流れ去っていく風景からでは、どこを走っているかの判別がつかない。外国での話ならともかく、わが国の国内での話。利用した人ならだれもが経験していることなのである。次々に展開する田畑も家並みも、どこも同じような風景なのだ。

新幹線の車窓からの風景の中に、「ここはR町 △△が特産」といった程度の看板くらいはあってもよさそうだが、地方特性（特産）がいつこうに立ち上がっていない。「地方の時代」といわれずいぶん経つというのに。ふつうにはそう思う。

しかし、これは見方の違いによるのであって、いずれの地も凸もさせず凹もさせずに、「富を等しく分かち合いながら、ともに豊かになる」という、先の大戦後にわが国の先人が選んで目標としてきた「日本的よき均等性」の成果なのである。

「豊かになれる者からなれ」とはせず、個人差や地域差をなくして、等しく成果を分かち合おうと務めてきた善意の人びとによる積年の成果なのだ。その意味でなら、これまでも「地方の時代」だったといえる。東京一極集中の風潮の中で、優れた人材を都市に提供しながら、地方に残った人びとは、「モノと場の平等な豊かさ」のために、たゆまず努力をしてきたのである。

みんなが等しく貧しかった時代、若者たちを大都市へ送り出し、地元に残って貧しきや不便さにも耐えながら辛苦した人びと。いまはその姿は遠く定かでないが、地元のために尽くした先人の努力を無視・軽視しては、現状の公平な豊かさに対する理解の公平さを欠くことになる。

合併前の旧市町村長室には歴代の首長の写真がかかっていた、だれもがいい顔をして並んでいた。合併後はどうなったのかはわからないが、それに励まされ力をもらって現役の首長はしごとをしていたにちがいない。

新幹線を利用しながらこう語るのは失礼になるが、

「善く行くものは轍迹なし」

という先哲のことばに耳を傾けたい。すべての業績を周囲の人に振り分けて、みずからは轍の跡を残さず去っていった善意・高邁な人びとの姿を忘れ去るわけにはいかない。

等しく富を享受するという先人の善意から始まった「均衡としての地方の時代」が、時を経て「横並びの安心感」による自立意識の欠如となり、推進力を失ってしまった。ここでも成果主義といった個人の目先の競争誘因を取り込まねばならない転機を迎えようとしている。

地域の基盤があぶない。そこで、その危機感の表現として政府が掲げたのが、

「国土の均衡ある発展」から、

「地域の個性ある発展」へ

という「骨太の方針」だった。そういう転機への要請としてわかりやすく表現されている。

ここで大切なので再記するが、注意すべきことは「くからくへ」というのは「くを転換して」ではなく、正しくは「くを多重化して」と理解すること。

「特性」ある発展だからといって、「均衡」を一八〇度転換するのではなく、これまで国がリー

ドしてきた「横並びの均等化」によって得た現況に、さらに地元の発想を「多重化」して地域の活力を呼び起こそうということである。

基盤としての「均衡」の上に「特性」を重ねる。そう理解しなければ先人が善意として積み重ねてきた「みんなが平等に」という営為をまるごと無視・黙止することになってしまう。そんなことは後人としてあるまじきことではないか。

「地域に根ざした暮らしの知恵がこの地方にもあったはずなのだが」

と思いつつながら、新幹線の客は、どこかわからないまま車窓から目を戻す。前方の出入り口の上の小さな空間をニュースが流れ、「あと三分でN・・」というお知らせが流れた。

「特性が息づくわがまち」に住む

＊みんなで考える「しくみ」と「特産品」

貧しいときは貧しいなりに、豊かになれば豊かさをお互いに分け合う。

この「モノと場の横並びの平等」が、敗戦の惨禍あと、復興事業の基本となってきたことで、地方の人びとにどこにいても安心感を与え事業を支えてきたのだった。

その意味では国のしごとにも携わってきた有能な官僚の半世紀にわたる事業分配の業績といえる。だから新幹線の窓から見ても凹凸が際立たないようなまちづくりが目標とされ、実現され

てきた。「モノ」の配分における平等主義のみごとな時代表現である。

その証としてR町のような小さな町でも、隣の大きなN市に劣らず、横並びの「基本課題」を共通して持つており、それを担当する課があり職員がいる。そしてこれまでの地方議員の主なしごとは、各地域に等しく予算と事業を配分することにあった。

「均衡ある国土の発展」はこれからも基本として継続するのだから、自治体はせっかちに従来の課係を解消するような単純な変更は避けなければならぬ。職員も住民も混乱してしまう。新旧ふたつの課題をうまくつないで対応する課をつくり職員を配置することになる。新しい課題を設定して担当する部署を構成するわけだから、従来の課係をなくすのではなく、その上に重ねて構成することになる。

「地域の個性ある発展」へむかって、すでに各地で活動しているのが、「まちづくり推進課」「子育て支援課」「高齢社会対策課」「伝統産業育成課」などで、そのほかに二課を合わせた部署、たとえば「健康福祉課」「産業観光課」「スポーツ生涯学習課」などが内容を調整しながら活動を推進している。みなさんの自治体もそうなっているはず。

これまで地域に関係の薄かった人は、こういう新しい課の窓口をぶらりとたずねてみるとよい。気軽に参加できる地域活動に出合えるにちがいない。

「シルバー人材センター」や「地域包括支援センター」は、これまでも地域住民の健康、生活の安定、しごとづくりのための支援する中核的機関として機能してきている。民間団体である

「社会福祉協議会」も官民協働の活動が次第に多くなり、自治体と不即不離の関係を保ってきたから、ここに地域活動の人材が集まっている。二万人あるそうだが、住民がどう関わるかで地域活動の成果に差が生じている。

新たに「地域特性」が息づくまちを創り出すには、まずみんなで手分けして地域特性を掘り起こす作業がある。均衡ある発展を基盤としながら、その上に「地域特性」を活かしたまちづくりをめざす活動が重ねられる。特性を発掘し、活かす事業がいま全国で競われている。

「特性のあるまちづくり」が内閣府の「中心市街地活性化」の基本計画である。地域から練り上げてきたものだから、それぞれ競いあいながら着実に姿を現すに違いない。ここからも汲めど尽きない地域生き返りの方途を得ることができる。一部だが見てみよう。

城下町では「街なか回遊」(彦根市)・「回廊」(会津若松市)、港町では「みなとみらい21・OLD & NEW」(横浜市)・「港町スクエア」(気仙沼市)・「海DO戦略」(下関市)、そして「まると博物館」(有田町)、「都市型高感度市街地」(宝塚市)・「体感スポット点在のまち」(久留米市)、「ファッション・ジュエリー都市」(甲府市)・「リ・ガラスのまち」(水俣市)、「こみせ・まちづくり」(黒石市)・「詩情公園都市」(小諸市)・「市(いち)の復権」(市原市)、「まちなかづくり」(臼杵市)・「へそのまちのへそづくり」(富良野町)・・・

どこも街並みの整備、歩きやすい環境づくり、いこいの場の設置、観光資源や歴史資源の活用、イベントなどに特性を活かしたまちづくりが企図されている。地域再生の場に、地元高齢

者の経験を取り入れながら参考に事例に事欠かない。

とくに最初の指定都市（平成一九年二月）である「コンパクトシティ」富山市は、また「環境未来都市」構想の指定も受けており、またOEC Dの「ケーススタディ都市」にも選定されている。「高齢者優遇」での展開が「富山まちなかカート」など「歩いて暮らせるまちづくり」への成果としてすでに具体化されている。

全国版の「地域ブランド品」でまちおこし

＊農業の六次産業化とご当地グルメ

身近な実例としては、各地の「特産物グルメ」がよく話題になる。

農業の「六次産業化」による「ご当地グルメ」や新製品は、競えば競うほど磨かれる。「全国ご当地グルメ祭」も開かれている。勝ち抜けば全国版の「地域ブランド品」となる。

環境に関する「エコ・ライフ」「スロー・ライフ」による活動や居場所づくり。「ホテルの里」や菜の花・レンゲ・コスモスといった「花の里」、「そばの里」「和紙の里」といった各種の地産品の里づくり。そして地元の焼き物・織物の再生。和太鼓・歌舞伎・踊りなどの伝統文化・芸能の復活。民俗・ことばの保存と伝承など「地域特性」を活かした活動の成果が、暗いニュースに割ってはいって明るいニュースとしてテレビで紹介されている。

全国版の「地域ブランド品」は、お中元やお歳暮の対象商品として、JP（日本郵政）のリストなどでもご存じのとおり。地域で生まれて国を代表する商品になった製品である。地域名のついた伝統製品は、地域の人びとの並みならぬ努力のたまものである。

全国版「地域ブランド品」のうち、みなさんにも親しいものの例を少しあげてみよう。

アイヌ民芸品、石狩鍋、松前漬、津軽塗、津軽こぎん、南部鉄器、三陸わかめ、鳴子こけし、仙台たんす、曲げわっぱ、秋田八丈、紅花染、米沢織物、会津漆器、相馬焼、喜多方ラーメン、笠間焼、結城つむぎ、益子焼、日光彫、鹿沼土、桐生銘仙、藤岡瓦、川口鋳物、草加煎餅、秩父銘仙、狭山茶、房州うちわ、黄八丈、鎌倉彫、小千谷紬、富山家庭薬、加賀友禅、九谷焼、輪島塗、越前竹人形、越前がに、山梨ワイン、信州そば、野沢菜、岐阜提灯、静岡茶、安倍川餅、瀬戸焼、伊勢海老、松阪牛、彦根仏壇、西陣織、京友禅、丹後ちりめん、清水焼、宇治茶、堺緞通、灘清酒、奈良漬、三輪そうめん、紀州みかん、鳥取梨、出雲石灯籠、備前焼、吉備団子、備後表、広島かき、萩焼、赤間硯、阿波鏡台、讃岐うどん、今治タオル、伊予柑、土佐鯉節、博多人形、久留米がすり、八女茶、有田焼、伊万里焼、長崎カステラ、球磨焼酎、豊後表、宮崎はにわ人形、薩摩揚げ、桜島大根、大島紬、芭蕉布、沖縄泡盛・・・。

まだまだあるが、いうまでもなく地域特産の保持のためには、常日ごろから地元の職人や企業のため努力がある。もちろんそれを支えつづける多くの住民の力に負っている。

いま全国で新たな特産品の展開の時期。どんなものが全国征覇にむけて勝ちあがってくるか。

一人の傑出した技能をもつ人が案出して、みんなで協力して展開することもある。しかし、多くは「地域特性」を際立たせる地道な試行が、「地域の個性ある製品」化につながる。それらはまたシニア世代の暮らしに見合った「地域生活圏」エイジング・イン・プレイス」達成への道程であることに違いない。そのために高齢者の知識、技術を活かす現場はいくらでもある。

地域の高齢者が一生のあいだ便宜をえて用いる「地域特産品」を競いあう。わがまちの製品が周辺地域で勝ち抜いて人気を得れば、それは「地域ブランド品」として定着する。新地域ブランド品誕生のチャンスなのである。優れたものは姉妹都市や友好都市を通じて、海外の地域高齢者にも受け入れられる優れた輸出品になるに違いない。

二 「三世代ふれあい館」なんていいね

気軽に立ち寄れる「居場所づくり」

*「サロン」「コミュニティ・カフェ」「茶の間・縁側」など

平成二六年の「ねんりんピック」(第二七回全国健康福祉祭・一〇月四日～七日)は栃木県でおこなわれた。栃木県は「高齢者の居場所づくり」でも先進的な県といえるだろう。

居場所のタイプはさまざまだが、県では全国社会福祉協議会が提唱している「ふれあい・い

きいきサロン」と、さわやか福祉財団が普及につとめている「ふれあいの居場所」を参考に
して実例を積み上げてきた。

「ふれあい・いきいきサロン」は、全国社会福祉協議会が提唱している。地域を拠点に住民で
ある当事者とボランティアが協同で企画をし、内容を決め、共に運営していく楽しい仲間づく
りの活動」（あなたもまちもいきいき！「ふれあい・いきいきサロン」のすすめ）というもの。

「ふれあいの居場所」は、さわやか福祉財団が普及につとめている。「地域に住む多世代の人々
が自由に参加でき、主体的に関わることにより、自分を生かしながら過ごせる場所、そこでの
ふれあいが、地域で助け合うきっかけにつながる場所」（ふれあいの居場所ガイドブック）で
ある。すでに次の自治体は二〇カ所以上の居場所を開設している。

足利市高齢者ふれあいサロン（一〇〇カ所を超えている）、佐野市高齢者ふれあいサロン、
鹿沼市ほっとサロン、栃木市はつらつセンター、小山市いきいきふれあいセンター、大田原市
ほほえみセンター、那須塩原市生きがいサロン、那須烏山市いきいきサロン。

介護支援ボランティアについても、東京都稲城市の介護支援ボランティア活動を参考にして、
小山市や日光市で導入している。また県では栃木県シルバー大学校も経営している。

「居場所づくり」は全国各地域で、独自の条件のもとで、新たな活動がすすめられている。

「高齢者」（埼玉県・豊橋市・京都市・高松市）、「子ども」（北海道・帯広市・青森県・練馬区・
市川市）、「青少年（中学・高校生）」（神戸市）、「障害児」（横浜市・中津市）、「障害者」（奈良

県)、「生活保護受給者」(那覇市)など、先行地域は枚挙にいとまがない。

地域が担う「多子化・高齢化」社会

*「家族総出」の子育て・孫育て

ようやく「女性登用」の順風がわが国にも吹きはじめている。この風はこれから二一世紀はおろか二〇〇〇年間は「男尊女卑」(これはパソコン辞書にある)にかわって吹きつづけて、「女尊男卑」(これはまだ辞書にない)の時代がつづく。その後には人類社会は「男女平等」の平衡を保つことになるという大胆な意見すら聞かれる。即座の男女平等なんか平等ではないという。

いずれにしても女性がリードする社会づくりは緒に付いたばかり。まだ遠慮がちな声に配慮して、軽重を問わずに傾聴せねばならない。気になるのが次世代育成に対する女性内部の意見の相違。祖母と子育て期の女性との折り合いについてであるが、「祖父母」という存在が孫育ての現場で評価ゼロという現状は、経緯はともかく「祖父」として危惧しているところである。

両親と施設による子育てのなかで軽視して扱われていても、実際には孫の傍らにいて親の目と違った目で孫をみて、知らないことを教え、暮らしのこまかな技能を伝え、励ましを与え、孫から二重マルの似顔絵をもらう祖父母は数多いのである。

ちかごろは、九月第三月曜日の「敬老の日」に花束をもらったおじいちゃんおばあちゃんは、

「孫の日」(一〇月第三日曜日)にお返しをする。過保護や板ばさみを避けながら、社会適応性のある次世代を育てる役割を果たしているのは、おじいちゃんおばあちゃんではないか。

「ひとりじゃないよ、みんなで育てる未来に輝く子どもたち」

いいキャッチフレーズである。祖父母からは裏声で、「ふたり(親だけ)じゃないよ・・・」と呼びかけたいところもある。子育てはむかしのように「家族総出」がいい。そしてさらには地域みんなで成育を見守っていくことが、もっとも有効な「少子化対策」である。高齢者にとって「孫育て」は優しい心を生かせる「エイジング・イン・プレイス」の現場である。

地方の家庭では、これまでもそしていままも、伝統的な「家族総出」の子育てで女性の社会進出を支え、子育ての現場を引き継いでいる。子どもたちは初めから、おじいちゃんおばあちゃん存在を当然とし、「うちのじいちゃんがね」といって、教えてもらったワル知識やウラ技まで仲間に自慢して伝授する。それも「わが家三代の暮らしの知恵」の伝承の意味合いである。

それでもこれ以上に家庭に過大な負担を求めることはできないとして、国は「子ども・子育て法」では幼稚園・保育園を一体化した「認定こども園」で、幼児保育と幼児教育を連携して母親を支援するとともに、元気なお年寄りの地域参加で子どもを守り、企業は「ワーク・ライフ・バランス」で子育て期の女性を支援し、若い家族の負担の軽減を図っている。

いまやできるかぎり「三世代同居」家族を保持しつづけないと、暮らしの知恵の伝承が途切れてしまうし、医療が地域(家庭)中心になれば、同居・近居による家族の絆は欠かせない。

日ごろ遠出をしない高齢者は、子どもたちと同じ地域で日々を過ごしている。だからここでの「エイジング・イン・プレイス」は「孫世代」との交流である。マンガで育ってすぐキレル子どもに、滋味豊かなことばを教えて、精細な表現力を身につけさせて、感情のコントロールができる子どもにしようという「読み聞かせ図書館」は重要。それに地元の伝統技術・芸能を伝授する活動などには高齢者の技能と教える熱意が欠かせない。

三世代の意欲的企画の合流点

*「三世代ふれあい館」なんていいね

世代交流。ことし平成二六年度の内閣府主催「高齢社会フォーラム in 東京」（七月二九日）には、「多世代からみたシニアの意識改革」と「シニアと多世代がつながるために（ICTの活用）」という分科会が設けられた。

これまでは高齢者による高齢者のためのフォーラムの感があつたが、世代をつなぐことで、みんなが協力して形成する「長寿社会」への視点がうまれる。

こんなシニア像が指摘された。

「嫌われシニア」「愛されシニア」「孤独なシニア」「アクティブ・シニア」「プラチナ・シニア」
「良いシニア」「困ったシニア」「悪ガキシニア」・・・

嫌われシニアや困ったシニアは、差別する、空気が読めない、自分のことばかりいうなど。愛されシニアや良いシニアは、潔い、自他がわかる、甘えさせてくれる、など。

「プラチナ・シニア」は渋く輝いている。思いのほか「悪ガキシニア」の評判がいいのは意識しておいていいかもしれない。

これまでの世代間の出会いといえば、地縁組織である「老人クラブ」と「子ども会」との間での交流が知られる。「全老連」（全国老人クラブ連合会）がおこなってきた「地域を豊かにする活動」（旅行や将棋など）がそれで、「伝承活動」や「世代交流」は組織あげての活動の柱になっている。力をもつクラブは、地域文化や芸能・民芸や手工芸、郷土史などを子どもたちに伝承している。クラブの若手会員による独自の活動も見られる。

いずれにしても地域の子どもたちが当面している問題は、「老人クラブ」と「子ども会」との間では担いきれないほど山積しており、地域生活圏でもっと広い高齢者の活動が、次世代育成の事業として必要なものになっている。

大都市近郊での例としては、千葉県柏市では、柏市・東大高齢社会総合研究機構・UR都市機構との協働で、ここをベッドタウンとしてきた高齢世代が、優れた知識や技術を活かしてさまざまな地域でのしごとづくりをしている。そのうちのひとつが海外勤務の多かった商社マンや技術者が子どもたちに生きた英語を教え、理科系の知識の伝授に一役かっている。こういう世代間の課題別の出会いは、あらたな次世代育成の場をつくることになる。

「長寿社会」という三世代交流の社会は、高齢者が潜在力を用いて次第に存在感を示すことで、三世代がそれぞれに能力を活かす「多重型社会」を構成することになる。いま「地域創生」期にあることで、高齢者は地域活動に参加することが要請されており、それぞれの地域の特性や伝統を知って特産物を育て、若者を鍛え、子どもたちに将来への安心と希望を与えられる事業に直面している。自治体はていねいに高齢者の能力を理解して活かすことで、これまでになかった次元の「ふるさとづくり」の拠点を一つひとつ形成することとなる。

車イスでも行動できる環境の整備など、「ユニバーサル・デザイン」に配慮したまちづくりは、厚労省の「バリアフリーのまちづくり活動事業」として各地で実現している。

さらに重ねて物産、文化、余暇にわたって、高齢者がそれぞれの立場で暮らしを便利にし、お互いの活動を支援し合い、さまざまな課題を具体化していく「地域シニア会議」（地域支援協議会）が開かれることになる。さらに世代別の要望を実現するための「三世代会議」や、そのための常設の施設「三世代会館」は、将来はどここの自治体にもあってもいい施設である。

いまはまだ模索的・先駆的活動のうちではあるうが、地域の青年館や公民館ではなく、活動の場として、「三世代交流館」（大洲市）、「三世代ふれあい館」（土岐市）など「三世代会館」を称するものもみられる。三世代の代表者がそれぞれを代表して交流し、合議する場として運営できるようになれば、それぞれの立場をお互いに理解し支援しやすくなる。世代別のあるいは合同の集会や文化事業の施設として有効に機能するだろう。

三 生活支援コーディネーターを支援

「地域シニア会議」が共生活動の拠点に

*「生活支援コーディネーター」が登場

地域で暮らす高齢者は、大きく三分類される。

地元の中学校を終えて、仲間が都会へ出て行ったあとも、ふるさとに残って地域の物産や伝統行事を守り、次世代を育ててきた人びと（Q字型）。次がふるさとを離れて都会で活動したあと、高齢期から終末期をふるさとに戻って過ごす人びと（U字型）。そして魅力のある町には、これまで関係を持たなかった人びとも都会から高齢期を過ごすためにやってくる（J字型）。

こういうそれぞれに異なった能力と来歴を持つ人びとが、高齢期に地域で出会って、それぞれに蓄積してきた知識や技術や人脈や資産などを有効に活かすために議論する。それぞれが高齢期を過ごす「エイジング・イン・プレイス」で、「地域特性」を活かして、みんなが住みやすいまちにするために能力を提供しあう。

自治体はこうした人的資産を用いることで、みんなが住みよいまちづくりをすすめる。共生・共助がしやすい「しくみ」を速やかに提供できるかどうか。

ここは「共生の文化をつくらう」という提言をされている「さわやか福祉財団」の堀田力会長
の発言に耳を傾けよう。

「共生の文化」というのは、簡単にいえば、定年退職をして家に籠っている。あるいは外へ出ても行く場所は居酒屋程度。家族で旅行はするけれど、ご近所とのつきあいは一切なく、通りで顔をあわせれば目礼するだけ。こういう暮らし方は「恥ずかしい」とみんなが感じるような風習、それを「共生の文化」と呼びたいと思います。ここまで一生懸命働いて社会に尽くし家庭に尽くしてきて、定年退職したんだから何をしても自由ではないか、という考え方が多数、いまはそういう文化です。けれども、人と交わり人の喜ぶことをしたほうがもっと良くなるのではありませんか、そういうことを社会的な自由と考えられないでしょうか、という訴え方をしてきました。それをもう一步踏み出して、「恥ずかしい」と感じるところまで進めようというのが本日の提言であります。」（内閣府「高齢社会フォーラム in 東京」基調講演「あなたかく助け合う地域社会へ」、二〇一四年七月）

堀田さんの提言の背景になっているのは、最近の国の政策の動きで、高齢者の「医療・介護」、子ども・子育て、障害者、認知症、そして生活困窮者対策、といった対策が期せずして地域で支えていこうという方向、「国から地域へ」と動き出していることにある。

そこで地域に住む高齢者が「共生の文化」の証として、自由に、自在に自発的に集まってくる。そういう「しくみ」をここでは「地域シニア会議」（愛称「ぢぢさばばさの会」）と名付け

よう。もちろんすでに活動しているところもあるし、呼称も形態も自由だが。活動をよく耳にする「地域協議会」は全員参加だが、ここは高齢者のための新たなしくみである。

来年四月から各自自治体にひとり、「生活支援コーディネーター」（地域助け合い推進員、有償）が登場する。自治体は「地域医療と介護推進法」の実施にあたって「生活支援コーディネーター」を認定して、官民協働の活動をすすめることになるからだ。その後、地域包括支援センターごとに（ここまで有償）。さらにその後、地域の要望に応じて認定する（ここは無償）。

「支える側の高齢者」は、このコーディネーターと協力して活動することになる。この活動の巧拙・遅速によって自治体間に差が生じる。地域の高齢者を「地域シニア会議」がどこまで集約できるかによって、活動の広がりにも差が生じる。特性あるわがまちの発展は、新設の「生活支援コーディネーター」がもつ裁量と「地域シニア会議」の結束力にかかっている。地域の活性化に高齢者の参加なくしては高齢者への敬愛も尊敬も生まれない。

テーマ別の活動主体を形成する地域の高齢者が力を合わせて健康（認知症や終末期医療も）について、就労について、生涯学習や趣味について、まちの緑化について、孫育てについて、あるいは世代間交流について、男女共生について・・・など。

長い高齢期を過ごすことになる生活圏（「エイジング・イン・プレイス」、中学校区）には家族があり、友人があり、かかりつけ医があり、「地域包括支援センター」がある。長い高齢期を安心してここで暮らして、老いて介護を受けて医療を受けて、最後は施設完結型（病院での死）

ではなく、地域や自宅での終末のときを迎える。「人生九〇年」を仲間たちとともに精いっぱい生きて、後人に敬愛されて、「平和の証」としての長寿を享受して去る。

元気なうちに住民として地域事業に参加して、できるかぎりの支援をする。それはいずれの日にか自分にもどってくる共生支援である。それに対して、いずれの日にか「医療・介護」のときだけやっかいになるうというのでは、やはり「恥ずかしい人生」であろう。

それぞれの地域が自治能力を証明

*新次元の地域社会を実現す

ここからは未見の情景であるが、本稿は避けては通れない。

いうまでもないことだが、地域の持つ事情によつて「地域シニア会議」（愛称「ぢぢさばばさの会」）のメンバーは異なるが、想定されるのは、たとえばNPOのリーダー、さまざまな職種（元サラリーマン、元議員、元職員、名誉教授、芸術家（陶芸や園芸など）、農産家、医師、僧侶・など。名誉町民もいる。その協議と活動が「地域特性」を持つまちづくりの拠点となる。

「地域シニア会議」と「生活支援コーディネーター」の活動のようすを具体的に見てみよう。

メンバーの来歴はふたつ。地元在住の旧住民（地識人）と外部で培った経験や知識をもつ新住民（知識人）である。

協議にあたっては、地縁組織は既存の權益を守るために排他的になつてはいけないうと、一方で外から参入した人びとは地域の伝統やしきみを軽視してこれまでの暮らし方を持ち込もうとするとはよくないことだ。お互いの持ち味を組み合わせた「地域シニア会議」が成立してはじめて、「地域特性」を持つまちづくりへの拠点ができたことになる。まとめ役が「生活支援コーディネーター」で、総力をあげた体制をつくらねばならない。この寄りあわせの巧拙が近隣の市町村との決定的な地域差を産む。

「地域シニア会議」は同時に、まちの将来を担う子どもたちの「青少年期のステージ」とこれまでの地域活動の中心である中年世代のための「中年期のステージ」とをよく観察した上で、これまでになかった新たな「高年期のステージ」をこしらえる。三者がバランスよく多重化して機能するまちの態様をつくりあげる検討をはじめめる。

この「地域の三つのステージ」の創出こそが、「長寿社会」に即応するしくみであり、そのために三世代それぞれが推挙したメンバーによる「三世代会議」という新しい活動主体を成立させることで推進される。高齢者のイニシアティブによってつくられる新たなしくみであり、それ自体が地域の総体を表現したものであり、地域の特性を作り上げる基盤となる。

いかえええ、青少年・中年・高年者の代表による「三世代会議」の「高齢者部門」が「地域シニア会議」ということになる。この「三世代会議」をリードするのは、もちろん高齢者代表でもある「生活支援コーディネーター」である。これがこれまで活動してきた「老人クラブ」

「婦人会」「社会福祉協議会」「地域包括支援センター」「シルバー人材センター」「生涯学習センター」「地域文化団体協議会」などと人脈が重なりながら、新たな人材と課題を巻き込んだ「特性あるまちづくり事業」の中心拠点となる。

ここまでたどりついたとき、はじめて官制の「生活支援コーディネーター」を支える力をもつ、民間の「地域支援」のしくみが見えて、これからの地域の歴史をつくる新次元の活動がはじまる。この「三世代会議」の運営は、それぞれの世代から推挙された代表者が当たる。

月ぎめで公開でおこなわれる「地域シニア会議」は、地域住民の仔細な要望をしっかりと聞きとる場である。たとえば高齢者の日用品の購入から、医院・病院への通院、図書館など公共施設の利用法、散歩道の整備、地産品情報、四季の伝統行事・風習、人物紹介、次世代との交流など、共通した課題から個別の要請までいろいろである。

公開だから爆笑と拍手と思わぬ展開の議論のうちに会議は進行する。地域の課題を具体的に取り上げて確認し、分科会を設け、その解決までを実行するのが役割である。

一般的には中学校区で二〇〇三〇人ほどが呼びかけ人（幹事）になり、幹事会を構成する。課題ごとに幹事のもとに七〇九人といった分科会を構成する。「わがまちのベスト・ナイン」がいい。そこでの他地域と異なる内容が将来の「地域特性のあるまち」をつくる契機となる。地域の実情を反映した会議のメンバーを、住民なら何人かを即座に推薦できるにちがいない。

何より「地域の本流（地域民主主義）」をつくりだす潮目の時期だから、ありきたりの発想や

表現力ではこの難題を乗り切れない。とくに公開の「地域シニア会議」では、未整理なナマの意見を的確に整理したり、多様な意見を調整したり、党派的な利害を排して中立を保ったり、民主的な進行のなかで即座に公平な判断ができ、柔軟な表現力のある人の司会が求められる。「地域シニア会議」が中心になって「三世代会議」を呼びかける。「三世代会議」が討議を重ねて作りあげた「地域特性を持つまちづくり」（ふるさと創生二一構想）は、住民をも自治体をも県をも国をも納得させるレベルで、「地方主権」「平和擁護」「民主主義」を具体的に担保する自治能力の表現となるにちがいない。

これこそが戦後に「与えられた民主主義」を基礎として、半世紀をかけて「みずから創った民主主義」の成立を証すことになる。国を守る国民意識の醸成も自治体の保持も「地域からの本流」であるここから始まる。ここからしか始まらない。そしてこの国の民衆にはいまそれを成し遂げる民力が蓄積されている。

「地域シニア会議」は、住民の意向を集約しながら、地域の高齢者や子どもたち、そしてみんなが暮らしやすい生活環境「長寿社会」を具体的に検討していく。これまでの医療、介護、福祉はもちろん、環境や物産や伝統行事や高齢人材養成といったテーマについても取り上げる。

地方議会はこれまでどおり「均衡あるまちの発展」を担い、「地域シニア会議」や「三世代会議」が「特性あるまちの発展」に寄与することになる。「人生九〇年時代」を生きる高齢者が、新次元の地域社会を後代に残す「歴史的なしごと」を仕上げることになる。

ここまでは未見の情景である。本稿はひとつの仮想空間を提案として通過した。先見の情景であるが、実態がすぐ追い越していくだろう。

四 人づくり、仲間づくり、まちづくり

「明治・昭和大合併」での人材養成

*「村立尋常小学校」と「町立新制中学校」

「人づくり」は市町村合併の重要な課題だった。

明治と昭和のふたつの町村大合併のときには、それぞれに新しい自治体が地域発展のための人材養成（教育）を重要な目標の一つとしたことに改めて注目したい。

明治維新後の「明治の大合併」のときには、わが村の「村立尋常小学校」が合併のシンボルとされた。村立小学校は子どもたちに多くの夢を与え、地域を発展させる人材を育成した。その夢はいっしかお国のためとなり、半世紀の後には戦争へと子どもたちを駆り立てていったが。三〇〇〜五〇〇戸の規模で教育、戸籍、徴税、土木、救済などが課題だった。

大戦後の「昭和の大合併」のときには、わが町の「町立新制中学校」が合併のシンボルとされた。子どもたちは町立中学校を卒業すると、多くは都会へ出て行って高度成長の担い手とな

った。八〇〇〇人規模で、新制中学、消防、保健衛生などが共通した課題だった。

さて二一世紀の新時代をめざした「平成の大合併」では、新しい自治体は将来の地域を担う人材を育成するために、何をシンボルとしたのだろうか。

今回、国（文科省）は、これまでの生涯学習のほかに明確な指針を示さなかったのである。

課題がなかったわけではない。明治の「村立尋常小学校」、昭和の「町立新制中学校」という合併時のステップからいくと、「市立の高等教育機関」であり、それは合併協議の「少子・高齢化」に見合う対策である意味からいって、高齢者が対象の教育機関となるべきものであった。

「市立高年大学校」といった態様のものが想定された。すでに各県・各市には六〇歳以上を対象とする「地域生涯大学校」（高齢者大学校・シニアカレッジなど名称は多様）が開設されていて、高齢人材教育の多様な成果をあげており、本来なら合併協議の場で、文科省が地域自治体の主導において地域発展のために設置を検討するよう指示すべきだったのである。

本稿の使い分けからすると、生涯学習は年齢にかかわりのない「長寿社会」のためであり、「市立高年大学校」は高齢化時代の高齢期（二〇年以上）のための教育機関だったのである。

まことに残念だったのは、平成の市町村合併の先駆を担った地方の自治体にはそういう構想がなかったことである。そして文科省にそういう高齢人材養成を推進する機関を新設する強い意向がなかったことである。

「市立高年大学校」（高齢人材養成センター）

* 地域社会をつくる高齢人材を養成する

市町村合併時に検討すべきどういいう構想がありえたのか。

地元の高齢者、地域に帰って過ごす高齢者を対象にする高齢人材養成機関である。対象者は六〇歳以上。これから二〇年以上に及ぶ長い高齢期を安心してすごすための知識・技術を学ぶとともに地域のもつ課題を考える。つまり地域で健康に高齢期をすごし、その能力をみずからの人生の充実と地域の発展のために活用する高齢人材を養成し、同時に生涯の友人を得るための機会とする施設だったのである。

地域には医療・介護・福祉のための「地域包括支援センター」があり、就労のための「シルバー人材センター」がある。それとともに、「高齢社会」を支える新たな高齢人材を養成する「地域高齢人材養成センター」が構想されて、その中核になるのが「市立高年大学校」なのである。

中学校区規模で希望者全員が修学することを目標にして、自治体が運営することになる。

「平成の大合併」時の重要な検討課題であった高齢人材養成なのだが、文科省からその提案はなく、省内に担当する部局もつくらずに過ぎたことを、地域高齢人材養成における欠落として受け止めねばならないだろう。もちろん、これからでも遅くはない緊急課題である。

幼児期保育・教育とともに、新たな「長寿社会」に対応する高齢人材養成の教育機関が厚労

省・文科省の共管によって検討され、自治体に新設が指示されなければならない時期にある。

ここは一〇年遅延を認めた上で、なお高齢化が進行するわが国の緊急課題として、政府一体での早急な検討と対処が必要だろう。「人生六五年時代」から「人生九〇年時代」への意識変革を促し、高齢者に社会参加を訴えたのは、ほかならぬ内閣府の「新・高齢社会対策大綱」である。六五歳〜九〇歳までの二五年の長い「成熟期の人生」を送るに当たったの知識や技術や生涯にわたる友人はお互いの人生を豊かに過ごす必須の条件である。

合併の結果、「個性ある地域の発展」という目標とは裏腹に、往年の特性や精気を失って萎えている地域がみられる。「市立高年大学校」（中学校区）の修学生と卒業生とその周辺の人びとの活気ある取組みが地域社会の活性化に与える影響は測りしれないのである。

新しい「地域社会」が、高齢者のだれにとっても暮らしやすい姿になるためには、地域社会を支える高齢人材の養成は不可欠なのである。

生涯の友と「地域カリキュラム」を学ぶ

＊地域特性をまちづくりに活かす

多くの県が「教育立県」を宣言しているのは、何より地元で暮らして地元を豊かにする人材の育成に力を入れているからである。

すでに全国各地で成果をあげている「地域高齢者大学校」（生涯大学校、シニア・カレッジほか名称はさまざま）は、地域活性化を担う人材を養成するために、それぞれに地域性を加味したカリキュラムを構成している。

修学するのは六〇歳をすぎた高齢者。これまでの経験に重ねて「人生九〇年時代」の高齢期人生を見据えて、有意義に過ごすための知識や技術を新たに習得し、生涯の学友を得る。その人びとが地域でいきいきと暮らす姿が増えるために「地域カリキュラム」は重要な要素である。ここで注目すべき実例として、兵庫県の「いなみ野学園」を見てみよう。

全国に先駆けて一九六九年に開設した四年制高齢者大学校で、六〇歳以上が入学資格。週一回の講義で、学科は園芸、健康づくり、文化、陶芸の四つ。クラブ活動には高齢者らしく、ゴルフ、詩吟、ダンス、盆栽、謡曲、表装、太極拳、ゲートボールなどがある。より専門性をもつリーダー養成の大学院も設置。一九九九年の「国際高齢者年」に「いなみ野宣言」を出している。学科でもクラブ活動でも個人的に夢中になれる教科が重要な要素になっている。

「地域高齢者大学校」は名称もいろいろ。沖縄県は「かりゆし長寿大学校」（一年制）、島根県は「シマネスクくにびき学園」（二年制）、橿原市は「まほろば大学校」（二年制）である。

各地で各様の構想で実施されており、東京の世田谷区生涯大学シニア・カレッジ（二年制）、江戸川区総合人生大学（二年制）、成田市生涯大学院（三年制）などではそれぞれに独自の学科とカリキュラムで模索を重ねながら、個人的な能力の開発、地域社会が必要とする多様な能力

の養成などの目標を掲げて活動している。

ほかにも栃木県シルバー大学校（二年制）、千葉県生涯大学校（二年制）、鳥取県ことぶき学園（一年制）、長崎県すこやか長寿大学校（二年制）、明石市あかねが丘学園（三年制）、明石市好古学園大学校（四年制）など、それぞれの特徴を活かして開校している。

自治体主導で官民協働の特徴のある「市立高年大学校」（中学校区）の全国展開が、地域創生のために急がれる時期にある。

地方大学は「多重活用」が生き残り策

＊子は昼に親は夜に同学親子の談論風発

地方の公立大学は「均衡ある国土の発展」のために、全国どこも共通の同じようなカリキュラムを組んできたために地域の特徴を活かすことができないできた。

だが国の政策が「個性ある地域の発展」へと転回して、地方大学は独自の地域性を取り入れた講座によって変容するチャンスを迎えている。地域経済、地場産業、地方文化・言語・歴史、伝統工芸などといった「地域関連講座」が並ぶことになる。主な受講者はここを「エイジング・イン・プレイス」と定めて人生の第三期を過ごす高齢者である。

地方大学が地域の特性を採り入れた課程を強化しているのは、時代に即応した生き残りの手

法でもあるからだ。早い例では、東京経済大学では二〇〇七年四月からシニア対象の大学院を開講した。立教大学でも開講。早稲田大学は学外キャンパスで開講している。埼玉大学は「充実した第二の人生を埼玉で」ということで夜間コースをシニアに開放した。

地元にもどって高齢期を迎えようとする人びと、高齢期を迎えて新しい知識を求める地域住民の要請に応じて開設するのが、地方大学の「シニア学部」「シニア向けカリキュラム」である。人気テーマには全国から高齢者が勉強にやってくる。長期滞在し、そのまま定住者あるいは永住者になるかもしれない。地域創生にかかわる物産情報・地方文化といった講座は人気になるだろうし、大学は高齢者人材の集積、発信拠点としての機能をはたすことになる。

同じ時期、同じキャンパスで、オヤジやオフクロは夜間の「シニア学部」で人生第三期のための知識や情報と生涯の友人を得る。そしてムスコやムスメは昼間の大学課程で、人生第二期の社会参加のための専門知識を学び、活動期の友人を得るといふ地方大学の「多重活用」である。

六〇歳をすぎて長い高齢期を視野に入れた「カリキュラム」でスキル・アップして、前職の経験を合わせて「人生の第三期」をめざすオヤジやオフクロや先輩たちの意欲的な姿が、同じキャンパスでグータラに過ごしていた現役学生に与える影響が大いに期待される。

「大学多重活用」のメリットはもうひとつ。「シニア学部」には六〇歳をすぎてなお知識欲の旺盛な人びとが学びにくるわけだから、名誉教授や「シニア教授」のスキル・ブラッシュ、つまり知識のさび止めにも大いに役立つことになる。

その四 人生の「達人」としての八面玲瓏

— まあ、いいか、でいいか

「現役長生」のステージを迎えたのに

*意識は未熟かまだ半熟のまま

深夜に、愛用のパソコンを前にして、「八面玲瓏」と書こうとした。

無理かなとは思いつながら「れいろう」と打ったら、なんと「冷老」とでた。眠気覚ましにしてはいささかサービス過剰な応答である。パソコンの辞書からは学ぶところも少々はあるが、気ままな応答には多々困らせられる。

「玲瓏」くらい一発で出なくては、辞書として失礼ではないか。

「だれに対しても曇りなく応対できて、処世が円滑である境地を示す」

とあるのは、さすがペーパーの辞書。

棋士の羽生さん（善治。永世名人）が好んで揮毫するそうだが、盤上の争いとはいえ、真剣勝負を前にしての透徹した心境だって示せる、含みの大きいことばなのである。

夜も三更（これも一発では出ない。午前さまのころ）にいたって、日録に「八面玲瓏」と書

こうとしたわけは、ひとりの「人間」として、ひとりの「親」として、ひとりの「働き手」として、また、ひとりの「住民」として、ひとりの「市民」として、ひとりの「国民」として、ひとりの「国際人」として、そして、ひとりの「現代人」として、八面の自分を自省して、だれに対しても曇りなく応対したいと願ったからである。

棋道の達人である羽生永世名人なら、盤の向こうに對面するのはいずれ劣らぬ好敵手であるが、願って人生の「達人」をめざそうといういま、盤の向こうにいるのは、他でもないもうひとりの自分である。もちろん先手はこちらにある。

「おまえが達人？ 丈人までは納得できたが・・・」

そう口撃の先手を打たれて、初手から「挙棋不定」である。コマを手にとって挙げたものの、打つ心が定まらない。打たなければ先へ進まない。

「まあ、いいか」

そこで定石の三六歩にコマを置く。

国民の一人ひとりに対して、これまでの意識を改めて、「人生九〇年」にむかって社会を変えながら過ごしてほしいという要請を出したのは、先にも記したように、内閣府である。

新世紀になってこの一〇年余り、顧みればわかるように、国からそんな指摘や要請があったことはなかった。だから六五歳から支給される「年金」を頼りに長い余生を不安に感じながらも生きることに違和感はなかったのである。このたび指摘されたのは、「高齢者意識」の成熟と

高齢者としてみんなが願うような「モノ・居場所・しくみ」の形成への参加である。ふたつのどちらにも留意してこなかったのは、省みてたしかである。

「高齢者意識」については、多くの「国民」は六五歳からの延伸を意識することがなかった。だから成熟どころかなお未熟でありせいぜいが半熟のままなのである。まずは「高齢者意識」を「人生六五年時代の引退余生」から「人生九〇年時代の現役長生」に改めること。

これまでそういう暮らし方をしてきた生涯現役型の人はそのままでもいいが、現役時代のトツプギアからミドルあるいはロウにチェンジしてしまった人にとっては、いまさらの思いがあるだろう。とはいえ自省する機をえて納得したのは、高齢者（六五歳以上）が三二〇〇万人、二五％に達してなお増えつづける社会では、二〇年を越える「余生」を送る一人ひとりの高齢者に、このまま最良の介護・医療を提供しつづけ、穏やかに終末までを看取ることなどできなくなる、ということである。周辺を見、総体を思えばだれもが納得せざるをえないことである。

「でも自分だけはなんとか」と考えるとき、それは格差を認める思考過程に入ることであり、「温かな助け合い」から抜け落ちることになる。大正時代に、芥川龍之介が書いた『蜘蛛の糸』の糸にすぎる韃陀多と同じように、いずれ助かることなく地獄に落ちるだろう。

といって、すべての高齢者が九〇歳まで生きられるわけではなく、願っても女性で半分、男性は五人にひとりであることを考慮すれば、何がなんでも「九〇歳・現役長生」型人生をすべての人がというのは酷な話。といって、みんながみんな「六五歳・引退余生」型人生を送って、

自分だけはこの幸運を祈る思いにさせるのも罪な話。酷でもなく罪でもない穏当な話にしよ
うということである。

どうすればいいのか。

ここでの提案は、一人ひとりが、日また一日の暮らしを、「人生六五年時代の引退余生」から
延伸して、平均年齢である「男性・人生八〇年時代」、「女性・人生八五年時代」の「現役長生」
と捉えなおすこと。その上で一人の「住民」として、「市民」として、「国民」として、「八面玲
瓏」を心がけて生きる仕方を自得することではないのか。

「地方創生」のこの時期に、ひとりの「社会人」として「地域デビュー」することは恥ずかし
いことではない。現役時代からの「地閉症」をつづけることのほうが恥ずかしいと思うこと。
「共生の文化圏」に身を投じなければ、その症状は生涯変わらないだろう。

ここでは「現役長生」の立場で、生涯にわたって実直に、「自己目標の達成をどこまでも追い
つづける人」であり、だれにも同様の人生があることを察して、ことばやふるまいに配慮し、
だれとも等しく接することができる人を「達人」と呼ぶ。目標は未達でも、それをめざす姿が
「達人」だからである。これなら特定の有名人だけではなく、だれもが「達人」になれる。

盤をはさんで、そんな会話をし、みんなが暮らしやすい地域や職域にする活動に、どう参加
したらいいかと良策を争っている自分がある。

高齢者はすべて「社会の被扶養者」として

＊みんなで渡った「霞が関の赤信号」

この国はどのようにして高齢社会対策に遅延を起こすことになったのか。

新世紀を迎えたころ、国際的な潮流である「高齢化」（高齢者の増加）のなかで、体現者である高齢者層がスムーズに活動し生活できるように、政治リーダーは「日本高齢社会グランドデザイン」を衆議して掲げて、増えつづける高齢者の参画を呼びかけねばならなかったのである。

新世紀の「高齢化」は国際的潮流であり、わが国はもちろんのこと、国連からは各国が「すべての世代のための」高齢社会」を形成するよう要請が出ていたのである。わが国でもこの間には「高齢化」に関する次のような事業活動が立てつづけにおこなわれている。

一九九五年には「高齢社会対策基本法」を制定（村山富市内閣）

一九九六年には「高齢社会対策大綱」を閣議決定（橋本龍太郎内閣）

一九九九年には国連の「国際高齢者年」の記念事業（小渕恵三内閣）を全国的に展開

二〇〇一年には「高齢社会対策大綱」を見直し（小泉純一郎内閣）

二〇〇二年にはスペインのマドリードで第二回「高齢化に関する世界会議」。このスペインのマドリードでの第二回世界会議には、わが国からも代表が参加した。

この重要な時期に、当時の首相は「所信表明演説」（二〇〇一・五・七）で何といったか。

将来の高齢者増による「ケア」の負担増を取り上げて、

「給付は厚く、負担は軽くというわけにはいきません」

と言い放つありさま。

それが間違っているというわけではない。だれもが納得できる内容だからである。

しかしここでの問題は、政治の側の関心がだれも否定できない善意の予算とみられていた「高齢者対策」にあり、「高齢社会対策」でなかったことにある。シーリングがかかった予算のなかであって、焦眉の急は個人に対する「介護・医療・年金」だったからである。

「元気ならみずから生きよ」

それが首相ばかりではなく、おおかたの為政者と官僚の時代認識であった。

「高齢社会」にむかう時だからこそ、「給付は厚く、負担は軽くだけは、何としても保っていきたい」と訴えて、将来の国の財政難を説きつつ、これから増えつづける元気な高齢者層に、「自助と自律」の高齢者意識の醸成とともに、高齢者が暮らしやすい社会への参加を求めるのが政治リーダーの構想力というものだったのではなかったか。

その「所信表明演説」を聞いて、天を仰いで慨嘆した学者や官僚や高齢社会活動家や高齢者がいたはずである。わたしもその一人であった。

このままだと、これは記したくないのだが、

「年老いて負担がかさむと考える心優しい高齢者が、善意で死に急いでくれて、日本高齢社会は思いのほかスムーズに形成できました」

なんてことにならざるをえないのではないかと思われた。

一〇年余りの延滞で、その気配がみえている。来たるべき国際的な「高齢化時代」を展望する時、先行高齢化国の日本として、その経緯はあまりにつらすぎる。

新世紀のはじめ、先の「所信表明演説」をしたのは、時の小泉純一郎首相である。

いま「原子力発電の全面禁止」を訴えておられるが、君子豹変して、「高齢社会対策」の延滞をつくった者を代表して展望のなかった過ちを弁明してほしいのである。今世紀はじめに、善意の「社会保障」政策を掲げて、みんなを誘導して「霞が関の赤信号」を渡ったのは、優れた厚生大臣でもあった小泉首相だったのだから。

アベノミクスからは実人生で何の恩恵も受けず、広がった格差の底で、高齢者が、「この国の将来の姿は見たくない、子どもたちに少しでも資産を残せるうちに死にたい」とつぶやくような国をだれが望んだだろう。

今世紀のはじめ、まだ先輩が残してくれた資産（隠し資産も）があったころ、政治リーダーとして、一〇年後の「高齢社会」の姿を構想できなかったのである。「多岐亡羊」というべきか、さがすべき羊がないほうへ路を渡ってしまったのである。

「高齢者は社会の被扶養者である」

と位置づけて、その上での「医療・介護・福祉・年金」の施策では国際的評価を得たし、平均寿命や健康寿命では世界一となっている。これらは率直に世界に誇るべきことなのである。

しかし、そのとき政治リーダーは「日本高齢社会グランドデザイン」を衆議したか。

先の小渕内閣での「消費税」のとき、「社会保障」のための完全目的税にするため、当時の宮澤蔵相を説いて認めさせた長老政治家は、

「そういう構想力は政治リーダーにはなかった」ともらしてくれた。

政権内にそういう動きがまったくなかったわけではない。

二〇〇一年一二月、小泉内閣は五年ぶりの「高齢社会対策大綱」改正を閣議決定しているのである。紙背まで読まなくとも、その記述の中に、優れた官僚と学者によってなすべき対策は埋めこまれている。政界が「世代交代」の嵐の中にあつたとはいえ、政治リーダーが五年、一〇年先の「高齢化」の状況に発言しなかつたといわれても弁解の余地はないだろう。

高齢者の面倒をみるのは、これまでは「騎馬戦」型でいずれは「肩車」型になるといわれる。

高齢者の増加と労働人口の減少の先をみて、高齢者扶助での現役世代の負担増をわかりやすく説明した図であるが、こんな実態とちがった図柄はない。

現実の「騎馬戦」図をよく見てほしい。上にいるのはりりしい少年であり、支える側の前に

いるのがハチマキ姿の元気なおじいちゃん、両側にいるのが両親である。現実の「肩車」図をよく見てほしい。上にいるのはかわいい孫娘であり、下で支えているのは元気なおばあちゃんではないか。

「平和団塊の世代」(戦後ツ子)が舞台に立つ

*「現役長生」型人生のニューフェース

ご存じのように、一九四五年の敗戦のあと一九四七〜四九年に生まれた約七〇〇万人のひととを、やや失礼と知りつつ「団塊の世代」と呼んできた。一九七六年に作家の堺屋太一さんが『団塊の世代』を書いて、そのポリウムゆえの社会的影響を指摘して以来の呼び名である。

しかし本稿が用いている戦後ツ子としての「平和団塊」というのは、同じく二〇〇万人余が生まれた一九五〇年と、終戦の翌年である一九四六年生まれの一四〇万人を加えて二一世紀を迎えた一〇三七万人(二〇〇〇年一〇月・国勢調査)を指している。

「平和団塊の世代」は「現役長生」型人生のニューフェースである。定年で生産者としてはギアを下げたかもしれないが、消費者としてのポリウムの大きさは変わらない。

時代の要請を受けて、「人生九〇年(六五+二五年)時代」の第三期二五年のステージを、「現役長生」型の高齢者として過ごす若き高齢者「平和団塊」のみなさんに本稿は注目している。

内外の後人は、敬意をもってその歴史的活動を見守っていくにちがいない。

ここで主役になる「平和団塊」のみなさんの横顔をすこし紹介しておこう。

一九四六（昭和二一）年

仙谷由人（一・一五 政治家） 鳳蘭（一・二二 俳優） 松本健一（一・二二 作家） 宇
崎竜童（二・二三 歌手） 美川憲一（五・一五 歌手） 北山修（六・一九 歌手） 新藤
宗幸（六・二五 政治学） 柏木博（七・六 デザイン） 岡林信康（七・二二 歌手） 堺
正章（八・六 TVタレント） 坂東真理子（八・一七 官僚） 田淵幸一（九・二四 プロ
野球） 菅直人（一〇・一〇 政治家） 秋山仁（一〇・一二 数学教育） 藤森照信（一一・
二一 建築史） 倍賞美津子（一一・二二 俳優）

一九四七（昭和二二）年

橋本大二郎（一・一二 政治家） 衣笠祥雄（一・一八 野球評論） ビートたけし（一・一
八 TVタレント） 星野仙一（一・二二 プロ野球） 尾崎将司（一・二四 プロゴルフ）
西郷輝彦（二・五 歌手） 鳩山由起夫（二・二一 政治家） 津島佑子（三・三〇 作家） 千
昌夫（四・八 歌手） 上原まり（五・二三 琵琶奏者） 荒俣宏（七・一二 作家） 中原
誠（九・二 将棋棋士） 小田和正（九・二〇 歌手） 北方謙三（一〇・二六 作家） 金
井美恵子（一一・三 作家） 西田敏行（一一・四 俳優） 森進一（一一・一八 歌手） 池
田理代子（一二・一八 漫画家） 布施明（一二・一八 歌手）

一九四八（昭和二三）年

高橋三千綱（一・五 作家） 輪島大士（一・一一 大相撲） 毛利衛（一・二九 宇宙飛行士） 里中満智子（一・二四 漫画家） 赤川次郎（二・二九 作家） 五木ひろし（三・一四 歌手） 赤松広隆（五・三 政治家） 江夏豊（五・一五 プロ野球） 都倉俊一（六・二一 作曲家） 沢田研二（六・二五 歌手） 上野千鶴子（七・二二 女性学） 井上陽水（八・三〇 歌手） 鳩山邦夫（九・一三 政治家） 橋爪大三郎（一〇・二一 社会学） 糸井重里（一一・一〇 コピーライター） 由起さおり（一一・一三 歌手） 舛添要一（一一・二九 都知事） 谷村新司（一二・一一 歌手） 内田光子（一二・二〇 ピアニスト）

一九四九（昭和二四）年

村上春樹（一・一二 作家） 鴨下一郎（一・一六 政治家） 林望（二・二〇 国文学） 海江田万里（二・二六 政治家） 高橋真梨子（三・六 歌手） 平野博文（三・一九 政治家） 武田鉄矢（四・一一 歌手） 高橋伴明（五・一〇 映画監督） 萩尾望都（五・一一 漫画家） ガッツ石松（六・五 ボクシング） 矢沢栄吉（九・一四 歌手） 佐藤陽子（一〇・一四 バイオリニスト） 堀内孝雄（一〇・二七 歌手） 松崎しげる（一一・一九 歌手） 森田 健作（一二・一六 政治家） テリー伊藤（一二・二七 演出家）

一九五〇（昭和二五）年

残間里江子（三・二一 プロデューサー） 舘ひろし（三・三一 俳優） 和田アキ子（四・

一〇 歌手) 坂東玉三郎(四・二五 歌舞伎俳優) 東尾修(五・一八 プロ野球) 中沢新一(五・二八 宗教学者) 池上彰(八・九 ジャーナリスト) 姜尚中(八・一二 政治学者) 八代亜紀(八・二九 歌手) 辺見マリ(一〇・〇五 俳優) 塩崎恭久(一一・七 政治家) 梅沢富士男(一一・〇九 俳優) 岩合光昭(一一・二七 写真家) 綾小路きみまろ(一二・〇九 漫談家) 神田正輝(一二・二一 俳優)

この一〇〇〇万人の一人ひとりを、敗戦後のきびしい生活環境の中で生み育てた両親の思いを想起して、本稿は新世紀の国際平和を支える高齢社会の主役として「平和団塊の世代」と呼んで注目してきた。「団塊世代」では即物的にすぎて、また「平和世代」では理念的にすぎて、いずれも不満かもしれないが、あわせて「平和団塊世代」と呼ぶのをお許しねがいたい。

先進諸国の同世代の人びととともに、この「平和団塊の世代」(戦後っ子)が、平和裏にみずから安心して後半生をすごせる社会を形成し、長寿を全うすることが、前世紀の戦争の惨禍と混乱の中で両親が希い求めた「平和に生きる」ことの証にちがいないからである。

わが国の高齢者の一人ひとりが世紀をまたいで、人類の普遍の願いである長寿を体現している。こんな役回りは願っても求めても得られるものではない。

そして二一世紀半ばの二〇四五年、「日本国憲法」は平和に徹した高齢化先進国の日本が持ちきたった誇るべき「世界平和の証」となる。一〇〇年保持しつづけて「百寿」で迎える「日本国憲法一〇〇周年」は、国際社会からスタンディング・オベーションを受けて迎ええられること

になるだろう。世紀のドラマまで、あと三四年である。「平和団塊」のみなさんは、そのときの証人として参加するために、「人生一〇〇年」をめざして歩むことになる。

二 住民・市民・国民として

熟成期を共有する「地域シニア文化圏」

*何万という水玉模様が存在のかたち

本稿では「地域シニア文化圏」ということばを、強い把握力をもつ高齢期キーワードとして位置づけている。

「シニア文化圏」というのは、「人間六〇年」を過ごして、それぞれに個性的にわが道での業績を積み上げてきた高齢者が、異なった成果を得た人びとと出会い、お互いに経験や業績を語り合い、高齢者同士でなければ味わい得ないレベルの理解を共有することを目途として集った場（高齢期の文化拠点）といった程のところ。高齢者の「家庭外の居場所」といつてもいい。

少し排他的にいえば、「利」を望まずに、あるいは望んでも優先せず、「文を以って友と会す」といったところ。少し加えていえば、青少年や中年の存在を脇に置いて、「おとながおとなの文化を語っておとなの文化を感じる場」といったほうが分かりやすいかもしれない。

そう気づいていないだけで、すでにさまざまな形で存在しているから、とくに新しいことを言い出しているわけではない。ここではそれを高齢期を意識した視点から捉え直すことになる。「あ、これはシニア文化圏だ」と意識することで、高齢社会のなかにそれぞれに個別な特色をもって重なった水玉模様のような印象の存在として見えてくればいいのである。

語られる「シニア文化の内容」とはどういうものか。

「環境」とか「文化」というと、どうにでも広くも狭くもなるが、狭く考える必要はないだろう。学術的な領域から芸能・スポーツ、健康、暮らしの知恵に至るまで、万般にわたってみなが共有しているもつとも広い意味での「文化」のイメージでいい。語りあっている内容を「文化」と意識すること。少し限定するとすれば、六〇歳を経た高齢期にある人が関心をもって考え、語り、感じとり、作り、表現した事象・事物を主に対象とする、ということぐらい。

二〇一二年三月に亡くなったが、同時代人として並みならぬ思索の根っこを持つていた吉本隆明さんのような人の、一九六〇年代の状況下でロゴス（統一法則を内包することば）の混乱にまきこまれながら柔軟で示唆的であった『共同幻想論』などから、思索の根っこをそのまま曝した『老いの流儀』などの近作にいたるまでの、中年期と高年期の作品を合わせて採り上げてみるのもおもしろい。また『蓮如』を書いた五木寛之さんは、古代インドの「四住期」から想をえて人生のありようを説く『林住期』を書き、最近『新老人の思想』を書いた。個人の生き方のありようを話しあうにはいい。井上靖さんの『孔子』や瀬戸内寂聴さんの『釈迦』と

いった史上の人物についての作品は、作者の生き方と重ねて、さまざまな角度から語り合える素材となる。曾野綾子さんも『人間にとって成熟とは何か』で終末期への心がまえをていねいに説く。こんな著作から身近な和食や認知症対策まで経験と知識が飛び交えばいい。

文化圏の「圏」としての大きさは、どうだろう。

テーマや参加する人にもよるだろうが、「最小規模の多数」である七〇一人といったところが基本だろうか。私的な親しい仲間の会としての四、五人の会では、少ないために変則や異見といった「文化を生じる」要素を含み込みづらいが、時にゲストを呼んでみることで新たな「文化圏」になるだろう。

また多すぎると散漫になる。わかりやすい例としては、多くの会議や学会の総会そのものも高齢者が中心の「シニア文化圏」ではあるが、その後の「二次会」のほうを基本型と考えたらどうだろう。二次会なら五、七人でも談論風発、結論を出す必要もなく、話題はさまざまに移っていく。ひとつのテーマをめぐる場合もあるが、意見が二つに割れたり三つになったり、二つの話題が混ざって語られたり、また一つにもどったりする。その自在性の中に「最小規模の多数」による発見と味わいがある。

高齢者同士が自由自在に「文化を語って文化を生じる場」が「シニア文化圏」であり、高齢期の人生の成熟をとくに実感しあえる愉快な「高齢期の居場所」なのである。

高齢期になって親しくつきあえる人といえ、だれでも「学友」と「同僚」と「親族」の三

点セットのうちに、幾人もの信頼する相手を持っているだろう。

しかし実はこの三点セットだけでは長い高齢期の人生を充足して送るには心もとないのである。心もとない理由は、どれも高齢期になって自らが選んだものではなく、与えられた環境下で得た人びとであり、外に閉じた仲間だからだ。

高齢期に心躍る人生の充足を得るには、さらに地域や目標とする分野からあらたに加えて五つ七つの「シニア文化圏」での活動が、高齢期の人生に変化と厚みのある成果を刻んでいくことになる。「シニア文化圏」だからといって「青少年」や「中年者」を排することではない。中心になる構成メンバーが高齢者であり、中心テーマが高齢者が対象とするものということであって、とくに次の会員となる中年の人びとには開かれたものでいい。

ほどよい「シニア文化圏」の存在が、一人ひとりの「第三期ステージの人生」の充足と重なるであろうことは確かである。

多岐にわたる高齢者活動

*リードする「昭和丈人層」の人たち

昭和生まれの高齢者層が、あるべき存在感を示していないわけではない。わが国の「高齢者活動」は湧出期にあつて、その中心にいて主導しているのは、まぎれもない昭和生まれのみな

さんなのだから。長い苦闘の経緯をもつ高齢者ケアとしての「福祉」「医療」「介護」の分野はもちろんのこと、高齢者活動は、実にさまざまな領域へと広がっており、際立つ分野だけでもこれほどにある。

各種の生涯学習（趣味、生きがい、健康）。

虐待防止、遺言相談。後見人相談。

高齢者雇用、起業支援。

年金、貯蓄・投資、マーケット情報、保険。

シニア向け新商品開発、介護福祉機器・電化製品、車・乗り物などの製造・販売。

ショッピング、通販、宅配。

ファッション、料理、食品、レストラン、居酒屋。

ケア付き住居、いなか暮らし、住宅改修（バリアフリー）、家具・用具。

パソコン教室・通信、カルチャー講座・セミナー・シンポジウム、イベント。

シニア向け新聞・雑誌・広告、テレビ・ラジオ番組。

短歌・俳句・川柳、ナツメロの会、自分史、楽団、手づくりクラフト。

ゲートボール、テニス、ゴルフ、太極拳・ヨガ、碁・将棋、ゲーム。

環境美化、伝承活動、世代交流。

国際交流、海外ツアー、旅行、ホステル、国民宿舎。

・などなどである。

組織の名称はといえば、「シニア」が圧倒的に。「老人」や「シルバー」といった先輩格のもの、しつかりと根をはって活動している。

「老人」ということばは、老練、長老、老師など経験を積んだ高齢者をもいうのだが、どうも旗色が変わるのは、長く「老人ホーム」や「敬老会」など、支えられる高齢者像が随伴してきたために「高齢弱者」をねぎらうというニュアンスが働いているからだ。

「敬老」には「敬老尊賢」という味わいのあるすつくと立ついいことばもあるのだが。そのあたりの欠落をフォローするために本稿の「丈人」が意味合いをもつことになる。

「老人のつく活動組織」での代表は「老人クラブ」である。敗戦後間もない一九五〇（昭和二五）年に発足して以来、自治体と連携しながら地域の高齢者の生きがいと健康づくりに貢献してきた。「全国老人クラブ連合会」（全老連）には、一一万クラブ、約六七〇万人の会員が参加。

「友愛訪問」「伝承活動」「環境美化」「世代交流」といった幅広い活動に実績を積んでいる。

本稿が「老人力」や二〇一三年六月に亡くなったなだいなださんの「老人党」の活動に関心を持ちながら、新しい「高齢化」の活動にあえて「丈人論」を展開しているのは、既成の活動が収容しきれしていない高齢者活動に注目しているからで、決して他を否定的にみているわけではない。

個人的には、「高年期の人生は明日をも知れない」ことに実感があり、「九〇歳なんて結果で

あつて意味がない」という生き方もある。高齢期の生き方は多彩であつていい。高齢者みんな何かをとるのは、いささかキツイ話だからである。といって、みんながみんな内向的になつてしまうのは、社会の姿として困ったことになる。

湧出する「第三期シニア・ステージ」

*「シニア」ほか多彩なカタカナ団体名

高齢者の活動の湧出期にあつて、さまざまな分野で新しい活動が進められている。そこでカタカナ語の団体・協会が続出している。

ここで立ち入ってカタカナ語に触れたのは、高齢者活動は、さまざまな方向でそれぞれの立場で、熱心に活動している人びとと組織に支えられているからで、どれかひとつとはいかない。それどころか多いことはいいことなのである。まだまだあるのだが、多岐にわたることを知っているただくためのほんの一例としての紹介であり、お名前をあげたところにも、あげなかったところにも、失礼をお許しねがいたい。

「シルバー」・「アクティブライフ」

「シルバー」は、グリーンやブルーといった「アシッド・カラー」（柑橘類の色）などに対する色彩の比較から生まれた和製語である。

高年者を「シルバーエイジ」としてとらえて、活動的なイメージを付加して、運動・旅行・講座などの研究所や教室が用いている。高齢者の能力を活用する「全国シルバー人材センター事業協会」や「シルバーサービスマネジメント協会」などは定着している。

「アクティブライフ」は、活動的な暮らしをめざすことで、高年者主体のボランティア・グループが用いている。「ニッポン・アクティブライフ・クラブ」など。

「エイジド」・「エージング」・「エイジレス」

「エイジド」や「エージング」などは、それぞれに年輪を刻んで到達した営みが意識されて使われている。

「エイジド」は、ワインやギターやコーヒー豆での利用が優勢だが、経験を積んで熟成した意味で、これも高齢者を支えるボランティア組織やNPOが用いている。

「エージング」は、老化がすすむことを意識して「アンチエージング」として医療や美容外科など、もっと広く「わかづくり」ほどの意味で用いられる。「ウエルエージング」や「アクティブ・エージング」として高齢期を積極的に受け入れる立場を示している。「エージング総合研究センター」や「日本ウエルエージング協会」は歴史をもつ活動をおこなっている。

「エルダー」は、旅好きのおとなのための「エルダー・ホテル」が世界一〇〇カ国に開設されていて、学習と旅をあわせた高齢者対象の活動をしているのが目立つ。「日本エルダー協会」や「エルダーホテル協会」など。

「エイジレス」は、年齢にとらわれないという意味で「エイジレス・デザイン」「エイジレス商品」「エイジレス・ライフ」などとして広く用いられている。

「ユニバーサル」

一方に、高齢を意識しながら人生に年齢は無関係であり、それを越えたものであるという意味での「ユニバーサル」が知られる。

「ユニバーサル」は、だれもがという意味合いで、とくに「ユニバーサル・ファッション」が、高齢者にも障害者にも快適で喜ばれるファッションとしてバリアフリーが意識されて用いられている。「ユニバーサル・ファッション協会」など。

「高齢者活動団体」

活動の広がりを見るために紹介がカタカナ語に片寄ってしまったが、とくに福祉を核としながら活動してきている「高齢者活動団体」は枚挙にきりが無い。

その推進役になっている組織・団体の存在を見落として先にいくことはできないので、その場でないからほんの一例にかぎるが紹介しておきたい。失礼があればお恕しねがいたい。

福祉・介護・市民後見人の「さわやか福祉財団」「ダイヤ高齢社会研究財団」「全国介護者支援協議会」、医療の「国立長寿医療研究センター」、高齢者・加齢学研究の「東京都健康長寿医療センター」（老人総合研究所と老人医療センターが統合）「日本応用老年学会」「シニア社会学

会」、高齢者雇用の「高年齢者雇用開発協会」「高齢・障害・求職者雇用支援機構」「日本高齢者生活協同組合連合会」「高齢社」、高齢女性の「高齢社会をよくする女性の会」、毎年「ねんりんピック」によって活力ある長寿社会をめざす「長寿社会開発センター」、生涯学習の「生涯学習開発財団」、住宅に関する「高齢者住宅財団」、高齢活動人材養成の「社会教育協会」「高齢社会検定協会」、高齢社会の「日本ウエルエージング協会」「エイジング総合研究センター」など。

そして一九九九年の「国際高齢者年」の国民運動を機に設立された「日本高齢社会NGO連携協議会」(JANCA)にはNGO(非政府組織)・NPO(特定非営利活動法人)を中心にした多くの活動団体が参加して運動を支えている。

そして何より心づよいことは、「高齢社会」形成の主役を体現しながら活動する組織を支えているのが、先の大戦の惨禍と戦後の混乱を身をもって知っている昭和前期・中期生まれのひとであることである。

日本型本線は「多子化・高齢化社会」

*有史以来という「少子化・高齢化」に対処

わが国の「総人口」が減少に転じたという。

個人が身のまわりで感じられるものではないが、統計として示されれば納得せざるをえない。

日本だけが特別というわけではなく、ドイツもロシアも減少国である。人口統計によれば、二〇〇五年の一億二七七七万人をピークにして二〇〇六年から減少。有史以来のことという。

高齢者が増えつづけているのに、総人口が減少に。とすれば高齢化はいっそう足早になる。「高齢化」は高齢者が四人にひとりとなって目の前で実感が持てる。「少子化」も想定できる。「総人口減少」の事態に対しては、減ってもよいという意見があるようで、しばらくならぬに減るにまかせて、相応に対応するのがよいというもの。明治のはじめには三〇〇〇万人であったが、大正のはじめには五〇〇〇万人に、戦後直後は七〇〇〇万人に、そして昭和四二（一九六七）年には一億人に達した。

いまや年間一〇〇万人の出生数に減ったが、戦後には二五〇万人も生まれたのだし、産児制限までして減らそうとした時期もあって、急激な人口増加による「過剰人口」への対応が政策課題とされたころもあった。だから「過剰高齢人口」という事態は同様に政策課題として避けられない。そこで一過性のものとして対処して通過を待とうというのである。一〇〇年で三倍になった人口増に耐えてきたインフラは人口減少によって楽になる。住宅などは空家をどうするかという段階を迎えている。

しかし、高齢社会を論じる立場からは許すわけにはいかない。

「少子・高齢化」を政策担当者の側が、既定の姿として引用するのを許すわけにはいかない。「少子化」を常態のこととし、「高齢化」を一過性とするのは逆である。政策としては「少子化」

を一過性として「多子化」をめざし、「高齢化」を常態として確固とした高齢社会を形成する政策を保持するものでなければならぬからだ。「長寿を生きて社会のために」という善意の高齢者の実人生を傍観するものになる。国家の衰弱、滅亡へむかう論理であり、許されない。

国は将来の活力維持のために、人口増につとめ、「少子化」に歯止めをかけねばならず、そのためには高齢化対策にも努めて、同時に「多子化・高齢化」を指向することだ。

国は若年者支援の細かな対策を、自治体や企業の現場に求めているが、「多子化・高齢化」を、「エイジング・イン・プレイス」(子どもの成長期と高齢者の成熟期の同じ居場所)での同時課題とすべきなのである。

現状を説明するに当たって、無策のまま人口減少の統計的な将来予測を述べる現役の担当官僚がいるのには哑然とするばかりである。一方の当事者である高齢者の存在が、「多子化社会」の推進のためにどれほどの役割を持っているかに思い及ばないのである。

「長寿社会」はすべての世代の課題

*少年期も青年期も「長寿」へのプロセス

世界中で高齢者が増えつつづけている。戦争・紛争をなくし、病気をなくし、食料を豊かにし、衛生に気をくばり、環境を整える。個人の長寿はその成果としてもたらされる。それに対応し

て社会を変えていく。社会はだれもなにもしなければ変わらない。だれかがどこかで変えることで変わる。わが国の「高齢化」のプロセスはどうだったか。

高齢化率七％の倍数である一四％までを「高齢化社会」と呼び、この間は余生型の高齢者の姿が街にちらほらという段階である。国も自治体も社会の功労者として、介護・医療・年金といった高齢者個人を支える「社会保障」に力をそそぐようになる。

ここからさらに増えて二一％までが「高齢社会」である。高齢者がお互いに高齢者の存在に気がつく段階で、高齢者のための「居場所・モノ・サービス」が工夫され、「高齢者による高齢社会」形成の段階である。それを怠れば、国や自治体は介護・医療・年金という「高齢者三経費」の増加に財政上のやりくりがむずかしくなりはじめる。

さらに高齢者が増えて二一％を超えたところからを「超高齢社会」と呼ぶ。「本格的な高齢社会」であり、ここからは高齢者ばかりでなく、三世代みんながそれぞれに暮らしやすい新たな社会「長寿社会」を共有するための議論や活動がすすむ。高齢化率の進み方は異なっているが、どの国も二一世紀初めには、すべての世代が参加する「超高齢化社会＝長寿社会」の時期を迎える。わが国はその先頭にいるということになる。

一九七〇年にわが国はすでに七％の「高齢化社会」に達している。そして一九九四年には「高齢社会」の一四％に。この間わずか二四年だった。そのあと一九九五年に「高齢社会対策基本法」の制定し、一九九六年に「高齢社会対策大綱」を閣議決定した。世紀をまたいで高齢化率

は二〇〇七年には二一％に達している。この間が一三年。いまや「高齢化率」が世界最速最高の二五・九％にまで達している。世界で最速で高齢社会を迎えているという実感は、個人的には理解しようもないが、それを体現して暮らしていることだけは確かなのである。

「高齢化社会」から「高齢社会」となるのに二四年だった。フランスの一一五年はともかく、イギリスが四七年、ドイツが四〇年というから極端に短い。その後わずか一三年の二〇〇七年には「超高齢社会」（長寿社会）に達している。

この早さは一億の人口をもつ国としては稀有の例なのである。国の施策は「介護・医療・福祉・年金」など「高齢者対策」で精いっぱい。「しくみ・居場所・モノ・サービスづくり」など「高齢社会対策」までは手が回らなかったのだが、それを非難できる立場はだれにもどこにもない。しかし歴史的な視点で見れば、やはり政治リーダーにその構想力がなかったということになる。それは高齢者である国民みずからの責任である。自分たちの人生を他に預ける「余生」型人生がもたらしたもので、これでは後世代への負担となる。

こんなことは、ふつうに暮らしているかぎり、高齢者個人にはわからない。

「長寿社会」はすべての世代のテーマである。生まれた子どもが八〇歳まで生きられるというのは、子どものときから八〇歳になってもきちんと歩ける体力をつくっておくことを心がけるということである。女性も若い時に痩せようとして、「こんにゃくダイエット」などをして、骨が弱い、なんてことでは平均までたどりつけなくなる。八〇歳の健康体の骨格は二〇歳までに

つくっておかなければならないからだ。

ああいう国になりたいという国の姿

*さまざまな立場の高齢社会構想

すでにるる述べてきたが、「高齢者が新たな歴史をつくるとき」である。いまこそ、「将来の日本の姿」について、この人たちの声を聴こう。

ここで紹介している方々は、それぞれにたしかなこの国の将来像をお持ちであり、紹介するだけでその姿が見えてくるとともに、話されている声が聞こえてくるように感じられる親しい方々ばかりである。(web『月刊丈風』本年八月号を開いていただきたい)

まず「さわやか福祉財団」の堀田力会長(七月に財団会長に就任)。

ことし七月二十九日、内閣府主催の「高齢社会フォーラムin東京」での講演で、堀田さんの声は囁れていた。この夏は東奔西走、「毎日が月月火水木金金」といった忙しきで、全国の自治体をまわって講演をしておいでだからである。「支えられる高齢者」のための介護などの事業が来年から現場の地域自治体に移行する。「地域医療・介護推進法」の成立(二〇一四年六月)とともに「支える側の高齢者」の自主参加が求められるからである。

とくに「毎日が日曜日」の暮らしに慣れ親しんだ退職後の男性たちに「共生の文化」を説い

ている。住んでいる地域に関心が薄く、自分と家族のためにだけ余生を過ごし、いずれは介護・医療だけは地域に頼るといふ暮らし方が「恥ずかしい」と感じるような風習を、堀田さんは「共生の文化」と呼んで、地域の元気な高齢者への提言としている。

住み慣れた地域での高齢者の「医療・介護」を包括的に確保する「地域包括ケアシステム」が、自治体の主導で充実されることになる。「支えられる高齢者」のための最善の姿をもとめる実務側の厚労省原勝則老健局長の「医療と介護の一体化」についてのくわしい説明とともに「支える側の高齢者」にむけた堀田会長の「新地域支援構想会議」（全社協、日生協など一四団体が参加）を代表しての講演は、ことし三月に全社協のセミナーでおこなわれたが、この国の高齢社会のありかたを同時に訴えかけている。双方への理解と対応が、安心して地域で暮らすための高齢者の側の務めであろう。

「高齢社会をよくする女性の会」の樋口恵子理事長の将来像は、歴史上で初の「人生一〇〇年社会」である。昨年の講演（内閣府「高齢社会フォーラムin東京」・七月）は、この国の高齢社会を形成する活動のプロセスと将来像を理解する上での、まぎれもない歴史的文書である。

女性リードで「一〇〇歳社会」をめざす樋口さんご自身はまだ「傘寿期」に到達したばかり。初代としてお仲間とともに「人生一〇〇年社会」の到達点を見据えている。一〇〇年を差し引いて内閣府が「人生九〇年」としたのは男性型であると評しながら。

「いまわたくしたちは、「人生一〇〇年社会」へという、人類の歴史のなかで初めての長寿

を普遍的に獲得した社会を生きる。そしてそれにのっとった地域であろうと国であろうと、生きる主人公は人間であります。その人間の幸せのために、わたくしたちは初代として今日も一歩一歩努力をしているのだと思うと、「なかなかいい時に生まれちゃったじゃないか」と、わたくしなどはよろこばしく思うわけでございます」（内閣府「高齢社会フォーラム in 東京」基調講演「シニアの社会参加で世代をつなぐ」二〇一三年七月）

と明快に述べておられる。

元東大学長の小宮山宏プラチナ構想ネットワーク会長は、「産業革命からプラチナ革命へ」を説く。わが国は江戸時代にはすでに近代への準備を終えていたアジア唯一の先進国であったこと（途上国でなかったこと）、いまや大量生産時代を終えて新しい価値QOLである「省エネ時代」にはいつていること、を具体例によって示しておられる。

東大高齢社会総合研究機構の秋山弘子特任教授は、高齢社会活動の成功事例を集めた「リソースセンター」の設立を提案しておられる。東大リーディング大学院での国際的人材育成や今年九月に第二回をおこなった「高齢社会検定試験」（高齢社会検定協会）、柏市でのまちづくり、RESTEXでの「コミュニティで創る新しい高齢社会のデザイン」の領域総括などを通じて成果を積み上げておられる。「ああいう国になりたいという国」がつかれるかを課題として。

政界の長老、クオータ制でも参議院議員として残っていたいただきたい高齢政治家のおひとりである藤井裕久民主党顧問は、「戦争のない社会を守りつづける政治」「歴史に学ぶ政治」の課

題を実践しておられる。引退したあとの民主党近現代史研究会のオープンフォーラムはその実現の現場のひとつ。三谷太一郎、加藤陽子講師などと呼んで「昭和初期の歴史」に「戦争」への萌芽をさぐっている。安倍政権の「歴史に学べない」方向に危惧を深めながら。

「人生六五年Ⅱ引退余生」時代のあと、世界に先がけて「人生九〇年Ⅱ現役長生」時代を迎えているというのに、高齢者の意識も暮らし方も変わっていない。国の骨格を中年層がしっかりと支え、若者の新たな力が加わり、女性の登用がすすむとともに、渋く輝く高齢者の参加がオールジャパン体制のためには必要である。

待つのではなく、高齢者が自主的に社会参加しないかぎり、「高齢社会」の形成は遅延しつづける。公助の負担は増え、後進世代からは「自助・共助」の要請が強まることになる。いまこそ「地域参加」によって「共生文化圏」という互助・共助のしくみづくりに、みずから一人立つ好機といえる。

九割中流の「大同の社会」に近かったころの情景を思い起こしてみてほしい。

国鉄の車中では、客はだれもが親しく話し合って座っていた。席を離して座るなどは考えられなかったことである。公園では、だれもが仲良く遊んだ。不審者など考えられなかった。草野球のメンバーが足りなければ飛び入りで加わった。子どもたちは、だれとも親しく接しているいろいろなことを学んだ。あのころの日本は、経験した者の心の底に息づいているはずである。

一人ひとりが日々を楽しむ、長寿を喜べる「日本長寿社会」の達成と、アジアに住むだれも

が等しく豊かさを享受できる「アジアの共生」とは、ふたつながら平和の証であり、日本高齢者の課題であり、本稿の目標である。

「高齢社会グランドデザイン」を衆議し掲げよう

* 政治リーダーの構想力が問われている

世界の注視のもとで、「先進的高齢社会」を成し遂げるべく、いまそのプロセスを体現しているのが、わが国の高齢者である。

とはいうものの、これまでのところではなお「高齢者社会」であって、さまざまに各地各界で練り広げられるはずの「モノ・サービス」づくり、「居場所」づくり、「世代交流のしくみ」づくりなど、高齢者が保持している知識・技術・資産を活かした高齢化活動が渋滞している。高齢者みずからの暮らしやすい「シニア生活圏」の達成にむかってスムーズに動いていない。高齢者が「高齢社会」づくりを意識して参加していない。その成果を共有し享受しているという実感や共感を持つことができないでいる。

それはなぜか。

何度も述べてきたが、「日本高齢社会」（長寿社会）構想が掲げられていないからだ。

産・官・学・民間の衆知をあつめて構想せねばならず、それを推進するのが政治リーダーの

役割であり、平和戦略であり、それにふさわしい政治体制と専任の高齢担当大臣が内閣府にどつしりと座していなければならないことである。

ここでの欠落は「高齢者対策」ではなく「高齢社会対策」であり、それを推進する政治リーダーである。政治は「社会保障」の財源を用意してくれたが、肝心の「日本高齢社会グランドデザイン」を衆議して掲げることをしてこなかった。先にも記したが、「消費税」導入のとき、「社会保障」のための完全目的税にするために務めてくれた長老政治家は、「そういう構想力は政治リーダーにはなかった」と率直に述懐しておられる。

「先行高齢者国」が「先進高齢社会」をどう成し遂げるかの構想は、アジア地域どころか世界規模で注目されており、まずはこの「日本高齢社会グランドデザイン」を公開し、その達成にむけたプロセスと成果を国際発信することによって納得され達成されるのである。そういう時期なのに現状はそういう姿に向かっていない。

二〇一二年一月から二〇一三年八月まで、「社会保障制度改革国民会議」が検討したのは、「医療・介護・福祉・年金・少子化」であり、そのうち年金は結論を出していない。つまり本格的な「高齢社会構想」の議論には踏み込んでいないのである。座長を務めた清家篤慶応義塾大学塾長は、「高齢社会対策大綱」を検討し改訂した有識者会議でも座長をつとめており、そのあたりのことは熟知しているはずであるが、多数意見を尊重する立場上、発言されない。

一九九五年の「高齢社会対策基本法」制定以来、来年二〇一五年は二〇年になる。推進の中心に担当大臣を置いて、国会で衆議して「日本高齢社会」構想を掲げるべきときである。

どっしりかまえた専任大臣のもとで

*内閣府に「高齢社会対策」担当の太い動線を

最近の「高齢社会対策」の担当大臣を見てみよう。

毎年出されている『高齢社会白書』（内閣府刊行）の閣議への提出者をみると、平成二一年度版は野田聖子大臣が、二二年度版は福島みずほ大臣が、そして二三年度版は蓮舫大臣、二四年度版は小宮山洋子大臣、二五年度版は森まさこ大臣が閣議決定時での担当大臣となっている。連ねてみると明らかに「少子化・高齢化」を合わせ担当する人選であり兼任であり、それも「少子化対策」の方が主であることが知られる。

民主党政権時代だけで九人の担当大臣がいた。そのことを議員どころか閣僚どころか本人すら意味合いを知らなかったのではないか、と思われるほどなのである。参考までだが、九人というのは、福島みずほ、平野博文、荒井聡、岡崎トミ子、村田蓮舫、細野豪志、村田蓮舫（再）、岡田克也、中川正春各議員。時節がらその重要性を知っていれば、少時とはいえ内閣改造時に兼任で担当となった岡田副総理は、おそらくそれ相応の対策をとったことだろう。

これは記すのをためらうが、改訂した「高齢社会対策大綱」を閣議決定した野田（佳彦）総理も、高齢者の活動がいまの社会にもたらす有意な影響には触れているが、それが高齢者自身の実人生を活発にし新しい社会の形成に向かうことには触れていない。若き総理（五五歳）には理解が及ばなかったようである。それは六〇歳の安倍総理にもいえることだが。

これはいったいどうしたらいいのか。

担当大臣としてしごとも少なく、予算も少なく、組閣時に「高齢社会対策担当大臣」として辞令も出ないために、恒例の組閣後の記者会見でも関連する質問が出ない。「日本高齢社会」の形成は国際的・歴史的事業なのに、国のリーダーはその重要性を理解しないままである。

内閣府内部の扱いも「共生社会政策」の一分野として、内閣府政策統括官（共生社会政策担当）が担当している。「高齢社会対策担当」の参事官や政策調査員にはいるが、兼務だったりするから、「高齢社会対策」を担う太い動線が内閣府内に整っているとはいえない。要するに主要な職務として扱われなくなつて久しいのである。

「高齢化」を一過性のものとし、「少子化」を恒常的なものとする逆の施策は、この国の将来を二重に誤ることになる。遅れを取り戻すには、内閣府内に「高齢社会対策」を担当する太い動線を形成して、高齢社会推進のしごとを進めねばならない時期にある。「スポーツ庁」よりも「高齢社会庁」の設置が先。国際評価につながる「高齢社会対策」が必要なにもかかわらず、国会議員は、その不在になお気づこうとしない。

ここは三二〇〇万人の高齢者が、声を合わせて衆口一詞、

「高齢社会対策の専任大臣と強力な部局体制を！」

「日本高齢社会グランドデザインを掲げよう！」

と叫ぶ必要がある。

「日本高齢社会」形成への新たな烽火であり、衆志成城の時である。

世界初の「長寿社会」達成をめざす

*高齢者を中心にすべての世代の参加によって

高齢化先行国として「日本高齢社会」の形成事業は、一九九五年に「高齢社会対策基本法」を制定してまずまずのスタートを切った。その後二〇年、まことに残念なことに延滞しつづけてきたのである。いまそのことを責め立てても後悔しても仕方がない。

こう考え直したらどうか。

「日本高齢社会」形成の事業は、世界初ゆえに、二〇年の準備期間のあと、「高齢化率」二五%となるのを待って、「四人にひとり型の高齢社会」のモデル事業として本格的な実現にはいった。戦後生まれの「平和団塊」の世代一〇〇〇万人の参加を待って、という事情もある。今からなら成功事例をつくることは可能である。何もしないで過ごせば国際的な失敗事例となる。

そんなことはあってはならない。

一九九九年の「国際高齢者年」のあと、この国のありようをつぶさに観察してきた本稿は、「団塊の世代」が定年を迎えるとき、高齢者としての老後が穏やかな姿になっていないだろうことを予測してきた。善意の「お仕着せユニバーサル・デザイン」はたいせつだが、みんなが従うところで課題としている「存在感のある日本高齢社会」の創出を担う主体者が見当たらなくなってしまうことを危惧してきた。

「日本型高齢社会」は、この国で暮らす高齢者一人ひとりによる意識的自発的な活動なしには成り立たない。その総体的な姿を推察するのはむずかしいが、その達成に向かうとき、この国にどのような変化をもたらすか。

それは行く先明るい展望でなければ意味がない。

二〇二〇年（東京オリンピック開催年）ころまでの内輪な推測としてだが、高齢者の積極的な生産活動・消費活動・社会活動によって、次のようなことが達成されているだろう。

・一過性の「アベノミクス」効果が衰落して収束にむかう日本経済を、「高齢化製品・サービス」によって救済するであろう。

・「超一〇〇〇兆円」の財政赤字の解消、つまりプライマリーバランスは、持続的な「高齢化社会経済」の推進によって大幅な縮小ができるであろう。

・「超一四〇〇兆円」といわれる家計黒字は高齢社会形成のための出資に向かうであろう。

- ・「アジアの先進国」として途上国が範とする日本でありつづけるであろう。
- ・「少子化」に歯止めをかけ、子育てで繁忙な女性の就業支援ができるであろう。
- ・「好事門を出でず、悪事千里を行く」という世相を防止できるであろう。
- ・「高齢弱者」の不安を払拭してだれもが安心して暮らせる「長寿社会」をもたらすであろう。
- ・世界がモデル事例とする「日本長寿社会」が姿をみせているであろう。
- ・数多くの国際機関を招請し、常態として各種の国際会議・イベントが行なわれ、世界の人びとが「一生に一度は訪れたい国」として評価されているだろう。

のちの歴史書は、誇らかに、こう記すであろう。

「二一世紀初頭の日本は、先行国としてアジアの近代化（モノの豊かさの共有）に貢献し、世界大戦ののちに平和の証として灯した「平和憲法」を一〇〇年護持して「平和裏の高齢社会」を世界に先駆けて実現した。自助、互助、共助、公助のしくみを持つ地域社会のありようは、後進諸国のモデル例を提供し、宗教にも民族にも男女にも貧富にも、そして年齢にも差別をしない民主主義国家を達成した」

国際的にも注目され納得されるような、「長寿社会Ⅱ日本型高齢社会」の形成は、高齢者とすべての世代の参加によって達成され、後を追って高齢化を迎える途上国や後人にとって、「日本型モデル」となるべきものである。

二 そして国際人として

国民性としての「ホスピタリティー」

*自然にあふれ出る「おもてなしの心」

二〇二〇年のオリンピック東京招致が決まったが、二〇〇二年六月の日韓共催のサッカー「ワールドカップ」の折りの国際的な熱気はなつかしい。ホスト国として、参加各国チームの選手たちを迎え入れ、みごとに「ホスピタリティー」（おもてなしの心）を発揮した二八市町村。

「アリガトー」は世界語になる勢いだったし、街の清潔なこと、花の多いこと、礼儀ただしこと、どこにも温泉があること、列車が時刻通りに動いていること、スシが「トテモ、オイシイ」など、物価が高いことを除けばホスピタリティーは十分に実証されたのだった。

競技場の内と外で示したように、日本各地の人びとには世界中から訪れた人びとに、おのずから溢れ出る親和の感性によって国際交流を友好的にすすめることができる潜在力があることを、世界に証明する機会となったのだった。

子どもたち、女性、高齢者が、それぞれの地域でみせた国際交流での「お国ぶり讃歌」であった。とくにアフリカのカメルーン・チームを迎えた大分県の中津江村と、昨年二〇一三年に引退した人気NO1だった「ベツカム様」がいるイングランド・チームを迎えた兵庫県津名

町が話題にはなったが。

おのずから表れる「ホスピタリティー」（おもてなしの心）はどこから生じるのか。

長く鎖国した島国であったことで、地域に潜んでいる国際交流への期待感には、計り知れないものがあるように思われる。これこそが地域の資産として生かされるべき地域パワーなのではないか。「地域から地域へ」のつながり、とくに海外の都市とのヒトとモノの交流には、労苦をはるかに越えた成果が穏和なプロセスのうちに実現される可能性が見えている。

「アベノミクス」による円安効果で、海外からの旅行者が増えている。とくにアジアからのお客が多いという。

日本企業は海外進出で、アジアの民衆の暮らしの近代化、豊かさに貢献している。アジアの人びとが「暮らしの先進国化」を成し遂げたわが国に来てくれることで、いつそう「平和の国」の評価がアジアの人びとに理解されることがうれしいではないか。

わが国の地域の「ホスピタリティー」（おもてなしの心）を支えているのは、四季の移ろいをじょうずに受け入れながら温和な感性を大切にして暮らしている人びと、だれに対しても等しく親切な高齢者のみなさんである。

その心の深い層に培われている繊細さや優しさは、四季折り折りに変化する風物との出会いがもたらしてくれた自然の恩恵（天恵）といえるものに違いない。何度となく繰り返される季節との出会い・・・。

- ・ 春は桜前線（三月～五月）が北上し、秋には紅葉前線（一〇月～一二月）が南下する。
- ・ 南からは春一番が吹き荒れ、北からは木枯らしが吹き抜ける。
- ・ 八十八夜の晩霜を気にかけて、二百十日の無風を祈る。
- ・ 南の海に大漁を伝えていわし雲が湧き、北の海にぶり起こしの雷鳴が轟く・・・。

わが国の自然は、みごとに四季の変化に調和がとれている。それはまた海の幸・野の幸・山の幸を豊富にもたらしてくれる。「平分秋色」、秋には収穫を等しく分け合い、奪うよりは譲り合い、見捨てるよりは助け合う、といった「国民性としての和の心」（温和、穏和、調和、親和、平和、協和、総和・・・まだある）が、自然のうちに育まれている。と、これは海外の日本研究者が等しく指摘するところ。

だれかれの分け隔てなく萎えた心を励まし、痛んだ身を癒してくれる風物とくに温泉や特産物に事欠かない。それとともに先人が貯えてくれた歴史・伝統遺産も数多く残されている。

二〇一三年は富士山が世界文化遺産に登録された。自然遺産ではなく、文化遺産であることに納得がいく。また「和食」が世界無形文化遺産に登録された。「和食」は、さまざまな知識や技術が人から人へと受け継がれ磨きあげられて、「地場産業」や「お国ぶり」として暮らしを豊かにしてきたのである。

だれかれの分け隔てなく等しく親切な高齢者。「日本高齢社会」は高い国際評価を受けるであろうし、長寿者への敬愛の情は、他国の人びとからも多く寄せられるだろう。

自治体が産み出す「国際貢献」

＊リピーターに「国土を四倍に見せる法」

いま自分が住んでいる自治体が、海外にふさわしい相手を見出して、住民同士が親しく行き来し、異質な文化交流や特産品の共同製作を競う姿を思い描いてみよう。

わが国の高齢者が持つ「モノづくり」の能力と「親和」の心情は、「シニア海外ボランティア」のみなさんや海外進出企業の高齢社員の実績が示すように、途上国の人びとにとっては発展の原動力となるものだ。

常に開かれた不凍港のように頼りがいある存在としてのわが国の小村、小都市。海外との交流は将来かならず双方の個性や豊かさを生み出す源泉となる。

いま「姉妹・友好自治体」は一六五〇ほどあるが、多くはない。合弁企業や物産の共同開発といった経済活動や個別分野のさまざまな交流が進めば、数も内容的にもおおいに広がること
が予測される。

とくに長い民間交流の歴史をもつ日本と中国の場合には、国家間の不和・齟齬の時期を乗り越えて、すでに三五〇余の「友好都市」があり、信頼をつなぎ、友好の成果をもたらしてきた。太い交流のパイプになっている。戦後これまでに研修生として訪れた中国の多くの若者が、い

まや各地の都市で第一線で活躍している。

いくつか例をあげれば、首都の東京（各区も）と北京（各区も）、近代港湾都市の大阪・横浜と上海、神戸と天津、福岡と広州、歴史文物の京都・奈良と西安、名古屋と南京をはじめ、産業では鉄の大分と武漢、石炭の大牟田と大同、伝統物産の金沢と蘇州、瓷都の有田と景德鎮、ぶどうの勝沼とトルファン、牡丹の須賀川と洛陽、紙の富士と嘉興、酒づくりの西宮と紹興といった特産物、そして人物を介した絆による交流では留学生魯迅のふるさと紹興と先生藤野厳九郎の生地あわら、亡命期の郭沫若にちなむ市川とふるさと樂山、中国国歌の作曲者聶耳の終焉の地である藤沢と生地昆明、孔子ゆかりの足利と濟寧などといった幅広い関係を持つ。

友好都市を地道に支えているのは、長い日中交流の歴史を思い、大戦時の不幸な記憶を忘れずに信頼を積み上げてきた両国の高齢世代のみなさんである。

「国際交流課」が設けられている県、市、大学は少なくない。K市の市役所にも「国際交流課」が設けられていて、現地のことばに堪能な職員「国際交流員」が常駐して対応している。市に滞在している外国人滞在者には、各分野の研修者や留学生や企業人などがいて、さまざまな国際交流圏をつくって暮らしている。多くはないが結婚して定住している人もいる。なんとも活き活きした国際交流の情景ではないか。

海外の姉妹・友好都市から友好・参観にやってきた人びとは、まず県都で交流の時をすごし、地方を代表する文化に接する。それから市町村にはいる。

海外からの客人たちは、それぞれの「友好市町村」を訪れて、目的である文化やスポーツや物産に関する交流の時をすごす。各地にある温泉施設に案内されて、日本式のもてなしを受けることになる。これが楽しい。市町村が設けるのは、四季折り折りの美しい風物や料理や温泉を活かした「地域の国際交流施設」である。海外からの訪問者は、

「一生に一度は行ってみたい」

と心躍らせてはるばるやってくる。

「人生っていいな。日本ってすばらしい。別の季節にまた来たい」

と、野天風呂につかって暮れなずむ異郷の空の星を眺めながら、母国語でつぶやいてくれる。そして「和食」のおもてなし。宿のおかみさんをはじめ、地元の高齢者のみなさんがだれをも等しく親しく迎える姿は、海外から訪れた一人ひとりの友人の心に、母国の暮れなずむ星空を見上げるたびに、「アリガトー」とともに一生のあいだ輝きつづけていることだろう。

これはとくに重要な視点であるが、迎える側のみなさんが、四季を「四つの変化」として際立たせることによって、遠来の客人たちは春・夏・秋・冬（新年）の四回は訪れる楽しみを持つことになる。いうなれば、四季を時節の刻みとして活かす人びとの暮らしの知恵が、ここでは「優れた小国」の知恵として「国土を四倍に見せる法」となるのである。

そして何より喜ばしいことは、海外の市町村との地道で実質的な交流活動が、わが国が「恒久平和をめざしている優れた文化大国」であることを、海外各地からの発信によって明らかに

してくれることである。「文化大国」なら大国意識を競っても誇ってもいい。

「国際高齢者年99」は新世紀へのメッセージ

*「高齢者のための五原則」が共通の意識

新世紀を迎える地球規模での潮流として「高齢化社会」を予測し、国連は一九九二年に一九九九年を「国際高齢者年」(International Year of Older Persons)と定め、一九九五年にそのテーマを「すべての世代のための社会をめざして」としたのだった。

前世紀末近くにそんなできごとがあったことを知っている高齢者がどれほどいるだろうか。国連の提唱者と総会が、テーマを「すべての世代のための社会をめざして」としたのは、世代を越えた人びとの賛同と参加を期待したためであつたらう。活動の中心となるのは、世紀の初頭に高年齢を迎える高齢者であり、最初に迎えることになる先進諸国であり、なかでも大型で最速で進む「日本」が台風の目となる立場にある。

一九九〇年代から新世紀にかけて、そういう明確なメッセージが警鐘にも似た強い風圧として、この国で高年齢を迎えている人びとに、しっかりと受け止められていたならば、新世紀一〇年の取り組み方もその結果も大いに異なっていただろう。

各国が新世紀を迎える「高齢化社会」にむかってスムーズに移行できるよう、国連から次々

に取り組みが提案され、一九九〇年代を通じた国際的テーマとなっていたのである。

一九九〇年の総会で、毎年の一〇月一日を「国際高齢者デー」(International Day of Older Persons)と定めたあと、運動の展開への願いを込めて、

自立 (independence)

参加 (participation)

ケア (care)

自己実現 (self-fulfilment)

尊厳 (dignity)

という五つの「高齢者のための国連原則」を採択したのが九一年であり、そして「高齢者に関する宣言」とともに九九年を「国際高齢者年」と決定したのが九二年のことだった。

一九九九年の「国際高齢者年」には、わが国も総務庁を中心に各自治体、民間団体も参加して全国的な活動を展開した。参加した記憶をもつ人も少なくないはずである。それに先立つ一九九五年には「高齢社会対策基本法」が制定されている。民間の高連協(当時は「高齢者年NGO連絡協議会」のち「高齢社会NGO連携協議会」)が結成されたのもこの時である。

だけあろう、毎年一〇月一日の「国際高齢者デー」に、他国に先んじて活動を展開し、実質的な成果を積み上げて国際的に発信するのは、この国の高齢者の役割だったのである。

一九九九年の「国際高齢者年」をきっかけとして、新世紀へむかって「日本型高齢社会」へ

の構想が提案され、高齢化対応の具体的な取り組みが新世紀に次々になされてきたなら、高齢者意識もまた広く醸成されていたことだろう。

自治体によっては、すでに九〇年代に、たとえば東大和市、春日市、枚方市、新居浜市、柳川市など先駆的に「高齢者（高齢社会）憲章」を定めたところもあったのだった。「長生きは命の芸術品」ではじまるのは、「南国市高齢者憲章」である。が、全国的な活動にまでは進まなかった。これは明らかに構想力を示せなかった政治側の責任である。団体でも個人でも国連の「高齢者原則」の五つのうち、ひとつでも意識して活動することが「高齢化国際人」なのである。

わが国の場合は、「自立・参加・ケア・自己実現・尊厳」の国連五原則のうち、わずかに「ケア」だけは実体をもって推進されてきたといえる。内閣府の組織は「国際高齢者年」の記念行事が終わったあと縮小してしまっただが、「国際高齢者年」に参加した高連協の中核を支えてきた福祉関係の団体は、その後も一貫して活動を継続してきたからだ。

九〇年代から新世紀を通じてのこの一〇年余、高齢者みんなが「わたしの高齢期」を意識して、みずからの暮らしを充足させる家庭や地域生活圏の「モノや居場所」をこしらえるために活動して、「優れた高齢化用品」や設備や施設やサービスを実現させていたならば、企業や組織もまた「高齢化対応のリストラ」にも努めていたことだろう。

そして新世紀を迎えて、国民運動として着実に推進されていたなら、わが国の高齢者自身がこれほど早くしわ寄せを受けて苦難を強いられることにはならなかったのである。

全国で催された「国際高齢者年記念事業」

*石原都知事も主催者のひとりだった

一九九九年、この国の「国際高齢者年」の記念事業は、総務庁（当時）のもとで、民間の福祉団体の活動者を中心におこなわれ、国も自治体も努力はしたものの、肝心の一般高齢者がわがこととして理解するまでに至らなかったのである。

記念行事は総務庁を主催者として取り組まれ、各省庁をはじめ、都道府県（三八九事業）、市町村（六九五事業）が展開された。

一〇月一日「国際高齢者デー」の「国際高齢者年フェア・IN・TOKYO」（記念式典）では、四月に就任したばかりの石原慎太郎都知事も主催者のひとりとして、「どうか皆さん、これからますますお元気で、この国を持ち直し、結果として周囲からも尊敬される日本の社会をつくり直していくよう、お互いに頑張りましょう」

と挨拶していたのである。八〇歳代になった石原さん、村山（富市）さん、野中（広務）さんなどの「ベテラン議員の会」のなすべき第一は、「日本高齢社会」の推進である。

高連協による「高齢者憲章」が、一九九九年九月に発表されている。この憲章の内容はいまなお課題のありかを伝えている。あまり知られていないが、兵庫県の高齢者大学校「いなみ野

学園」も一一月に「いなみ野宣言」を残している。

その後、まことに残念なことだが、本来の主役である一般の高齢者の不参加のまま過ぎていった。二〇〇九年は「国際高齢者年」の一〇周年に当たったが、わが国では際立った活動は見られずに終わった。国連の藩基文事務総長のメッセージが虚しく響くほどだった。

この間、国際的な活動としては二〇年ぶり二〇〇二年にマドリードで「第二回高齢化に関する世界会議」（第一回は一九八二年にウィーンで）が開かれている。

「高齢化に関する国際行動計画二〇〇二」を採択し、世界の多くの地域で平均余命が伸びたことを人類の大きな成果とし、世界的に前例のない人口転換が生じていること、二〇五〇年までに六〇歳以上の人口が約二〇億人に増加し、人口比率では二一％に倍増する見通しであり、すべての国に対して、「高齢者が潜在力を発揮して生活のあらゆる側面に参加する」ことができるような機会の拡大を要請した。

「第三回 高齢化世界会議」を日本に招致しよう

*「第三二回 東京オリンピック」とともに

わが国が催す中・長期的祭事としては、二〇二〇年には世界の若者たちが力を競うスポーツの祭典「第三二回東京オリンピック・パラリンピック」が開催される。それに向けて組織委員

会が設置され、各界から選ばれた一七〇人の顧問会議も決まって、一步を踏み出した。

それと重ねて、第一回（一九八二年・ウイーン）、第二回（二〇〇二年・マドリッド）に次いで二〇二二年に想定される「第三回 高齢化世界会議」（World Assembly on Aging）を、「高齢化」のトップランナーである日本へ招致し開催するのは、国際的役割といえるだろう。

二一世紀の国際的な潮流である「地球丸ごと高齢化」という課題を取り上げ、各国の政府関係者、専門家、経済人、報道人、NGO、市民の代表が一堂に会して、成果を共有し、将来構想を討議する機会とする。わが国の高齢者の知識と経験による「すべての世代のための高齢社会」形成への活動を公開しながら、世界から招いた優れた友人とともに、「国際平和と普遍的長寿社会」の証としての新たな構想を掲げることが、平和国家・長寿社会のリーダーとしてのわが国の責務であり、誇りうる歴史的事業である。

会議は「高齢者に関する国連五原則」にうたわれた「自立、参加、ケア、自己実現、尊厳」の精神を基調に、一人ひとりの高齢者のだれもがどこでも充実した人生を享受できるように、新たな行動計画を練り上げることとなる。世代間・民族間・男女間の協調を実現する会議の成功は、「人類の平和的共存」の将来を明るくするだろう。

会場としてはアクセス、施設、これまでの活動経緯（千葉県「房総長寿社会憲章」は三〇年に）などを考慮して、首都圏を候補地とする。

「会議名」

- I 第三回「高齢化に関する世界会議」(World Assembly on Aging' WAA) 2022
- ・国内会議としての「高齢化に関する国内会議(都市と地方)」2016
 - ・地域会議としての「高齢化に関する東アジア地域会議」2018
- 各国に取組み事例に関する情報収集・リソースセンターの設置を要請
- 第三回 WAA の中心議題を「高齢化と社会経済の革新」とする
- II 「世界高齢者会議」―人類平和共存への道― 2022
- 世界大戦後の「平和日本」を知る各界代表者および元大統領・首相・学者・宗教家ほか国際的な高齢者リーダーを招へいする(この会議は日本で継続して開催)
- III 「世界高齢社会活動者会議」―すべての世代のために― 2022
- NGO など高齢社会活動の実践者・市民が地域の成果を語り合う
- 本会議にむけた会議・地域会議など、着実な準備が求められる。

国際平和の証としての「日本高齢社会」

* 二一世紀初頭になすべき国際貢献

二一世紀の国際社会が、なお平和裏に推移するかどうかはわからない。国連は、新世紀が「平和と非暴力」にむかうことを願って、「文明間の対話」を課題とし、二〇〇一年を「文明間の対

「話年」としたのであった。

ところがそれに逆らうように、ニューヨークの「九・一一テロ事件」、そして二〇〇二年三月の「イラク戦争」を引き起こし、報復テロの恐怖が世界を覆うことになってしまっている。アメリカ国民は、史上初めて身近に戦場の恐怖を実感したことになる。

そんな中で、日本は「人道支援」という名目で自衛隊を海外の戦場へ送り出した。それでも一兵も失うことなく、現地の人びとに受け入れられて作業を遂行できたのは、「平和憲法をもつ国からの自衛隊」だったからであり、イラクはもちろん国際的にもそう評価されていることの実証例となったのである。

そして「平和日本」の評価は、なによりも戦争と戦禍を体験した国民の一貫した平和への強い意志にある。そしてその向こうには、戦場となったアジアの隣国とそこに暮らしている人びとの戦乱と戦後の経緯があることを忘れてはならない。

いまグローバル化という時流に乗って近代化をすすめるアジア途上国の人びとが、日本のようなモノを使い、日本人のような豊かな暮らしをしたいと望んできていま実現している。

その姿をみると、戦後の復興に身を挺して粒粒辛苦してくれた先人の姿に重ねて、アジアの将来のために、率先して平和を守りぬく覚悟を固めるときなのである。

歴史から学ぶなら、まず戦場となった周辺国のようすを知ることだろう。

昭和のはじめには、中国もソビエトも革命期にあり、アメリカは太平洋国家ではなかった。

その隙間を縫って日本帝国は極東で動いた。いまや中国・ロシアとも自立した大国であり、アメリカ軍は日本国内に基地をおく。こんな三大国に囲まれて、国粹主義、軍国主義、軍需産業化の夢はなりたない。

ここは国際平和主義である。戦後の目標だった「東洋のスイス」のような国際機関を置き、常時に国際会議が開かれ、世界から観光客が訪れる国（やおよろずの神々のご加護によって平和裏に）。そして海洋大国としての活動である。

ひとりの人間にとっても、人類にとっても最重要である多重性は「戦争」と「平和」であり、わが国は国も国民も「平和への心火」を現実にも灯もしつづけることである。

先の大戦から半世紀余り、この国の戦争の悲惨を知っている人びとの髪は大方は白くなった。そして日本はその間「干戈を見ず」に過ごしてきた。二〇世紀の「戦争の惨禍」を先人が引き受けてくれたことで得た平和の期間。それをどこまで引き継げるかは残された者の「平和への心火」の継承にかかわる。

その平和期を実感しながら、それぞれに自分たちの手づくりあげた生活環境で憩い、衣食住にもほぼ満ち足りている姿がある。「世界一の長寿国」として、長寿者が周囲のみんなに敬愛されている姿こそ、なにより世界に誇っていい「平和の証」なのである。

その理念として「日本国憲法」（とくに九条）を掲げつづけるとともに、地域に根ざした「日本高齢社会」を達成することが、新世紀初頭の国際社会でなすべき日本の貢献なのであり、歴

史に学んだ国民運動といえるのである。

不戦不争の灯かりを伝えて

*「平和憲法」施行一〇〇年を祝う

「恒久平和」を掲げた「日本国憲法」は、原子爆弾という人類をも破滅させることができる可能性をもつ武器が登場した先の大戦で亡くなった人びとへの「哀悼のモニュメント」（歴史的記念碑）であり、とくにその「九条」は先人の心火によって燃えつづけている「不戦の灯」ともいべきものである。

半世紀を越え、新世紀を迎えて一〇年、その経緯を確認し、党派性を排して「衆議」して引き継ぐべき貴重な歴史文化遺産である。したがって二〇四五年、制定一〇〇年までは「そのまま残すべきもの」である。

国際紛争は絶えることなくつづき、世界の軍事技術は仮想敵国を想定しながら自己増殖をつづける。それは太平洋戦争以後、朝鮮戦争、ベトナム戦争、イラク戦争で、その恐るべき一端をみせつけた。局地戦は絶え間なくつづいている。

改憲？ そんな悪夢のような企てを押し止めるのが、大戦後に平和を託されて生まれたベビーブーマーである一〇〇〇万人の「平和団塊の世代」のみなさんである。体現する「日本高齢

社会」がそのまま歴史的な「世界平和へのメッセージ」となることに希望がある。

想像力の深度も構想力の精度も足りない現代の若手政治家は、「日本国憲法」を改変する能力も立場もないことを知らねばならない。先の大戦によって被害者となり加害者となるに至った戦争の惨禍への経緯を、繰り返さないためにおおいに論議すべきであるが。

わが国の先人がどういいうプロセスを踏んできたかの論議を尽くすにはいい機会だが、自分が納得できるレベルの認識で改憲を実行しようとすれば、必ず過ちをおかすことになる。

憲法は今ある人びとのためのものであるが、今ある人びとのものではない。

「自主憲法」と称して根幹を傷つけるとすれば、先人にも後人に対しても、これほど恥ずべき行為はない。いま確認すべきことは、憲法の条文の文言の改変をおこなうことではなく、条文の裏に燃えつづけている平和への「先人の心火」を感得し、灯を引き継ぐことである。その地点から戦争の惨禍を想起する想像力を培うことである。

若手の政治家が謙虚になすべきことは、平和を希求する憲法の趣意を「国際世論」とするために努めて、三四年ののちに迎える「平和憲法施行一〇〇年記念」を国際平和のもとで祝えるように保ちつづけることである。国会での議論がどのようになろうとも、最後に国民投票での決定権をもつ日本国民として、「歴史に学んだ」国民として、国際的に評価される判断を冷静にくだすことになる。

国際的に先行してたどる「日本高齢社会」形成への歩みを、「世界平和へのメッセージ」とし

て対置すること。天年（天寿）を全うする一人ひとりの高齢者の日また一日の生命の灯を、戦争への兆しがあるかぎり、歴史を貫いて流れる「不戦不争の叡智」に託して「戦争放棄・恒久平和」の明かりとして灯しつづけること。

「日本国憲法」の「不戦不争」の明かりが途絶えたとき、わが国はまた半世紀あまりを積んで得た国際的な評価を閉ざし、歴史的な輝きを失うことになる。耳をすまして過ぎこし百年の声を聞き、目を見開いて来たるべき百年を見透かせば、選ぶべき道はおのずと明瞭なはずである。

そして「寿終正寝」（天寿）を全うする

*平和主義の国際性は「地域」にあり

国民が穏やかに生き、天寿を全うできる「寿終正寝」を願わない国などありえない。

市民が穏やかに生き、天寿を全うできる「寿終正寝」を願わない市町村などありえない。

自分が穏やかに生き、天寿を全うできる「寿終正寝」を願わない人などありえない。

だからお互いに「天寿を全うする」ことが、二一世紀が「平和の世紀」であることの国際的な証となる。

だから世界の高齢者が先行するわが国に期待するものは、紛争地の支援に向かう国防軍ではなく、「恒久平和」を掲げた憲法の下で、全国どこでもおだやかな人生を享受することができ

る「日本高齢社会」の実現であり、その形成へいたる仔細なプロセスである。

古来わが国は「君子の国」として、「譲るを好みて争わず」と伝えられてきた。とはいえ「自衛の力」は、独立国であるかぎり、他に脅威を与えず、他から脅威を受けない可能な範囲で、他に劣らない質の武力を自ら保持し常備しないわけにはいかない。

とくに抑止力になる「平和利用」の科学技術の保持はそうである。「人工衛星」や「原子力発電」（安全を確認した一部）といった平和利用の技術がそれである。議論の多い「原発」も、全面廃棄は理想だが、抑止力になる「平和利用」は保持せねばならない。

常日ごろの訓練によって培った他のいかなる国にも依存しない自衛のための「不戦の軍事力」と、常日ごろの鍛錬によって培った相手を説得しうる外交のための「能戦の文化力」と、それを支える安定した「経済力」とは、常に整え備えるべき三位一体の「国防力」なのである。

歴史にまれな平和の時代に、「日本高齢社会」を構成するひとりとして加わり、みずからが充足して長く生きて天年（天寿）を全うすることが、そのまま国際的な信頼を引き継ぐ「平和へのメッセージ」となることを確信することである。

かくして地域で尊厳をもって「寿終正寝」（天寿）を全うする。

外交的に孤立してまで「国防軍」を保持するために「憲法改正」をし、世論がそれを支持するとなれば、日本は「歴史に学ばない国」という批判がいつそう強まることになる。これらの動きは戦争の被災各国にとっては、かつてたどった過去を想起させるものとなる。

一四年にわたった先の戦争は、軍の独断専行ではじまり、世論を味方につけて強行し、国際的に孤立し、ついに振り子は極限まで振れて敗戦によって終わった。だから戦禍と敗戦によって得たいまの「平和」は、みずからの手でかちとったものではない。

外交努力と国民の冷静な世論によって国際的孤立を避け、国防軍依存とそれを無批判に進める激した世論の醸成を阻止し、議論をつくして「平和憲法」を守りきってはじめて、日本は「歴史に学んだ国」として「平和をつくる民主主義」をみずからの手にすることになる。

いま「歴史に学んで歴史をつくる」政策は、「国から地域へ」である。「特性を活かした地域の発展」への国民運動が国を護る意識を醸成し、平和の礎と民主主義を強くすることになる。国から地方へむかうことによる国防意識の醸成、これを推進するならどこの国からも批判を受けることはない。「国から地域へ」の国民運動がわが国の「平和主義」を伝える国際性を持つ。

高齢者は戦争体験をしているところに特徴がある。どんな辛い目に遭ったかを体験者の生の事実として伝えると同時に、憲法を議論するにあたっては、平和の側からの論理を構築して、若い国民を説き、「平和憲法」保持の基盤を強めることも大切になる。

戦争の悲惨さを繰り返さない立場から制定された「平和憲法」（とくに九条）は国際平和の旗じるしであり、実態として平和の証となるのが「高齢社会」である。

高齢者であること、高齢者になることが誇りであり、後人を思い後人に敬愛されて安心して暮らせる「高齢社会」の達成が、二一世紀初頭の国際的潮流となっており、先行するわが国は、

「平和憲法」のもとでの「平和の証」の体现者であることを意識して、高齢期を生きることになる。一人ひとりの人生それ自体が「平和国家」保持という歴史的使命を負っているといえるのである。「平和団塊」のみなさんは、「平和の証」として一〇〇年を生き抜いて、大きな波濤となって「憲法一〇〇年」をめざしてほしい。

東アジアの平和と繁栄の成果を掲げて、戦後七〇年の来年は、本来なら日中韓三国の共催で記念行事を行なうべき時である。もちろん、世界に向かってである。

にもかかわらず、「知韓派」といわれる習近平主席の七月訪韓の際には、中韓両国の世論は、そろって第二次大戦での軍事的侵略と慰安婦問題に対する日本政府の言動を批判し、漢風と韓流をつなぐ意味をこめた習主席の「風好正揚帆」という呼びかけを後押しした。経済・文化交流への蜜月ぶりも際立つ。

来年に両国は、「戦勝七〇年」を記念する行事を共同で展開することを決めている。安倍政権の「集団的自衛権」の推進は、七〇年の平和を破る「強詞奪理」として受け取られている。

本来なら、三国の政府が共催で、欧米に立ち遅れていた東アジアの近代化の進展と経済・文化交流の成果を、「アジアの勝利」としてともに祝うことが東アジアの民衆みんなの願いなのである。なぜそうできないのか。

まあいいか、でいいか。

・三世代年表 生年別の人口（男・女）、流行語、流行歌 制作・堀内正範

◇これより「中年期」（三〇歳～五九歳）

◇「而立期」（三〇～三九歳） 総務省統計局

生年	干支	年齢	人口（男・女）万人	流行語・流行歌
一九八四	昭和五九	甲子三〇	七三・五七一・五	くれない族。イツキ飲み。「涙のリクエスト」
一九八三	昭和五八	癸亥三一	七四・四七二・六	おしん。気くばり。フオーカス。「矢切の渡し」
一九八二	昭和五七	壬戌三二	七四・五七三・〇	逆噴射。ネクラ・ネアカ。「悲しい色やね」
一九八一	昭和五六	辛酉三三	七五・六七三・九	フルムーン。熟年。ブリッ子。「ルビーの指輪」
一九八〇	昭和五五	庚申三四	七九・〇七七・二	クリスタル族。「奥飛騨慕情」「恋人よ」
一九七九	昭和五四	己未三五	八八・一七九・〇	インベーター。ダサイ。「贈る言葉」「関白宣言」
一九七八	昭和五三	戊午三六	八四・五八二・五	不確実性の時代。サラ金。竹の子族。「UFO」
一九七七	昭和五二	丁巳三七	八六・六八四・六	ルート。カラオケ。「津軽海峡冬景色」
一九七六	昭和五一	丙辰三八	九一・〇八八・七	記憶にございません。灰色高官。「北の宿から」
一九七五	昭和五〇	乙卯三九	九五・二九二・八	複合汚染。乱塾。「およげ！たいやきくん」

◇「不惑期」（四〇～四九歳） 人口は二〇一〇年一〇月一日。「国勢調査」総務省統計局

生年 干支 年齢 人口（男・女）万人 流行語・流行歌

- 一九七四 昭和四九 甲寅四〇 一〇〇・三九七・九 物価。超能力。ベルばら。「昭和枯れすすき」
- 一九七三 昭和四八 癸丑四一 一〇一・九九九・八 省エネ。日本沈没。福祉元年。「神田川」
- 一九七二 昭和四七 壬子四二 一〇〇・一九七・七 列島改造論。未婚の母。恍惚の人。「瀬戸の花嫁」
- 一九七一 昭和四六 辛亥四三 九七・四九五・五 脱サラ。ゴミ戦争。ピース。「また逢う日まで」
- 一九七〇 昭和四五 庚戌四四 九四・六九二・八 大阪万博。ウーマンリブ。「知床旅情」
- 一九六九 昭和四四 己酉四五 九三・〇九一・七 エコノミック・アニマル。「黒ネコのタンゴ」
- 一九六八 昭和四三 戊申四六 九〇・九八九・九 昭和元祿。ゲバルト。「恋の季節」 「星影のワルツ」
- 一九六七 昭和四二 丁未四七 九〇・八八九・五 中流。核家族。アングラ。「真赤な太陽」
- 一九六六 昭和四一 丙午四八 七〇・七七〇・三 丙午。交通戦争。「君といつまでも」
- 一九六五 昭和四〇 乙巳四九 八七・五八六・九 期待される人間像。しごき。「女心の唄」

◇「知命期」(五〇〜五四歳) 人口は二〇一〇年一〇月一日。「国勢調査」総務省統計局

生年	干支	年齢	人口(男・女)万人	流行語・流行歌
一九六四	昭和三九	甲辰五〇	八二・〇八一・二	俺についてこい。ウルトラC。「お座敷小唄」
一九六三	昭和三八	癸卯五一	七九・九七九・五	三ちゃん農業。「高校三年生」
一九六二	昭和三七	壬寅五二	七七・三七七・〇	人づくり。スモッグ。「いつでも夢を」 「王将」
一九六一	昭和三六	辛丑五三	七六・一七五・八	プライバシー。不快指数。「上を向いて歩こう」

一九六〇 昭和三五 庚子五四 七六・六七六・六 安保闘争。声なき声。「誰よりも君を愛す」

◇「パラレルゾーン期」(五五〜五九歳) 人口は二〇一〇年一月一日。「国勢調査」総務省統計局

生年 干支 年齢 人口(男・女)万人 流行語・流行歌

一九五九 昭和三四 己亥五五 七七・八七八・一 ご清潔でご誠実で。がめつい奴。「黒い花びら」

一九五八 昭和三三 戊戌五六 七五・七七六・三 団地族。ハイティーン。イカす。「港町十三番地」

一九五七 昭和三二 丁酉五七 七三・六七四・三 神武景気。よろめき。「有楽町で逢いましょう」

一九五六 昭和三一 丙申五八 七七・三七八・一 もはや戦後ではない。太陽族。「ここに幸あり」

一九五五 昭和三〇 乙未五九 八〇・〇八〇・八 ノイローゼ。三種の神器。「南国土佐を後にして」

◇これより「高年期」(六〇歳〜)

◇「高年期(還暦期)」(六〇〜六九歳) 人口は二〇一〇年一月一日。「国勢調査」総務省統計局

生年 干支 年齢 人口(男・女)万人 流行語・流行歌

一九五四 昭和二九 甲午六〇還暦 八〇・〇八一・一 死の灰。空手チョップ。「五木の子守唄」

一九五三 昭和二八 癸巳六一 八四・七八六・六 家庭の事情。八頭身。「街のサンドイッチマン」

一九五二 昭和二七 壬辰六二 八九・三九一・七 黄変米。ワンマン。「芸者ワルツ」

一九五一 昭和二六 辛卯 六三 九四・七 九七・三 逆コース。「高原の駅よさようなら」
 一九五〇 昭和二五 庚寅 六四一〇一・八一〇四・九 特需。金へん糸へん。「白い花の咲く頃」
 一九四九 昭和二四 己丑 六五一一一・一一一五・一 ニコヨン。「青い山脈」「長崎の鐘」
 一九四八 昭和二三 戊子 六六一一〇・〇 一一四・四 斜陽族。ノルマ。「湯の町エレジー」「異国の丘」
 一九四七 昭和二二 丁亥 六七一〇四・四 一〇八・八 不逞の輩。ゼネスト。「鐘の鳴る丘」
 一九四六 昭和二一 丙戌 六八 六四・八 六八・四 象徴。タケノコ生活。「東京の花売娘」
 一九四五 昭和二〇 乙酉 六九 六八・七 七四・〇 敗戦。ピカドン。一億総ざんげ。「リンゴの唄」

◇「高年期（古希期）」（七〇〜七四歳） 人口は二〇一〇年一月一日。「国勢調査」総務省統計局

生年	干支	年齢	人口（男・女）万人	流行語・流行歌
一九四四	昭和一九	甲申	七〇古希 八三・〇 九〇・三	鬼畜米英。学童疎開。「同期の桜」「お山の杉の子」
一九四三	昭和一八	癸未	七一 八〇・〇 八七・四	撃ちて止まん。学徒出陣。「若鷺のうた」
一九四二	昭和一七	壬午	七二 八一・六 八九・八	欲しがりません勝つまでは。「南から南から」
一九四一	昭和一六	辛巳	七三 七八・八 八七・三	八紘一字。国民学校。「めんこい仔馬」「里の秋」
一九四〇	昭和一五	庚辰	七四 七〇・一 七九・四	月月火水木金金。「暁に祈る」「紀元二千六百年」

◇「高年期（喜寿期）」（七五〜七九歳） 人口は二〇一〇年一月一日。「国勢調査」総務省統計局

生年	干支	年齢	人口(男・女)万人	流行語・流行歌
一九三九	昭和一四	己卯 七五	六〇・八	六九・一 複雑怪奇。靖国の母。「上海の花売り娘」
一九三八	昭和一三	戊寅 七六	六三・八	七三・九 相手とせず。大陸の花嫁。「麦と兵隊」「支那の夜」
一九三七	昭和一二	丁丑 七七喜寿	六四・三	七五・七 国民精神総動員。「別れのブルース」「海ゆかば」
一九三六	昭和一一	丙子 七八	六三・〇	七五・七 今からでも遅くない。「ああそれなのに」
一九三五	昭和一〇	乙亥 七九	五八・六	七二・三 人民戦線。暁の超特急。「二人は若い」「野崎小唄」

◇「高年期(傘寿期)」(八〇〜八四歳) 人口は二〇一〇年一〇月一日。「国勢調査」総務省統計局

生年	干支	年齢	人口(男・女)万人	流行語・流行歌
一九三四	昭和九	甲戌 八〇傘寿	五三・八	六八・〇 明鏡止水。「赤城の子守唄」「国境の町」
一九三三	昭和八	癸酉 八一	五一・九	六七・八 転向。ファシスト。「東京音頭」「島の娘」
一九三二	昭和七	壬申 八二	四八・九	六五・四 話せば判る。欠食児童。「影を慕いて」
一九三一	昭和六	辛未 八三	四五・一	六二・四 生命線。酒は泪か溜息か。「サムライニッポン」
一九三〇	昭和五	庚午 八四	四〇・六	五八・四 エロ・グロ・ナンセンス。「祇園小唄」「酋長の娘」

◇これより「長命期」(八五歳〜)

◇「長命期(米寿期)」(八五〜八九歳) 人口は二〇一〇年一〇月一日。「国勢調査」総務省統計局

生年 干支 年齢 人口(男・女)万人 流行語・流行歌

- 一九二九 昭和 四 己巳 八五 三七・二 五六・〇 大恐慌。大学は出たけれど。「東京行進曲」
- 一九二八 昭和 三 戊辰 八六 三三・九 五三・〇 狭いながらも楽しい我が家。「波浮の港」「君恋し」
- 一九二七 昭和 二 丁卯 八七 三〇・四 四九・八 何が彼女をさうさせたか。「ちやつきり節」
- 一九二六 昭和 一 丙寅 八八 米寿 二七・一 四七・三 文化住宅。モガ・モボ。「ヨサホイ節」「この道」
- 一九二五 大正 一四 乙丑 八九 二二・四 四二・五 軍教。ラジオ放送。円タク。「あの町この町」

◇「長命期(卒寿期)」(九〇〜九四歳) 人口は二〇一〇年一月一日。「国勢調査」総務省統計局

生年 干支 年齢 人口(男・女)万人 流行語・流行歌

- 一九二四 大正 一三 甲子 九〇 卒寿 一七・八 三七・〇 憲政の常道。メートルデー。「からたちの花」
- 一九二三 大正 一二 癸亥 九一 一三・八 三三・五 大震災。流言蜚語。「船頭小唄」「復興節」
- 一九二二 大正 一一 壬戌 九二 一一・三 二九・九 恋愛の自由。民衆芸術。赤化。「馬賊の唄」「砂山」
- 一九二一 大正 一〇 辛酉 九三 九・二 二六・〇 悪家主。プロレタリア。「七つの子」「赤とんぼ」
- 一九二〇 大正 九 庚申 九四 八・〇 二三・七 国調。示威運動。「聞け万国の労働者」「叱られて」

◇「長命期(白寿期)」(九五〜九九歳) 人口は二〇一〇年一月一日。「国勢調査」総務省統計局

生年 干支 年齢 人口(男・女)万人 流行語・流行歌

一九一九	大正	八	己未	九五	五・四	一六・六	デモクラシー。サボ。「背くらべ」「靴が鳴る」	
一九一八	大正	七	戊午	九六	四・五	一四・八	平民宰相。米騒動。赤い鳥。「浜辺の歌」「宵待草」	
一九一七	大正	六	丁巳	九七	三・六	一二・四	きょうは帝劇、あすは三越。「さすらひの唄」	
一九一六	大正	五	丙辰	九八	二・八	一〇・四	民本主義。是々非々。「サントルチア」「電車」	
一九一五	大正	四	乙卯	九九	白寿	二・〇	七・八	御大典。ナツチョラン。「恋はやさし」「乾杯の唄」

◇これより「百寿期」(一〇〇歳) 人口は二〇一〇年一〇月一日。「国勢調査」総務省統計局

生年	干支	年齢	人口(男・女)	万人	流行語・流行歌		
一九一四	大正	三	甲寅	一〇〇	一・五	六・二	大正琴。「カチューシャの歌」「朧月夜」「故郷」
一九一三	大正	二	癸丑	一〇一	一・〇	四・六	薩関。新しい女。「鯉のぼり」「海」「早春譜」
一九一二	大正	一	壬子	一〇二	〇・七	三・三	大正維新。閥族打倒。「都ぞ弥生」「春の小川」
一九一一	明治四四	辛亥	一〇三	〇・四	二・二	元始、女性は実に太陽であった。「二宮金次郎」	
一〇〇歳以上				〇・六	三・八	四・四	万人(二〇一〇年一〇月一日「国勢調査」)
一〇〇歳以上	男	七五八六	女	五万一二三四	五万八八二〇	人(二〇一四年九月四日「厚労省調査」)	
一九一〇	明治四三	庚戌	一〇四				主義者。小学唱歌。「春が来た」「われは海の子」
一九〇九	明治四二	己酉	一〇五				馬鹿な奴じゃ。マラソン。「ローレライ」「菩提樹」
一九〇八	明治四一	戊申	一〇六				浮華軽佻。耽美派。「人を恋うる歌」「ハイカラ節」

一九〇七	明治四〇	丁未一〇七			自然主義。美顔術。キリン。「旅愁」「故郷の廢家」
一九〇六	明治三九	丙午一〇八			黄禍論。成り金。無政府主義。「青葉の笛」
一九〇五	明治三八	乙巳一〇九			天気晴朗なれど波高し。二〇三高地。「戦友」
一九〇四	明治三七	甲辰一一〇			軍神。君死にたまふことなかれ。「日本陸軍」
一九〇三	明治三六	癸卯一一一			アジアは一つなり。人生不可解。魔風恋風。

改元

明治 45 || 大正元 1912. 7. 30

大正 15 || 昭和元 1926. 12. 25

昭和 64 || 平成元 1989. 1. 8

(2014.9.15 修正 堀内正範)